

2006 年度 音楽教育修士論文

イギリスのエリート養成学校における音楽教育に関する研究

ーセント・ポール大聖堂学校を事例にしてー

指導教員 饗場 知昭
笹野 恵理子

055068 高橋 詩穂

はじめに

筆者は、学部生のころから子どもの聖歌隊の指導を行ってきた。その合唱指導を通して、指導上さまざまな問題、疑問にぶつかり合唱指導法について学ぶようになった。さらに深く探求したいという思いから、大学院での研究を決意したわけである。

色々と勉強していく中で、ひとつの合唱団と出会った。それが、イギリスのセント・ポール大聖堂聖歌隊であった。彼らの澄んだ歌声と、今も伝統を守り続け大聖堂での責務を第一とすることに大きな感銘を受け、セント・ポール大聖堂聖歌隊の指導について研究してみたいとの思いが与えられたのである。

日本国内でもいくつかの聖歌隊あるいは合唱団の指導を見学し、また日本で行われてきた児童発声に関する研究についても検討を行った。しかしながら、やはり聖歌隊というものは元来ヨーロッパのものであり、あの澄んだ歌声はヨーロッパで培われたものである。日本における頭声発声の概念について大きな影響を与えたのも、昭和30年代に相次いで来日したウィーン少年合唱団やパリ木の十字架聖歌隊など少年聖歌隊であった。このようなことも踏まえて、イギリスでのフィールド・ワークを計画し、2006年4月から1ヶ月間ロンドンに滞在して調査を行った。ほとんど毎日セント・ポール大聖堂に通い、他の時間を利用して、ウェストミンスター・アビー聖歌隊、ウェストミンスター聖歌隊、ケンブリッジのキングス・カレッジ聖歌隊なども見学に行った。

幸いにも、セント・ポール大聖堂学校の訪問の許可を得て、5月には校長に聞き取り調査を行い、聖歌隊の合唱指導の見学をすることができた。

一方で、資料収集のためにセント・ポール大聖堂内にある図書館に入室する許可を得ることができた。図書館員のジョー・ウィズダム (Joseph Wisdom) 氏に相談し、さまざまな資料を紹介していただいた。筆者は主に学校カリキュラムに関する資料や、合唱指導法また聖歌隊の歴史に関する資料を収集していた。ところが、ウィズダム氏に紹介していただいた資料の中に、セント・ポール大聖堂学校卒業生の同窓会名簿があった。筆者はこの資料をみて、大変興味を覚えた。というのも、元来聖職者の育成や聖歌隊員の育成を目的として設立された聖歌隊学校の卒業生が、卒業後どのような職についているのか、また聖職者育成という本来の目的を現在も果たしているのかなど、様々な疑問がわいていきたのである。またこの資料を用いて、聖歌隊学校の教育の実態とその効果について追求できるのではないかと考えたからである。

急いでウィズダム氏に問い合わせ、他の図書館にもあたって現存する同窓会名簿を収集した。貴重な資料ゆえ、本来は許されない複写を、ウィズダム氏に無理を言ってお願ひした。滞在期間中には間に合わなかったのが、ウィズダム氏が後日、他の資料と共にロンドンから郵送してくださったのである。

本研究では、これらの資料をもとに検討を進めていく。時間的な制約ゆえ、その全てを分析することはできないが、これからの研究の導入として本研究を位置づけ取り組んでいきたい。

目次

はじめに	i - ii
序章 先行研究と課題意識	
第1節 先行研究の検討	…1
1. イギリスの音楽教育に関する先行研究の検討	…1
2. イギリスのエリート教育に関する先行研究の検討	…2
第2節 本研究の目的と方法	…4
第3節 研究範囲の限定	…5
第1章 セント・ポール大聖堂学校の位置と音楽教育の変遷	
第1節 イギリス教育史と教育制度	…8
—セント・ポール大聖堂学校を中心に	
1. イギリス教育史とパブリック・スクールの誕生	…8
(1) イギリス教育史の始まり	…8
(2) パブリック・スクールの誕生とその位置づけ	…10
2. 教育の始まりと現行イギリス教育制度	…12
(3) イギリス公教育の始まり	…12
(4) 第二次世界大戦後の教育と現行教育制度	…13
3. セント・ポール大聖堂学校の歴史的変遷とその位置づけ	…18
第2節 セント・ポール大聖堂の音楽カリキュラムの変遷	…20
—1930年代からの学校紹介パンフレットに見るカリキュラムの変遷	
1. “ <i>St. Paul’s Cathedral Choir School</i> ” 1937に見るカリキュラム	…20
2. SPCCS1952に見るカリキュラム	…21
3. SPCCS1967に見るカリキュラム	…21
4. SPCCS1975に見るカリキュラム	…22
5. “ <i>ST. PAUL’S</i> ” 1999に見るカリキュラム	…23
第2章 セント・ポール大聖堂学校の音楽教育の実際	…30
第1節 セント・ポール大聖堂学校のカリキュラムの分析	…30
1. セント・ポール大聖堂学校のカリキュラムの分析	…30
(1) セント・ポール大聖堂学校の教育の目的	…30
(2) セント・ポール大聖堂学校の現行カリキュラム	…31
2. セント・ポール大聖堂学校の音楽教育カリキュラムの分析	…33
(1) セント・ポール大聖堂学校の音楽教育カリキュラム	…33

(2) 聖歌隊学校の音楽教育カリキュラム	…34
第2節 セント・ポール大聖堂学校の実践の分析	…35
ーフィールド・ワークからみえる学校像	
1. 聖歌隊練習の分析	…35
2. 校長の聞き取り調査からみえる学校像	…39
(1) セント・ポール大聖堂学校校長の聞き取り調査	…39
(2) セント・ポール大聖堂学校と親の教育目的	…40
第3章 セント・ポール大聖堂学校における卒業生の進路調査	…46
第1節 分析の対象と分析方法	…46
1. 分析する対象について	…46
2. 分析方法について	…47
第2節 セント・ポール大聖堂学校卒業生の進路調査結果と考察	…48
1. 卒業生の進学中等教育機関の分析	…48
2. 卒業生の進学高等教育機関の分析	…50
3. 卒業生の職業選択の分析	…52
4. 音楽関係の職についての分析	…56
終章 結論と今後の課題	…60
第1節 各章の要旨	…60
第2節 結論	…61
第3節 今後の課題	…63
主要参考文献一覧	…65
おわりに	…70
謝辞	…72
資料 “Register” (1991)	…73

序章 先行研究と課題意識

本章では、先行研究の検討を通して、本研究の目的と研究方法を明らかにする。

第1節 先行研究の検討

本節では、イギリスの音楽教育に関する先行研究と、イギリスのエリート教育に関する先行研究の検討を行う。

1. イギリスの音楽教育に関する先行研究の検討

先行研究を検討するにあたって、CiNiiで「イギリス」「英国」「音楽教育」「聖歌隊」「音楽」「教育」という項目を用いて検索を行った。検索にかけた項目と検索結果、そして本研究の先行研究にあたるものの件数を下記表にまとめた。なお先行研究の件数には、重複しているものも含まれる。

表0-1 イギリスの音楽教育に関する研究

項目	検索結果	先行研究
「イギリス」「音楽教育」	13	9
「イギリス」「聖歌隊」	0	0
「イギリス」「音楽」「教育」	37	10
「英国」「音楽」「教育」	17	3

以上の検索結果から、イギリスの音楽教育に関する研究は非常に乏しいことが分かる。

これまでに蓄積されたイギリスの音楽教育に関する研究は、大きく次の2つに分けられる。第1に、イギリスの音楽教育の歴史に関する研究。第2に、イギリスのナショナル・カリキュラムの音楽に関する研究である。創造的音楽学習の研究もこれに含む。

イギリスの音楽教育の歴史的変遷に関しては、川原と石井（1971、1972、1973）¹が研究を行っている。川原と石井は、エリザベス朝の音楽教育、イギリス革命期の音楽教育、産業革命期の音楽教育の検討を行った。これらの研究をまとめると、次のようになる。

イギリスでは6世紀に誕生した聖歌隊学校は、以後約1000年間子どもたちの実際的な音楽教育を行った機関として重要な役割を果たし、音楽の高潔さを維持する大きな力でもあった。一方エリザベス朝では、隆盛を極めたイギリスの音楽文化が、学校と家庭を通してあらゆる階層の人々に深く浸透した。それにも関わらず、音楽教育は学校における人間教育のための価値あるひとつの要素としては見なされなかった。音楽はジェントルマン教育の象徴であり、家庭教育でたしなむ程度のものと考えられ、ほとんどの学校ではカリキュラムに組み込まれなかった。むしろ一般の子どもたちには無縁のものであった。イギリスの革命期、産業革命期には、民間人の慈善事業として、礼拝で会衆が賛美できるようになる

ために庶民の音楽教育が試みられたがあまりよい結果にはならなかった。ロンドンを中心として西洋音楽が発展していったのとは裏腹に、結局は18世紀の末期に至るまで、音楽は上流階級の婦女子の習い事として存在したことを明らかにした。

さらに川原（1974、1977、1982、1983、1984）²は、19世紀以降の音楽教育の検討を通して、J. ターナー（John Turner）、W. ヒクソン（William Hickson）、J. ハラー（John Hullah）、J. マインツェル（Joseph Mainzer）らが行った音楽教育実践の分析を行った。彼らの実践は唱歌教育中心であり、学校音楽教育誕生に大きく貢献した。1870年の初等教育法には、学校カリキュラムの中に「唱歌」という教科として音楽が取り入れられるようになった。公教育の音楽教育を強く推進したケイ・シャトルワース（K-ay-Shuttleworth）の取り組みや、彼の実践のひとつである師範学校における音楽教育の充実についてバタシー師範学校やセント・マークズ・カレッジ、チェスター師範学校などを例に分析を行っている。子どもたちに音楽教育を行う教師の質を高めることによって、19世紀中期は学校音楽教育が著しく発展したことを論証した。

ナショナル・カリキュラム導入後の音楽教育については、塩原（2002、2003、2004）³によって研究されている。塩原は、ナショナル・カリキュラムの音楽の内容、特にナショナル・カリキュラムによって区分されたそれぞれの段階の到達目標と評価、また義務教育修了時に行われる中等教育資格試験であるGCSE⁴の内容の分析を通して、イギリスの公立校における個々に応じた音楽教育の実態を明らかにした。また高須（2002、2003）⁵は、ナショナル・カリキュラムの音楽の中でも作曲領域を中心に検討を行っている。

以上のように、本項ではイギリスの音楽教育に関する研究の検討を行った。川原と石原による研究は、日本において未開拓であった分野を切り開いた研究として評価されよう。また塩原らによるナショナル・カリキュラムにおける音楽の内容とその評価方法の研究は、日本の音楽教育に示唆的である。

一方、聖歌隊学校はイギリス音楽史上重要な位置づけを持っており、その成立や役割について西洋音楽史研究などで言及されている。また、例えばダンスマガジン編『少年合唱団』のように少年合唱団あるいは少年聖歌隊として取り上げられることもある。⁶

しかしながら以上からは、本研究で対象とする聖歌隊学校の音楽教育の実態についての研究は見られなかった。したがって、本研究の直接的な先行研究は現段階において存在しない。

2. イギリスのエリート教育に関する先行研究の検討

先行研究を検討するにあたって、CiNiiで「イギリス」「エリート」「パブリック・スクール」「プレパラートリー・スクール（プレップ・スクール）」「音楽」「進路」の項目を用いて検索を行った。検索にかけた項目と検索結果、そして本研究の先行研究にあたるものの件数を下記表にまとめた。なお先行研究の件数には、重複しているものも含まれる。

表 0-2 イギリスのエリート教育に関する研究

項目	検索結果	先行研究
「イギリス」「エリート」	22	4
「パブリック・スクール」	44	10
「プレップ・スクール」	3	0
「エリート」「音楽」	14	0
「イギリス」「進路」	10	2
「エリート」「進路」	2	0

以上の検索結果と、筆者が収集したイギリスのエリート教育に関する文献から、イギリスのエリート教育に関する研究を大きくまとめると、以下の4つに分類される。

第1に、各界エリートとその学歴に関する研究である。第2は、19世紀のパブリック・スクールに関する研究であり、そのエリート養成学校としての確立、また生徒の社会的出自や進路などが特に研究されている。第3に、20世紀のパブリック・スクールと労働党を中心とした教育改革の研究である。第4は、エリート教育による階層化と文化的・社会的再生産の研究である。

イギリスのエリート教育に関する研究、殊にエリート養成学校として位置づいているパブリック・スクールに関する研究は、社会学や歴史学の分野で一定の成果が積み重ねられてきた。

T. W. バムフォード (T. W. Bamford) (1967) は、19世紀のパブリック・スクールの改革と発展について述べ、名門パブリック・スクール卒業生の職業の調査をした。⁷ この研究によると、19世紀の卒業生の職業は、次のような傾向にあることがわかった。まず、所領を相続する貴族・ジェントリー⁸の子弟が多い。また、軍人、法律家、行政官になる比率が増加した一方で、国教会の聖職者は減少傾向にあった。さらに科学・技術関係の職に関しては従事する者は少なく社会的評価が低かったことが分かった。

また村岡 (1980) ⁹は、「中流階級のジェントルマン化」という視点から教育を取り上げ、ジェントルマン理念の変容についてバムフォードらの研究成果に依拠しながら検討した。ジェントルマン理念の変容により、パブリック・スクールからオックスフォード大学あるいはケンブリッジ大学¹⁰へというジェントルマン教育コースが位置づいたと述べている。

W. D. ルービンSTEIN (W. D. Rubinstein) (1993) ¹¹は、19世紀のパブリック・スクールの生徒の社会的出自と卒業生の職業について徹底した資料調査を行った。そして1870年代以降におけるイギリス経済の「衰退」は、上流階級の「反産業精神」が生み出した文化的要因に起因するという観念に対するひとつの批判を加えた。それは、村岡も明らかにしたヴィクトリア朝以降に確立された実業家の息子の典型的な学校教育、すなわちパブリック・スクールからオックスブリッジという伝統的な教育機関こそ、「反産業精神」を生み出し、経済の「衰退」の原因であったとする「文化批判」である。これらの批判に対して、

生徒の社会出自とその職業の調査を行い、実際は入学した実業家の息子の多くが卒業後に実業界に入っていたことを明らかにし、再検討を迫った。

藤井（1999）¹²は、19世紀におけるパブリック・スクールの生徒の社会的構成、また進路について、バムフォードやルービンSTEINらの研究成果に拠りながら検討を行った。19世紀前半までは、パブリック・スクールの入学者は貴族とジェントリーからなる上流階級と、聖職者を中心とする上層中流階級が主流を占めたが、19世紀後半になると、法律家、将校、医師、大学教師などの専門職の子弟が占める割合が高くなったこと、また実業家の子弟が増加したことを明らかにした。卒業後オックスブリッジに進学した者は、聖職者、高級官僚、弁護士、大学教師などの専門職についていた。一方で19世紀のイギリス社会ではパブリック・スクール卒業という学歴だけで終える者も多く、彼らもまた専門職や軍人といった職に就いており、完成教育機関としてのパブリック・スクールを示した。

19世紀に再生したパブリック・スクール¹³は、現在でもエリート養成機関として存在している。G. ウォルフォード（G. Walford）（1986）¹⁴は、名門パブリック・スクールについての社会学的研究として徹底した研究を行った。1980年代からの教育における市場メカニズムの導入により、近年パブリック・スクールは変革を余儀なくされている。ウォルフォードは、パブリック・スクールを通じて社会的不平等が再生産されると問題視し、パブリック・スクールにみられるさまざまな文化形態を調査し分析を行い、現代におけるパブリック・スクールの姿を明らかにした。そして、パブリック・スクールは顧客にサービスを提供する学校とみなされなければならないと述べ、その将来像にまで言及した。

また竹内（1991、1993）¹⁵は、「大学受験」という切り口から、現代のパブリック・スクールについて分析し、日本の旧制高等学校との比較検討を行っている。さらに竹内（2002）¹⁶は、現代のパブリック・スクールへの親の期待とその現実についての調査を通じて、親の階層と文化的・社会的再生産について指摘している。

先述したように、イギリスのエリートに関してはすでに多くの研究が重ねられてきた。

しかしながら、エリート養成機関に関しては、中等教育機関あるいは高等教育機関を中心に研究されてきた。エリート養成機関の初等段階であるプレパラートリー・スクール¹⁷の歴史に関しては、ラインスター・マッカイ（D. Leinster-Mackay）（1984）¹⁸によって研究されているものの、この分野の研究はあまり蓄積されていない。またパブリック・スクール、あるいはオックスブリッジの卒業生の職業選択に関する調査は行われてきたが、中等教育以前の学校、すなわち初等教育段階の学校に関する調査はされていないことがわかった。とくに、エリートと音楽教育に関する研究はされておらず、本研究では音楽教育という切り口でエリート教育の検討を試みたい。

第2節 本研究の目的と方法

本研究は、イギリスのエリート養成機関の初等段階であるセント・ポール大聖堂学校¹⁹を事例に取り上げ、エリート教育における音楽教育の位置づけと意義を検討するものである。

セント・ポール大聖堂学校は、プレ・ブレップ・スクール²⁰とブレップ・スクール、そして聖歌隊学校から組織される学校である。そして、イギリスの教育体制の中で、いわゆるエリート教育機関として知られているパブリック・スクールへの進学校としても位置づく。よって本論では、セント・ポール大聖堂学校を聖歌隊学校として捉えるだけではなくブレップ・スクールとしての側面すなわちエリート養成学校としての側面から検討を試みる。

以上の研究目的を追求するために、以下のプログラムで検討を行う。

第 1 章では、まず本論が事例に取り上げるセント・ポール大聖堂学校のイギリスの教育体系における位置を明らかにし、同校における音楽教育の変遷について、イギリスの教育制度とカリキュラムの側面から明らかにする。第 2 章では、セント・ポール大聖堂学校の現行カリキュラムならびに合唱指導の実践の分析、また校長の聞き取り調査からみえる学校像を検討する。さらに第 3 章では、セント・ポール大聖堂学校の同窓会名簿から卒業生の進路を考察し、セント・ポール大聖堂学校における音楽教育の影響の一端を解明する。そして終章では以上の考察を通して、イギリスのエリート養成学校における音楽教育の位置づけとその意義を明らかにし、それが日本の音楽教育に示唆するものは何かを論じたい。

本研究では具体的な方法として、イギリスでの調査で行ったフィールド・ワークと入手した学校紹介パンフレットや同窓会名簿などの資料をもとに分析を進めていく。また卒業生の職業選択に注目し、ギルドカンパニー(Guild Company)から出版されている“Register”(1991)²¹の「Old Boys」いわゆる同窓会名簿から、卒業後の進路、職業を探ることによって、セント・ポール大聖堂学校での音楽教育について考察する。

進路選択は、両親の進学期待を含めたさまざまな社会・文化的背景の文脈の中で決定されるが、その文脈のひとつに学校での教育効果の文脈が存在していることには違いない。先行研究の検討を通して、パブリック・スクールの卒業生の進路調査はバムフォードやルービンSTEINらに代表される研究によってすでに検討されているが、ブレップ・スクールとりわけ聖歌隊学校の卒業生の進路調査は研究されていないことが明らかになった。この意味からも聖歌隊学校の卒業生進路を検討し、聖歌隊学校における教育をその視角から検討していくことは意義がある。聖歌隊学校における音楽教育を受けた子どもたちの進路選択を分析することによって、エリート養成学校における音楽教育の位置づけと意義、そのあり方を明らかにするとともに、そこから日本の音楽教育への示唆を試みる。

第 3 節 研究範囲の限定

本研究では、以下のように範囲を限定する。

- ① 本研究は、セント・ポール大聖堂学校を事例に検討を行うものである。
- ② 本研究は、イギリスのエリート体系の中でも初等教育段階を中心に検討を行う。
- ③ 卒業生の進路調査は、1991 年発刊の“Register”をもとに分析を行う。

- 1 川原浩, 石井博「イギリスにおける音楽教育の動態 (I) - エリザベス朝の音楽教育 -」『広島大学教育学部紀要 第一部』20 巻, 1971, pp.79-90

川原浩, 石井博「イギリスにおける音楽教育の動態 (II) - イギリス革命期の音楽教育 -」『広島大学教育学部紀要 第一部』21 巻, 1972, pp.95-105

川原浩, 石井博「イギリスにおける音楽教育の動態 (III) - 産業革命期の音楽教育 -」『広島大学教育学部紀要 第一部』22 巻, 1973, pp.105-116

- 2 川原浩「イギリスにおける音楽教育の動態 (IV) - 19 世紀中期における音楽教育の思潮と実践 -」『広島大学教育学部紀要 第一部』23 巻, 1974, pp.163-175

川原浩「イギリスにおける音楽教育の動態 (V) 19 世紀中期における音楽教育の思潮と実践 (B) ケイ・シャトルワーズの民衆音楽教育に関する理論と実践 (その 1)」『広島大学教育学部紀要 第一部』26 巻, 1977, pp.237-247

川原浩「イギリスにおける音楽教育の動態 (VI) - ケイ・シャトルワーズの民衆音楽教育に関する理論と実践 (その 2) -」『広島大学教育学部紀要 第一部』31 巻, 1982, pp.111-119

川原浩「イギリスにおける音楽教育の動態 (VII) - 19 世紀中期における学校音楽教育の発展 (その 1) -」『広島大学教育学部紀要 第二部』32 巻, 1983, pp.133-142

川原浩「イギリスにおける音楽教育の実態 (VIII) - 19 世紀中期における音楽教育の発展 (その 2) -」『広島大学教育学部紀要 第二部』33 巻, 1984, pp.157-165

- 3 塩原麻里「イギリスの中等音楽科教育に関する一考察 - ケースステージ 3 から GCSE へ -」『東京学芸大学紀要 第 5 部門 芸術・健康・スポーツ科学』54 巻, 2002, pp.19-29

塩原麻里「イギリスの音楽教育における評価 - ナショナルカリキュラムを中心にして -」『東京学芸大学紀要 第 5 部門 芸術・健康・スポーツ科学』55 巻, 2003, pp.25-34

塩原麻里「英国の音楽科教育におけるカリキュラムの変遷とその背景 - ナショナル・カリキュラム成立の過程とその導入 -」『東京学芸大学紀要 第 5 部門 芸術・健康・スポーツ科学』56 巻, 2004, pp.1-16

- 4 1986 年に導入された GCSE (General Certificate for Secondary Education) は、従来からあった 16 歳で受験する進学者向けの GCE (General Certificate of Education) の O レベル試験と就職者向けの CSE (General Certificate of Secondary Education) 試験の機能を組み合わせたかたちで導入されたもの。GCSE の音楽を受験するコースは、14 歳から 16 歳までの子どもたちを対象に、選択科目として公立の中等学校に設置されている。その他にも、GCE の A レベル試験の音楽シラバス、職業資格試験である GNVQ (General National Vocational Qualification) の音楽シラバスがあり、それらの内容と評価を体系化しているとうと計画されている。

塩原, 前掲書, 2002, p.19 参照。

イギリスの学外試験については、竹内洋「イギリス学外試験と大学入学者選抜 - 近年の変化と機会の不平等の視点から -」『京都大学教育学部紀要』1991, pp.62-79 に詳しい。

- 5 高須一「英国の学校音楽教育における『作曲領域』の変遷 (1)」『音楽文化教育学研究紀要』2002, pp.79-94

高須一「英国の学校音楽教育における『作曲領域』の変遷 (II)」『広島大学大学院教育

学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』2002, pp.501-507

6 ダンスマガジン編『少年合唱団 Boy's Choir 天使の歌声』新書館, 2004

世界各地の少年合唱団を取り上げて紹介したもの。日本の合唱団ブーム、教会音楽における少年合唱などの寄稿も含まれている。またウィーン少年合唱団員の息子を持つ日本女性が母と子の体験をつづった下記文献などもある。

バッハー・眞理『アウガルテン宮殿への道ーウィーン少年合唱団とともに』ショパン, 2002

7 Bamford, T. W., *Rise of the public schools a study of boys' public boarding schools in England and Wales from 1837 to the present day*, London, 1967

8 中世後期の英国で下級貴族が地主化して形成した階層。貴族とヨーマン（独立自営農民）の中間の位置に位置し、農業の商品生産化を進めて初期産業資本形成の主役となる。郷紳。

松村明監修「ジェントリー (gentry)」『大辞泉』小学館『大辞泉』編集部, 1995, p.1138

9 村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ書房, 1980

10 以下、本論では、オックスフォード大学とケンブリッジ大学両大学を意味するときは、一般的に用いられるオックスブリッジと記す。

11 W. D. ルービンSTEIN著、藤井泰、村田郁夫、平田雅博、千石好郎共訳『衰退しない大英帝国 その経済・文化・教育 1750-1990』晃洋書房, 1997

W. D. Rubinstein, *Capitalism, culture and decline in Britain 1750-1990*, Chapman & Hall Ltd., 1993

12 藤井泰「近代イギリスのエリート教育に関する研究ー19 世紀パブリック・スクールの生徒の社会的構成ー」『松山大学論集』249 巻, 1999, pp.97-121

藤井泰「19 世紀イギリスのパブリック・スクール出身者の進路」『松山大学論集』250 巻, 1999, pp.153-169

13 パブリック・スクールの再生については第 1 章で検討する。

14 G. ウォルフォード著、竹内洋、海部優子共訳『パブリック・スクールの社会学 英国エリート教育の内幕』世界思想社, 1996

Geoffrey Walford, *Life in public schools*, Methuen, 1986

15 竹内、前掲書, 1991

竹内洋『パブリック・スクール 英国式受験とエリート』講談社, 1993

16 竹内洋「イギリスの私立中学における親のか階層と文化的・社会的再生産」『大衆教育時代におけるエリート中等学校の学校文化と人間形成に関する比較研究』2002, pp.1-18

17 以下本論では、プレパラートリー・スクールの略称であるプレップ・スクールと記す。

18 Donald Leinster - Mackay, *The rise of the English prep school*, The Falmer Press, 1984

19 聖歌隊員以外の生徒の入学を受け入れるようになったことを受けて、1997 年にセント・ポール大聖堂聖歌隊学校からセント・ポール大聖堂学校と校名を改名した。

20 プレ・プレパラートリー・スクール。プレップ・スクールの予科であり、プレップ・スクール入学の準備を行う。

21 Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, Chase Web, 1991

第1章 セント・ポール大聖堂学校の位置と音楽教育の変遷

本章では、イギリス教育史と教育制度におけるセント・ポール大聖堂学校の位置と、セント・ポール大聖堂学校で行われる音楽教育の変遷について検討する。

第1節 イギリス教育史と教育制度—セント・ポール大聖堂学校を中心に

本節では、イギリスの教育史と教育制度についてセント・ポール大聖堂学校を中心に検討を行い、セント・ポール大聖堂学校の歴史的、また制度的な位置づけを明らかにする。

イギリスはイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドからなる連合王国であり、これらの地域は共通な点があるとはいえ、各々の教育制度が存在し、それぞれに伝統がある。ゆえに本稿では、セント・ポール大聖堂学校が位置するイングランドの教育を中心に述べる。

1. イギリス教育史とパブリック・スクールの誕生

(1) キリスト教機関による教育¹

イギリスの教育史は、この国にローマからキリスト教が伝えられたときに始まるとされる。² すなわち教皇グレゴリウス1世 (Gregory the Great, 在位 590-604) ³の命を受けて597年にイギリスに渡ったオーガスティン (St. Augustine) とその一行が新たに建設した大聖堂や教会に不可欠な一部分として開設した唱歌学校 (Song school) ⁴と文法学校 (Grammar school) ⁵が、イギリス最古の学校と目されるのである。ソング・スクール⁶は聖歌隊員養成のために、そしてグラマー・スクールは聖職者養成のために創られたものであった。それゆえこうした学校の多くは、初歩的な教育にとまるものであり、その目的も聖職者として十分なラテン語を教えることにあった。この有様について、田口も次のように述べている。

「学校での教授内容が唱歌と読み方であったこと、暗記学習が中心でその効果があまり上がっていなかったこと、鞭打ちの体罰が普通に科されていたこと、『初歩の読本』すなわち小祈とう書 (primer) がここでも教科書として使用されていたこと、などが察知できるのである。」⁷

教会儀式に欠くことのできない聖歌隊員を養成することが主目的とされていたので、教授内容は歌唱と教会儀式に用いられる祈祷書の読み方が中心であったことが分かる。またグラマー・スクールは、成立以来何世紀もの間、中等教育機関であるばかりでなく高等教

育機関としての機能をも果たしていた。⁸

12世紀には、少年のために6種類の教育機関があった。⁹ その第1は司教座聖堂付属学校(Cathedral school)であった。修道会司教座聖堂の場合は、学校は院外に設置され、修道士によって雇われた教師たちが教育に当たった。在俗司教座聖堂の場合は、学校は尚書役の監督下に置かれ、教育は文法教師によってなされた。

第2の教育機関は、司教座聖堂にはグラマー・スクールとは別に聖歌隊長(precentor)の監督下に付設されていた聖歌隊学校である。生徒は、聖務日課共踊を職務とする聖歌隊席の少年であったが、一般教育も教え込まれた。¹⁰ セント・ポール大聖堂では、1123年から少年聖歌隊員のための聖歌隊学校としての教育が始まった。8人の少年たちは、施し物として住まいと教育を与えられる代わりに、大聖堂の聖務日課において歌うことが必要とされたのである。次第に聖歌隊学校とグラマー・スクールができた。そして、聖歌隊員を卒業したらグラマー・スクールに進学して彼らの教育を終えるというように、長い間2つの学校は連携していた。¹¹

このように第3の教育機関として、司教座聖堂外では、共住聖職者聖堂もしくは大きな教会区聖堂付属のグラマー・スクールが存在した。12世紀におけるグラマー・スクールの普及は目覚しく、1200年までには、ほとんどの都市にこの種の学校が存在した。

第4の教育機関として、小規模な村落学校(Village school)が存在した。

第5の教育機関は、修道院内の修道志願児童のためのものであった。各修道院は年端もいかぬ少年に、誓願のための準備を施すことが聖ベネディクトゥスの会則¹²によって義務付けられていた。この種の教育は長い歴史を持っていたが、7歳のときに両親によってさげられた少年たちが満足すべき修道士に育たなかったので、この制度はすたれるにまかされ、回復されることはなかった。

第6の教育機関は、貴族の子弟が司教や大修道院長の館に住み込み、良い生活態度を学び、チャプレン(司教付き聖職者)や他の聖職者から教育を受ける習慣が一般化したものである。

以上が6つの教育機関であるが、ほとんどの少年にとって教育の目標は聖職叙階の準備であった。当時は人口の多くが上級もしくは下級聖職者であり、彼らの多くは、ラテン語の読み書きがかなりの程度できたと考えられる。簿記記帳は聖職者に任されていたので、聖職者候補は初歩的な算数を教え込まれたであろうし、単声音楽にも精通していなければならなかったであろう。しかし概して言えば、諸学校はラテン語文法教授のために存在した。グラマー・スクールと呼ばれるようになったのはそのためである。

先述したとおり、司教座聖堂や共住聖職者聖堂の付属学校は高等教育機関としても重要な役割を果たしたが、イングランドの大学の起源は別に求められる。大学における一般教育(studium generale)の理念は、12世紀初頭のフランスやイタリアの司教座聖堂付属学校に端を発している。ポロニアやパリの司教座聖堂付属学校の名声が高まるにつれ、多くの教師や学生が集まってくるようになり、組織化が急速に進んだ。教授資格者(masters)

たちはギルド（組合）を形成し、一般教育課程修了者たちを子弟として集め、当時のギルドで行われていた宗教儀式にならった入学式を挙行了。¹³

そして12世紀末から次世紀初頭にかけてオックスフォードおよびケンブリッジ両大学が自然発生的に誕生してからは、グラマー・スクールは次第に中等教育機関としての性格を鮮明にした。それに伴って教授内容も「あらゆる学問の基礎」としていわゆる七自由学科（Seven Liberal Arts）¹⁴の主意に位置づけられていた文法、ことに中世ヨーロッパ社会において国際語であったラテン語の文法に中心がおかれるようになった。¹⁵

一般信徒、すなわち庶民階級に対する教育はほとんど存在しなかったというべきであろう。大学へ進む者は既に下級聖職者であり、その一部は聖職禄受領者であった。グラマー・スクールや他の学校で学ぶ少年たちもほとんど聖職志願者であった。¹⁶

（2）パブリック・スクールの誕生とその位置づけ

パブリック・スクールとは19世紀になって用いられるようになった名称であり、もともとはグラマー・スクールであった。何らかの寄付による基本財源に基づき設置されたので、基金立グラマー・スクールと呼ばれ、オックスブリッジへの進学準備教育を行い、主に聖職者への道を開いていた。基金立グラマー・スクールは16世紀中ごろから17世紀中ごろにかけて多くの富裕な商人や名望家による寄贈を受け、全国の主要な町々に普及していった。¹⁷

具体的な例を、セント・ポール大聖堂の関連学校に見てみよう。16世紀¹⁸を迎えたイングランドには、代表的な人文学者が三人いた。ジョン・コレット（John Colet）、デジデリウス・エラスムス（Desiderius Erasmus）¹⁹、トマス・モア（Thomas More）²⁰である。その一人、ジョン・コレットはロンドンに生まれ、オックスフォード大学で教育を受けた。コレットは1505年にセント・ポール大聖堂の主席司祭となり、教会のあらゆる欠陥と不正に対する批判、広く横行していた腐敗堕落の断罪、真理に対する熱烈な憧れによって、偉大な説教者であることを示し、聖書研究においても新しい道を切り開いた。彼は、かつて大聖堂にあった学校が廃れているのを憂い、私財を投げうって158人の貧しい子供たちのためにセント・ポールズ校²¹を創設した。²² これは先述した大聖堂付属のグラマー・スクールの再建したものである。コレットは、学校の経営を彼の父がその組合員でもありかつ組合長でもあった、「絹織物商組合」（すなわちギルド）に一任した。中世時代の学校は、ほとんどが各種の教会すなわち聖堂、修道院、カレッジ、教区教会、礼拝堂に付属していた。ところがセント・ポールズ校は絹織物商組合に経営されている。大聖堂の境内に建てられた学校であったが²³、大聖堂の財政から独立しており、初代校長も非聖職者を任命した。²⁴ この点は、他の学校と違っている。

ヘンリー8世の治世、学校は修道院や礼拝堂の解散、財産没収（1536年小修道院解散法施行）の結果、自然廃校となった。子どもの教育に困った市民・父母たちは、自分たちの手で学校を再建し創立しようとした。裕福な個人、聖職者、市民たちは協力して学校を設立

した。これらの学校の全てがラテン語を教えるグラマー・スクールであり、そのほとんどが「^{フリー・スクール}無月謝学校」であった。これは、生徒全員またはその一部が月謝無料の学校である。²⁵ セント・ポールズ校は、入学時に支払うわずかなお金を徴収するだけで、入学者すべてを無償で受け入れた。月謝無料にすることによって、貧しさゆえに学ぶことのできない優秀な子どもたちに門戸を広げたのである。

こうして創設されていった学校が、19世紀にはジェントルマンを養成する学校となり、パブリック・スクールとして目されるようになっていった。その中でも、以下の9校が19世紀初頭にパブリック・スクールと目され、伝統ある9大パブリック・スクール²⁶とされている。創設順にウィンチェスター(Winchester College, 1382年)、イートン(Eton College, 1440年)、セント・ポールズ(St. Paul's School, 1509年)、シュールズベリー(Shrewsbury School, 1551年)、ウェストミンスター(Westminster School, 1560年)、マーチャント・テイラーズ(Merchant Taylors' School, 1562年)、ハロー(Harrow School, 1571年)、チャーターハウス(Charterhouse School, 1611年)である。チャーターハウスとセント・ポールズ校は通学制の学校であるが、それ以外はハウス(寄宿舎)を持つ全寮制の学校である。

パブリック・スクールは法律用語ではなく、フォーク・コンセプト(日常語)であり明確な定義はない。ではなぜ私立であるのに、パブリック(public)が用いられるようになったかにはいろいろな説がある。それは先述したように、貧しい子どもたちを受け入れていたこと、また地域を問わずに受け入れていたことからパブリック・スクールすなわち公の学校と呼ばれるようになったという説などがある。パブリック・スクールは、現在は非常に授業料の高いことで知られている²⁷が、先述したようにもともととは比較的貧しい優秀な子どものための学校であった。²⁸ しかし、授業料を払う私費生も受け入れていた。そこへ上層階級の息子、とくに所領の継げない次三男が送り込まれるようになった。やがて学校側も財政困難になり、裕福な家庭の子弟を私費生として積極的に受け入れざるを得なくなったのである。現在、生徒全員の授業料が無料のパブリック・スクールはほとんどないが、多くのパブリック・スクールは様々な奨学金制度をもうけている。

パブリック・スクールの数が大幅に増えたのは、産業革命で台等した新興ブルジョア階級が、師弟の教育の場を求めるようになったからである。²⁹ 藤井は、この点についてパブリック・スクール入学者の社会的出自から明らかにしている。³⁰ 19世紀前半まではパブリック・スクールの入学者は貴族やジェントリーの上流階級と、聖職者を中心とする上層中流階級が主流を占めていた。しかし1840年代ごろから「中流階級のジェントリー化」を背景に、ジェントルマンの牙城であったパブリック・スクールは量的拡大(9校から100校余り)を果たした。この結果、入学者の社会的出自にも変化が見られ、地主ジェントルマンが占める割合が減少し、中流階級の入学者が多くを占めるようになった。それは、産業革命による工業化や都市化の進展に伴って、産業ブルジョワジーや専門職などの中流階級が経済的に豊かになり、とりわけ中流階級のなかでも富裕な上層の人たちの間で、ジ

ェントルマン教育すなわちパブリック・スクールに対する需要が高まったからである。上記の 9 校のパブリック・スクールがいくら生徒数を増加させても、量的には限界があったので、1840 年代以降、多くの学校が創設されたのである。

19 世紀初頭までのパブリック・スクールは、低い道徳的水準、古典に偏った貧弱なカリキュラムに加えて、ハウスは少年たちの無法地帯となっていた。しかし 1828 年にラグビー校に着任したトマス・アーノルド (Thomas Arnold) 校長³¹は、それらの問題を改善へと導き、パブリック・スクールに改革をもたらした。そしてパブリック・スクールは、アーノルドによってジェントルマン教育の場としての学校の位置づけを確立されたのである。

またアッピンガム校 (Uppingham School) に 1853 年に着任したエドワード・スリング (Edward Thring) 校長は、生徒ひとりひとりの能力身長のために、多様な教育活動を用意し奨励した。古典、英語、数学からなる必修科目は午前中にすませ、午後の授業に自然科学、絵画、音楽、木工、金属細工、スポーツなどといった選択科目を当てた。1856 年には、はじめて音楽を一教科として導入し³²、音楽には最も力を入れて音楽の指導者には人材をえて、以後アッピンガム校は音楽教育の伝統を誇る。³³

このような古い歴史と伝統を持っているパブリック・スクールは、イギリスの学校のプロトタイプとして存在してきた。現在の公立校である選抜制グラマー・スクールも、パブリック・スクールをモデルとして創られた。³⁴

またパブリック・スクールの教師は、カリキュラムの開発に深く関わってきた。³⁵ ラテン語の教授法だけではなく、主要科目のカリキュラム開発の先頭に立ち、既存の教科で新しい教授法を提案したり、新しい教科分野を推進したりする上で中心的な役割を果たしてきた。パブリック・スクールで練られた構想が、しだいに公立校にも採用された。特に、科学教授法の領域では大きく貢献している。³⁶

すでに述べたように、19 世紀に量的拡大したパブリック・スクールは、次第にジェントルマンの子弟、実業家や専門職などの富裕な中流階級の子弟が行く学校³⁷になり、オックスブリッジ入学への道筋となった。現在は廃止されたが、つい最近までオックスブリッジに優先的に入学できる枠すらパブリック・スクールはもっていた。そして各界のエリートを多く輩出し、エリート養成学校としての位置づけを確かにしたのである。

さらに 19 世紀後半には、パブリック・スクールの初等段階にあたるプレップ・スクールの創設ブームが起こり、パブリック・スクールの予科として広く普及した。かくして、19 世紀後半には、学校体系上プレップ・スクールからパブリック・スクール、そしてオックスブリッジへという完結したエリート教育システムが成立したのである。³⁸

2. 公教育の始まりと現行イギリス教育制度

(1) イギリス公教育の始まり

1870 年、初等教育法 (Elementary Education Act 1870) によって、イギリスの公教育

は開始された。一方日本の義務教育は1872年に学制発布に始まった。日本とイギリスでは年数的な開きはないが、そのスタイルは大きく違う。日本は学制の発布により、それまでの寺子屋教室はすべて廃止され、国が学校を統治することになった。しかしイギリスは、それまで各地で実施されていた教育機関が整備され、制度として確立されたにすぎなかった。当時イギリスには、英国国教会が運営する初等学校「ナショナル・スクール」と呼ばれる学校が存在していたほか、非宗門の初等学校「ブリティッシュ・スクール」も存在していた。また先述したように、パブリック・スクールの初等学校として「プレパラートリー・スクール」が存在していた。³⁹ イギリスでは、日本のように政府の管轄下に新たに教育制度を開始したのではなく、すでに各種の機関に属していた学校を継続する形になった。つまりこのような公教育のはじまりが、現在の複線型の教育制度を生み出したと考えられよう。

1902年の教育法（Education Act 1902）の成立に基づいて、1870年の初等教育法で地方教育行政機関として設置された学校教育委員会（Board School）は廃止され、その権限が新しい地方教育当局（Local Education Authority）⁴⁰に移譲された。この教育法によっても、私学学校と公立学校は共存する形になったので、公立学校は公立学校としての意義と役割を明確に果たそうとするようになった。そして1918年の教育法（Education Act 1918）により5歳以後14歳までの完全な就学が義務化された。⁴¹

一方、1917年から導入された外部機関による資格試験では、美術や技術、家庭科とともに<グループ4>の1つに音楽は定められた。これによって音楽は、卒業資格や大学進学には関係のない科目となったために、学校教育における位置は二次的なものであった。しかし1938年にはそのような規定がなくなり、また1965年から始まった中等教育修了資格試験であるGCEに音楽が加わったことにより、学校教育における音楽科の存在が確認されたのである。⁴²

（2）第二次世界大戦後の教育と現行教育制度

第二次世界大戦後のイギリスの教育行政制度は、「（教師の）教育の自由」を根幹として、国家は教育内容に介入せず、LEAと学校が協力するといういわゆる「パートナーシップ」原理で運営されているといわれてきた。日本の地方教育制度とは異なり、中央政府は間接的な財政的統制以外はなんら直接的統制手段を持たず、もっぱら指導助言を行うと理解されてきた。⁴³

しかし1979年に誕生したサッチャーを党首とする保守党政権は、1980年代に経済の衰退および教育の荒廃を克服するために大胆な教育改革に着手した。1988年には教育改革法（Education Reform Act 1988）の成立、その改革がナショナル・カリキュラムの導入も含めて、学校教育の様々な分野に反映された。⁴⁴ つまりこの改革によって、ナショナル・カリキュラムすなわち全国統一カリキュラムの実施が進められるとともに、これまでは地方自治体の方針を勘案してカリキュラムを決めていた校長の権限が縮小され、国からの補助

金を受けるのに伴い、国による管理が強まったのである。⁴⁵

1988年の教育改革法はまた、7歳、11歳、14歳、16歳時に行うナショナル・テストをイングランド全ての公立学校に導入しつつ、他方で通学区域および通学指定校制度の撤廃と親の学校選択など⁴⁶を導入した。義務教育修了時（16歳）に行われる試験は、公立、私立学校共通で行う。そしてこれらのテストの結果は、通称リーグ・テーブル（学校番付表）として全国に公開される。その真意は、親の学校選択に関する情報提供と学校の教育成果に対する責任を明らかにすることである。このテストは、ただテストの得点によって評価されるのではなく、各段階の前段階からの生徒の成績向上率も評価されている。

教育科学省（Department of Education and Science）は、1992年から義務教育年齢の5歳から16歳までの公立学校の教育課程に、3つの中心科目を含む基礎科目の指定を行った。そしてナショナル・カリキュラムにしたがって、5歳から7歳までをキーステージ1（第1学年から第2学年）、7歳から11歳までをキーステージ2（第3学年から第6学年）、11歳から14歳までをキーステージ3（第7学年から第9学年）、14歳から16歳までをキーステージ4（第10学年から第11年）として教育することを義務付けた。キーステージの最終段階では、学力試験とコース・ワークの評価を組み合わせた進学のための学外試験 GCSEが行われる。（下記図 1-1 参照）進学を希望する生徒はさらにシックス・フォーム⁴⁷で2年間の教育を受けたあと、GCE の<A レベル>試験を受けて大学へ進む。また1995年から新たに職業資格試験である GNVQ も開始された。⁴⁸

<図 1-1> 初等・中等教育全国一斉テストの内容⁴⁹

〔KS1〕 プライマリー・スクール（5～7歳）

基礎3教科（英語・算数・理科） ⇒全国テスト7歳
成績評価8段階
8最高、7、6、…2、1

〔KS2〕 プライマリー・スクール（8～11歳）

基礎3教科の他必修6教科 ⇒全国テスト11歳

〔KS3〕 セカンダリー・スクール（12～14歳）

上記9教科に外国語プラス ⇒全国テスト14歳

〔KS4〕 セカンダリー・スクール（15～16歳）

義務教育修了時（私立校も含め） ⇒16歳「全国学力試験」
GCSE：中等教育修了一般資格試験 →合格8段階グレード

<図 1-2>は、現在のイギリスの学校制度を記したものである。イギリスの義務教育は、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの 4 つの国とも、5 歳から 16 歳までの 11 年間である。公立校と私学学校では初等学校の入学年が違ふことから分かるように、イギリスの教育体制は複線型であり、公立校と私学学校では教育体制に違いがある。

公立校は、初等教育 6 年と中等教育 5 年に区分される。初等学校 (primary school) は、前期 2 年の幼稚部 (Infant) と後期 4 年の下級部 (Junior) とに区分されている。中等教育は 5 年間であるが、労働党が力を注いでいたコンプリヘンシブ・スクール (Comprehensive school) という「総合制の中等学校」が 3,424 校と、その数では他を圧倒している。古くから選抜制公立進学校として各地域で人気のあるグラマー・スクールは 233 校。また、シティ・テクノロジー・カレッジは、1988 年の教育改革法によって 1988 年から 1993 年にかけて、イングランドの都市圏に 14 校創設された。大都市に住む 11 歳から 18 歳の子どもに、一般的な中等教育に加え実践的な技術教育を施そうと、政界・産業界が基金を出し合って創られた。公立校としてスタートしたが、現在は 2 校を除いて私学学校として学校を維持している。私学学校に含まれているシティ・テクノロジー・カレッジ (City Technology Colleges) は 11 校である。

私立の場合、公立の初等学校に対応するのがプレップ・スクールやプレ・プレップ・スクール⁵⁰である。本研究の対象であるセント・ポール大聖堂学校には、プレ・プレップ・スクールとプレップ・スクールがある。中等教育機関であるパブリック・スクールは、伝統校では入学が 13 歳、通学生だけのパブリック・スクールや女子の私学では 11 歳入学が多い。⁵¹ パブリック・スクールとは、先述した通りフォーク・コンセプトであるので、(財政面など政府から独立しているから) インデペンデント・スクールや、イギリスの教育雇用訓練省 (Department for Education and Skills)⁵²は、ノン・メインテインド・スクール (non-maintained school) とも言う。

また、すべての私学学校をパブリック・スクールと言うわけではない。この線引きは明確にはされていない。先述した 9 大パブリック・スクールのような伝統校だけを指すという考え方もあるが、一般的に校長会議 (The Headmasters' and Headmistresses' Conference)⁵³に加入している学校はパブリック・スクールと考えられている。HMC とは、イギリスとアイルランドの私立学校のうち主要な学校、約 250 校の校長のための組織である。この組織には英国の公立学校の校長 30 名、引退した校長 40 名、国際的なメンバー 60 名も含んでいる。この HMC は、校長のリーダーシップとマネージメントを、互いに助言し支えあっていくものであり、この会議のメンバーであることは、学校つまり校長の優秀さを証明するものであり、その学校がパブリック・スクールとしてみなされる一つの基準である。⁵⁴

すでに述べたように、イギリスは様々な教育改革によってより複雑な教育体制が形成された。さらに生徒獲得競争による教育水準の向上を目指して、イギリスの親には学校の選

択権が与えられ、学校は変革を余儀なくされている。それは公立校だけではなく、私学学校にも大きな影響を及ぼしている。

私学学校に起こっている変化についてまとめると次のようになる。⁵⁵

パブリック・スクールの伝統的なイメージは、授業料が高額で裕福な家庭の子弟を対象にした全寮制の男子校というものであった。しかし、1967年には生徒の57%が寮生であったのに対し、1996年には24%にまで減少した。またそれにともなって全寮制をとっているパブリック・スクールも減少した。現在は私学学校の多くが通学制の学校であり、寄宿制をとっている学校も通学制と併用している。⁵⁶ 保護者が通学制のパブリック・スクールを選ぶのは、全寮制の授業料は通学制よりも平均して2.7倍も高いという経済的な面もあるが、保護者がパブリック・スクールをGCSEやGCEなどの学外試験や大学入学の手段としてみる傾向が多くなったからであると考えられる。

さらに、パブリック・スクールでは共学化が進展している。パブリック・スクールがはじめて女子を受け入れたのは1970年代である。はじめはシックス・フォームにのみ受け入れ始めたが、次第に1年生から女子の入学を認める学校が増えてきた。1974年においては、女子生徒は3%に過ぎなかったが、1996年には22%にまで増加した。女子への門戸開放の理由は、男女の機会平等理念の浸透だけではなく、生徒数の確保や優秀な女子生徒の入学による学外試験の成績や大学進学率を高めたいという利害動機も背後にあったことは否めない。

学外試験などの資格試験がない時代には、パブリック・スクール出身というだけで威信が得られた。しかし選抜制グラマー・スクールのオックスブリッジ入学率の上昇、また学外試験における成績の上昇により、パブリック・スクールの競合相手が現れた。先述したように、オックスブリッジ入学の優先枠も廃止され、いよいよパブリック・スクールは勉学重視の傾向にならざるを得なくなったのである。

<図 1-2> イギリスの学校制度（学校数は 2006 年度）⁵⁷

23						
22	大学院					
21						
20		大学（国立）				
19		大学（私立）				
18			高等教育カレッジ（国立）			
	私学学校 2,493 校		公立学校			
17			シックス・フォー	シックス・		
16	シックス・フォーム	ーム	ーム	フォーム		
15	独立学校					
14	パブリック・スクールなど	コンプリヘン	シブ・スクール	グラマー・	セカンダリ	シティ・
13		3,424 校	233 校	スクール	ー・モダ	テクノ
12				115 校	ン・スクー	ロジー・
11						カレッ
10						ジ
9	プレップ・スクール					2 校
8	男子校では 13 歳まで、女子					
7	校では 11 歳までが多い。共					
6	学校は流動的。					
5						
4						
3						
2						

3. セント・ポール大聖堂学校の歴史の変遷とその位置づけ⁵⁸

604 年、聖パウロに捧げるキリスト教司教座聖堂、セント・ポール大聖堂がロンドンに設立され、それと同時に聖歌隊学校も設立された。大聖堂というものは、管区である地域社会の中で常にいくつもの役割を担ってきたところである。本来の目的が人々を神に導くことにあることは言うまでもないが、長い歴史を通して、時に商取引の中心地、戦時には要塞そして聖域として、また管区の富と力を反映する権威の象徴としての役割を果たしてきた。こうした幾多もの役割を通じて、セント・ポール大聖堂は、首都ロンドン、さらには全国民のための大聖堂⁵⁹として重要な存在となっている。

今日セント・ポール大聖堂には、オルガン奏者、副オルガン奏者、オルガン奏者助手、祈祷書の一部を歌う男性 18 人の聖歌助手 (Vicars Choral) ⁶⁰、約 40 人の少年聖歌隊員で構成された聖歌隊がある。この 40 名の少年聖歌隊員は、みな聖歌隊学校、すなわちセント・ポール大聖堂学校で学ぶ少年たちである。かつて聖歌隊は、8 名ほどの少年で構成されていた。男性と少年からなる聖歌隊に関する最初の記録が残されているのは 1127 年である。また少年の合唱指導を担当するために、初めて外部から指導者が任命されたのは 1263 年である。それ以前は、大聖堂に従事していた教区主管代理や聖職者が少年たちを指導する程度のものであった。⁶¹

そして歴史を重ねながら、セント・ポール大聖堂の少年聖歌隊は有名になり、ポールズ・チルドレン (Paul's Children)、セント・ポールの少年たち (St. Paul's Urchins)、セント・ポールの子どもたち (The Children of St. Paul's) など、様々なニックネームで呼ばれるようになった。16 世紀には演劇に手を広げて、エリザベス 1 世の寵愛を受ける劇団の一つとなり、晩刻には王宮で上演し、翌日の合唱練習に間にあうようにテムズ河沿いにボートを滑らせなければならぬほどの人気であった。

彼らはチャペル・ロイヤル (ロンドンにおいて、これはチャペル・ロイヤル自体に加えて、ウェストミンスター・アビーやセント・ポールを意味していた) や、他のあらゆる国立の参事会または大聖堂聖歌隊の中で大変重要な位置付けをもっていた。いったん少年聖歌隊に入ると、少年たちは良い音楽教育を受けることができた。さらに、彼らが (現代よりはるかに遅い時期に) 変声期に入ると、チャペル・ロイヤルからの聖歌隊員には、学位の資格が与えられた。セント・ポール大聖堂の聖歌隊長の契約書には次のように申し送られていた。「少年たちに短い教理問答を内容とするキリスト教の基礎、書き方、そして彼らが聖歌隊員として使えることができるように音楽の技術と知識を教える彼らはまた、徳と、礼儀正しく上品な作法を身につけるように教育されねばならない。」⁶² ここにも、ジェントルマン教育としての学校、すなわちパブリック・スクールの原型を見ることができる。

クリストファー・レン (Christopher Wren) が建てた現在のセント・ポール大聖堂 (1710 年完成) には、あらゆるタイプの音楽家が集まった。彼らは入念な計画を立て、これに音楽出版社や楽器製造者も協力し、イングランドで最初の公開演奏会を開き、聖歌隊のオラトリオを演奏した。ヘンデル (G. F. Händel) やメンデルスゾーン (F. Mendelssohn) も、

さまざまな機会にセント・ポール大聖堂で演奏し、よくオルガンの練習をしていたようである。

1872年には、新しいオルガンが造られ、ジョン・ステイナー（John Stainer）がオルガニストとして任命された。そして彼は、大きくなったオルガンと聖歌隊席に合わせて、40人の少年と18人のヴィカル合唱団からなる聖歌隊を提案した。さらに、ヴィカル合唱団により多くの練習時間を要求し、より専門的なアプローチをしてその質を高めていった。ヴィカル合唱団は音楽のレパートリーを広げることによって、音楽の伝統を守り伝える役目を担っている。

19世紀になると、少年聖歌隊員に対する相応な学校教育の必要性が明白になってきた。1811年に、良家の未婚女性マリア・ハケット（Maria Hackett）は、少年たちが正式な教育を受けるべきだと提案した。彼女は60年間セント・ポール大聖堂のすべての礼拝に出席しながら、他の大聖堂にも赴いて見学に行き、少年たちの教育環境改善に尽力した。

第一次世界大戦中、聖歌隊員はロンドンにとどまり、空襲の中で歌い続けた。第二次世界大戦は戦火を逃れ、安全な田舎に疎開した。彼らは大聖堂の250周年を祝うために、1947年にはロンドンに戻っていた。

1967年、校舎が大聖堂の東部に移転して現在の校舎が完成した。1998年までは、寄宿している38名の聖歌隊員しか学校は受け入れなかった。しかし教育の目的と期待の変化により、聖堂参事会は通学生を受け入れることを決定した。はじめは男子生徒だけ受け入れていたが、2000年9月からは男女共学になり、さらにプレ・プレップ・スクールを併設して、4歳から13歳までの子どもを受け入れている。こうした変化を反映して、1997年には「セント・ポール大聖堂聖歌隊学校」であった校名から「聖歌隊」の文字が消え、「セント・ポール大聖堂学校」となり、その翌年から、聖歌隊員以外の生徒を受け入れるようになった。

現在学校では、13歳までの児童約160名と、大聖堂の給費生である40名の少年聖歌隊員が学んでいる。生徒は全員同じように音楽の授業を受けるが、聖歌隊員には週に22時間の歌唱練習が追加されるほか、CDの録音なども行い、海外に演奏旅行へ行く。子どもたちの中には、オペラや演劇の才能を認められる者や、自分のCDを録音してテレビ出演をする者もいる。

以上のように、セント・ポール大聖堂学校は長い伝統を誇る学校であり、イギリスのロンドン、しかもその中心に位置するセント・ポール大聖堂は、音楽活動においても中心的な存在であった。そしてその音楽活動に、大聖堂学校の子どもたちは携わってきたのだ。さらにセント・ポール大聖堂学校は、その伝統に固執せず、新しい時代に求められる教育のニーズに応じて適応し変革している。

まとめればセント・ポール大聖堂学校は、私学学校体系の中に位置するプレパラートリー・スクールであり、イギリスの複線型の教育体系に沿って、多くのエリートを輩出してきたと考えられる。すなわち、セント・ポール大聖堂学校は、エリート養成に携わってきた学校であると位置づけられよう。

第2節 セント・ポール大聖堂の音楽カリキュラムの変遷

ー1930年代からの学校紹介パンフレットに見るカリキュラムの変遷

本節では、セント・ポール大聖堂学校においてどのようなカリキュラムが組まれていたのか、1930年代以降の学校紹介のパンフレットを通して検討を行う。なお、これはロンドンのギルドホール図書館 (Guildhall Library) に所蔵されていたものを基準としているので、筆者が入手できたパンフレットは、1937年以降のものとなるが、それ以前のもは所蔵されていなかったことをあらかじめ断っておく。またセント・ポール大聖堂内にある図書館においても所蔵されていない。図書館員ジョー・ウィスダム (Jo Wisdom) 氏の話によれば、この2つの図書館に所蔵がなければ他では入手できないとのことであるから、これが現存する最も古いものであるともいえよう。

1. “*St. Paul’s Cathedral Choir School*” (SPCCS) ⁶³1937に見るカリキュラム

1937年に発刊された SPCCS (現在は *St. Paul’s Cathedral School* と改名) によれば、学校のカリキュラムは以下のように書かれている。

「学校は完全に大聖堂聖歌隊員のための学校教育である。聖堂参事会長や聖堂参事会、また大聖堂基金は生徒たちの食事や教育にかかる費用を支払うので、両親は衣服や通学にかかる所要経費と小遣いだけを持たせるだけでよいし、保証金として聖堂参事会長と聖堂参事会に20ポンドほど預ければよいのである。学校は38名の寄宿生の収容能力を持っている。通学生徒は許可していない。カリキュラムは通常はパブリック・スクールを目指して準備のために提供されているが、それには宗教的な知識、古典、フランス語、数学、そして通常のイギリスの科目が含まれている。また学校で与えられる定期的な歌唱や音楽理論の教授を受ける他に、少年たちは聖歌隊員として彼らの能力を高めるために、ピアノやヴァイオリン、チェロの個人教授を受けることを奨励されている。これらのレッスンに対する料金は、最もふさわしい生徒に与えられる補助金として聖堂参事会長と聖堂参事会によってある程度払われる。選択科目は絵画と技術⁶⁴が用意されており、そのためのわずかな料金は請求される。クリケットとフットボールを屋根の上にある校庭で毎日する。」⁶⁵

セント・ポール大聖堂学校のカリキュラムは、パブリック・スクールに進学するための準備のために組まれており、古典などパブリック・スクールの特徴的な科目が据えられている。音楽教育に関する記述からは、歌唱指導だけではなく、音楽理論、また楽器の演奏の学習がなされていることがわかる。

パブリック・スクールにおいて課外活動が重視されているように、セント・ポール大聖

堂学校でも、体育は重点に置かれていたようである。それは、同窓会名簿である“Register”に、クリケットとフットボールの歴代キャプテンの名が記されていることから考えられる。

また、通常のプレパラートリー・スクールにかかる多額の授業料は課せられておらず、聖歌隊員は給費生として学んでいる。

2. SPCCS1952 に見るカリキュラム

1952 年に発刊された SPCCS では、1937 年のパンフレット同様に、学校入学時に必要な経費の記述の後、次のように記されている。

「学校は 38 名の寄宿生の収容能力を持っている。通学生徒は許可していない。教育省は学校を視察して、学校が有能であることを認めた。カリキュラムは通常はパブリック・スクールを目指す準備のために提供されているが、それには宗教的な知識、古典、フランス語、数学、そして通常のイギリスの科目が含まれている。また学校で与えられる定期的な歌唱や音楽理論の教授を受ける他に、少年たちは聖歌隊員として彼らの能力を高めるために、ピアノやヴァイオリン、チェロや他の楽器の個人教授を受けることを奨励されている。これらのレッスンに対する料金は、最もふさわしい生徒に与えられる補助金として聖堂参事会長と聖堂参事会によってある程度払われる。選択科目は美術とハンディクラフトが用意されており、そのためのわずかな料金は請求される。クリケットとフットボールを屋根の上ある校庭で毎日する。」⁶⁶

1937 年の内容とほとんど相違はないが、教育省の学校を視察したことが記されている。カリキュラムの内容では、個人教授の楽器の種類が増え、また選択科目が変更された。

3. SPCCS1967 に見るカリキュラム

1967 年に発刊された SPCCS では、1937 年のパンフレット同様に、学校入学時に必要な経費の記述の後、次のように記されている。

「学校は 38 名の寄宿生の収容能力を持っている（30 名の聖歌隊員と 8 名の見習い）。教育科学省（Department of Education and Science）は定期的に学校を視察し、学校が有能であることを認めている。通常カリキュラムは、パブリック・スクールを目指す準備のために提供されている。それには宗教的な知識、古典、フランス語、数学、そして通常のイギリスの科目が含まれている。少年は、LEA の 11 歳試験の手続きを申し

込むことができる。また学校で与えられる定期的な歌唱や音楽理論の教授を受ける他に、少年たちは聖歌隊員として彼らの能力を高めるために、ピアノやヴァイオリン、チェロ、フルートや他の楽器の個人教授を受けることを奨励されている。これらのレッスンに対する料金は、最もふさわしい生徒に与えられる補助金として聖堂参事会長と聖堂参事会によってある程度払われる。選択科目は美術とハンディクラフトが用意されており、そのためのわずかな料金は請求される。クリケットやフットボール、陸上競技をするために、毎週 2 回、郊外にあるすばらしい私有の競技場へ少年たちを連れて行く。また試合は学校の運動場でもできる。さらに学校は、プールと立派な体育館も持っている。」⁶⁷

1952 年と比べ、新たな運動競技場が増えていることがわかる。1952 年は、屋根の上で運動を行っていた。すなわち学校内で競技を行っていたようだが、屋外に競技場を設け、学内にはプールが新設されている。スポーツのカリキュラムにさらに重点を置くようになったことを読み取ることができる。

また 1967 年のパンフレットに登場した「11 歳試験」とは、初等教育修了時に実施される試験のことである。イングランドでは 5 歳から 11 歳までが初等教育で、11 歳から中等教育になる。当時、子どもたちは「11 歳試験」で、進学を希望する者のためのグラマー・スクール、手に職をつけたい者のためのテクニカル・スクール (Technical school)、実用的な教育を希望する者のためのセカンダリー・スクール (Secondary school) に振り分けられた。セント・ポール大聖堂学校のカリキュラムはパブリック・スクール進学のために組まれているが、「11 歳試験」も受けられるように配慮されていることがわかる。

4. SPCCS1975 に見るカリキュラム

1975 年発刊の *St. Paul's Cathedral Choir School* では、学校にかかる諸経費の内容に変化が見られる。

「授業料は請求されないが、学校を運営するための大いに増加した経費のために、聖堂参事会長と聖堂参事会は、大変申し上げにくい、特に 1975 年 9 月から、両親に息子の食費と洗濯物の経費を払うよう頼むことが必要になった。この寄付金は、学校年度の初めか、あるいは各学期始めに 3 回の分割払いで全部払われるかもしれないが、学校年度 1975-76 のために 250 ポンドと決定された。これは毎年再考するものと前提している。また合計 100 ポンドを保証金として聖堂参事会長と聖堂参事会に預けることになる。両親はもちろん衣服や、通学にかかる所用経費、小遣いを息子に持たせてほしい。」⁶⁸

このように、寄宿に関わる費用が徴収されるようになった。1970年代の前半、イギリスではインフレ率がかつてないほど大きかった。セント・ポール大聖堂学校は寄宿料だけであるが、基金財源のない学校は授業料の値上げを余儀なくされた。インフレのため教職員の給与が引き上げられたこともあって、授業料はインフレの影響を受けることになったのである。⁶⁹

またカリキュラムは、以下のように記されている。

「学校は38名の寄宿生の収容能力を持っている(30名の聖歌隊員と8名の見習い)。カリキュラムは通常はパブリック・スクールを目指す準備のために提供されているが、それには宗教的な知識、古典、フランス語、数学、そして通常のイギリスの科目が含まれている。少年は、地方教育当局の11歳試験の手続きを申し込み、そしてそこで平穩に適應する。また学校で与えられる定期的な歌唱や音楽理論の教授を受ける他に、少年たちは聖歌隊員として彼らの能力を高めるために、ピアノやヴァイオリン、チェロ、クラリネット、フルートや他の楽器の個人教授を受けることを奨励されている。これらのレッスンに対する料金は、最もふさわしい生徒に与えられる補助金として聖堂参事会長と聖堂参事会によってある程度払われる。選択科目は美術とハンディクラフトが用意されており、そのためのわずかな料金は請求される。クリケットやフットボール、陸上競技をするために、毎週2回、郊外にある素晴らしい私有の競技場へ少年たちを連れて行く。試合はまた学校の運動場ですることできる。学校はまたプールとりっぱな体育館も持っている。」⁷⁰

上記のように、その内容に大きな変化は見られない。ただし、子どもたちが学ぶことのできる楽器にクラリネットが増えているほか、それ以外の楽器も学ぶことができるシステムになっている。つまりより充実した音楽教育が行われるようになったことがわかる。

5. “ST. PAUL’S” 1999に見るカリキュラム

セント・ポール大聖堂学校は、1989年からは、聖歌隊員以外の子どもも受け入れるようになったのだが、カリキュラムに変化はあったのであろうか。1999年に発刊された“ST. PAUL’S”では、カリキュラムについて次のように紹介されている。

「あらゆる学校は、学校が特別な場所であることを願う。本校はその自己認識がある。我々は、子どもたちそれぞれがもつ固有の価値を高く評価し、伝統的な教育法から最適なものを広範な基盤に基づくカリキュラムに組み込む。そのため、すべての少年はゆとりをもって、彼らの環境に満足しつつ、提供される多くの学びに成功している

ことができると感じることができる。本校には儀礼的な規則があると否定的に考えるのではなく、ごく一般的な常識やマナーと多くの共通点があることを理解されるであろう。」⁷¹

このように、セント・ポール大聖堂学校には、長い伝統で培われてきた教育に対する自信が伺われる。また学校は「ひとりひとりの個性を発見し、その成長を助ける教育」を掲げている。

学費に関しては、「通学男子生徒に対しては、学期ごとの授業料がかかる。聖歌隊員は、参事会長やチャプターを通して、または個々の男の子を後援する 9 つのギルドからの奨学金によって授業料が無料になる。」⁷²と記されており、聖歌隊員はこれまで通り無料であるが、通学生には授業料が課せられている。

また聖歌隊員と通学生は、同じ時間割で、月曜日 (8.45am-3.40pm) から金曜日まで正規の授業を受ける。授業後は通学生も一緒にお茶をするために集まり、上級生がまだ授業を終えていないので、それを待つ間下級生は 30 分の自主学習を課されることになっている。授業科目は、「英語、数学、宗教、ラテン語、歴史、地理学、フランス語、物理学、化学、生物学、コンピュータ研究、デザイン技術、エレクトロニクス、演劇、音楽、古典、芸術」⁷³ であり、物理学、化学、生物学などの理科分野が加えられた。また現代に必要とされるコンピュータ関係の科目も加えられている。私学学校に対しては古典科目に偏り過ぎているという批判が多かったが、現代においてそれは当てはまらない。しかし、公立校との差異は明らかである。公立校で必修科目とされている基礎 3 科目は、英語、算数、理科であるが、セント・ポール大聖堂学校ではそのようには定められていない。「ナショナル・カリキュラムを固守する義務があるので、今までのカリキュラムの再考を行っている」⁷⁴と述べられている。

また、音楽教育に関しては、次のように記されている。

「優れた歌唱訓練に加えて、学校には音楽ディレクターと楽器指導の専門家がいる。聖歌隊員は全員、2 つの楽器を演奏する。通学男子生徒は、様々な楽器を学び始めることと同様に本格的な歌唱指導、そして音楽鑑賞の授業を受ける。」⁷⁵

聖歌隊員と同様に、通学生も充実した音楽教育を受けていることがわかる。学校は、「すべての子どもに音楽的な才能があるというわけではないが、非聖歌隊員生徒も専門性の高い音楽教育を楽しんで受け、彼らの成長に有益であることを望んでいる。」と述べており、音楽教育は非聖歌隊員にとっても重要な位置を占めている。すなわち音楽教育は、非聖歌隊員として学校体系を進んでいく彼らにも有益であり、欠くことのできないものとして位

置けられている。

以上のように、1930 年代以降のカリキュラムの変遷を、学校紹介パンフレットの記述から検討を行った。第 1 節において検討を行ったように、イギリスの教育界は様々な教育改革を行ってきた。しかしセント・ポール大聖堂学校には、そのカリキュラムに大きな変化はなかった。つまり長い歴史の中で積み重ねられてきた伝統と実績に裏付けされた教育カリキュラムを用いて、子どもたちを教育しているのである。

- 1 以下第1項1は主に、J.R.H.ムアマン（1991）と田口仁久（1975）による。
- 2 田口仁久『イギリス学校教育史』学芸図書株式会社，1975，p.7 以下、このパラグラフは田口（1975）による。
- 3 大法王グレゴリー一世と、田口は記しているが、一般的な教皇グレゴリウス一世と記した。
- 4 以下本論では唱歌学校のことを、一般的に用いられるソング・スクールと記す。
- 5 以下本論では文法学校のことを、一般的に用いられるグラマー・スクールと記す。
- 6 最初のソング・スクールは、4世紀にローマ教会における聖歌隊員養成のために設立したスコラ・カントルム（Schola Cantorum）である。6世紀後半に、教皇グレゴリウス1世がスコラ・カントルムをより充実した学校に再建した。まもなく、このような聖歌隊員を養成する学校を付設機関として維持することが、修道院や司教座聖堂の慣習となった。
川原浩，石井博「イギリスにおける音楽教育の動態（I）エリザベス朝の音楽教育」『広島大学教育学部紀要・第一部』20巻，1971，p.80
- 7 田口，前掲書，p.8
- 8 田口，前掲書，p.9
- 9 6つの教育機関についての記述は、下記文献による。
J.R.H.ムアマン著／八代崇，中村茂，佐藤哲典共訳『イギリス教会史』聖公会出版，1991，pp.41-42
John Richard Humpidge Moorman, *A history of the church in England*, Morehouse Pub Co, 1986
- 10 このパラグラフは、ムアマン，前掲書，pp.114-116による。
- 11 St. Paul's Cathedral Choir School, *St Paul's Prosepectus Information Booklet*, 2005/2006, p.3 筆者和訳。
- 12 ベネディクト会は、現在も活動する最も古いカトリック修道会。聖ベネディクトゥスが、529年にイタリアのモンテ・カッシーノに創設した。
- 13 このパラグラフは、ムアマン，前掲書，pp.114-116による。
- 14 学生は最初に文法、修辞学、論理学の三学科（Trivium）を、次いで算数、天文学、音楽理論、幾何学の四学科（Quadrivium）を、7年かけて収めることとされていた。神学は専門的な学者を志望する少数者が修める大学院科目とされていた。
- 15 田口，前掲書，p.9，一部省略。
- 16 ムアマン，前掲書，p.117
- 17 このパラグラフは、下記文献による。
橋本伸也，藤井泰，渡辺和行，進藤修一，安原義仁共著，『近代ヨーロッパの探求④ エリート教育』ミネルヴァ書房，2001，p.26
- 18 1517年には、ルターが95カ条の論題を提出して教皇の贖宥状免罪符販売を批判し、人は功績によらず信仰のみによって救われると主張し、聖書を正しい信仰の唯一の基礎とする立場から教皇権を否認したことが導火線となって、全ヨーロッパをその運動にまきこみ、宗教分裂時代の幕を開いた宗教革命がおこっている。
- 19 神学者。多くの著書を残している。ジョン・コレットに学んだ。トマス・モアとも親交があった。
- 20 思想家であり政治家。政治・社会を風刺した『ユートピア』の著者で知られる。ジョン・コレットとも友人関係にあった。
- 21 セント・ポールズ校は聖パウロ校ともセント・ポールズ・スクールとも記されるが、本論ではセント・ポールズ校と記す。
- 22 ムアマン，前掲書，pp.195-196による。
- 23 現在はロンドン郊外 Lonsdale Road
- 24 池田良三『イギリスの教育』ぎょうせい，1980，pp.13-14

25 池田, 前掲書, pp.13-14 による。

26 あるいは、グレート・スクールズ (Great Schools) という名称もある。

27 2005 年の私学協会加盟校 1,276 校 (プレップ含む) の寄宿生の年間平均授業料 18,828 ポンド (約 380 万-1 ポンド 200 円で換算)、通学学校の年間平均授業料は 8,388 ポンド (約 170 万円) である。

Independent Schools Council, *2005-2006 Snapshot Independent Schooling in the United Kingdom*

28 裕福な家庭の子どもは、家庭教師によって教育されるのが主流であった。

29 秋島百合子『パブリック・スクールからイギリスが見える』朝日新聞社, 1995, p.28

30 藤井泰「近代イギリスのエリート教育に関する研究-19 世紀パブリック・スクールの生徒の社会的構成」『松山大学論集』第 11 巻第 1 号 (通巻 247), 1999

31 トマス・アーノルドによるパブリック・スクールの改革については、トマス・ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』をテキストに、アーノルド校長のラグビー校改革を中心に記した下記文献を参照されたい。

伊藤元道『英国パブリック・スクール物語』丸善, 1993

32 川原浩, 石井博「イギリスにおける音楽教育の動態-3-産業革命期の音楽教育」『広島大学教育学部紀要. 第一部』22 巻, 広島大学教育学部, 1973, p.111

33 このパラグラフは、田口, 前掲書, pp.62-63 による。

34 望田研吾『現代イギリスの中等教育改革の研究』九州大学出版会, 1996, pp.181 参照。

35 なぜパブリック・スクール教師がカリキュラム開発に深く関わってきたかには、いくつかの理由がある。その一つは、私学には学問的に優秀で優れた学歴をもつ大学卒教師が雇われていたということにある。彼らは、それぞれの科目に関するさまざまな組織の活動的な委員であることが多い。もう一つは、私学教師は公立校教師に比べて、自立性と自由が大きい。何をどう教えるかについては個々の教師、特に教科担当者に大きな裁量権があったし、校長もまたカリキュラム開発を寛容に推奨していた。

G. ウォルフォード著, 竹内洋, 海部優子共訳『パブリック・スクールの社会学 英国エリート教育の内幕』世界思想社, 1996, p.229-238 参照。

Geoffrey Walford, *Life in Public Schools*, Methuen, 1986

36 ウォルフォード, 前掲書, 1996, p.229-230 参照。

37 貴族、ジェントリー層、国教会聖職者や法廷弁護士、上級官吏などの伝統的な専門職の子息、そして陸海軍士官の子息が入学者のほとんどを占めていたことを、W. ルーヴィスティン (1997) が 19 世紀の名門パブリック・スクール入学者の社会的出自に関する調査から明らかにしている。またこの研究によれば、19 世紀後半には、とくに実業家の子息の入学が増加した。

38 このパラグラフは、下記文献を参照している。

藤井泰「近代イギリスのエリート教育システム-パブリック・スクールからオックスブリッジへの学歴経路」橋本伸也, 藤井泰, 渡辺和行, 進藤修一, 安原義仁共著『近代ヨーロッパの探求④ エリート教育』ミネルヴァ書房, 2001, pp.57-58

39 このパラグラフは、下記文献を参照している。

下條美智彦『ヨーロッパの教育現場から-イギリス・フランス・ドイツの義務教育事情』春風社, 2003, pp.18-19

40 以下本論では、LEA と記す。

41 このパラグラフは、田口, 前掲書, pp.145-151 による。

42 このパラグラフは、下記文献による。

日本音楽教育学会, 塩原麻里「イギリス」『日本音楽教育事典』音楽之友社, 2004, p.29

43 大田直子「国家の教育責任の新たな在り方-イギリス『品質保証国家』の教育政策」『教育学研究』第 71 巻-1 号, 2004, p.2

- 44 日本音楽教育学会, 塩原, 前掲書, p.32
- 45 小林章夫『教育とは－イギリスの学校から学ぶ』NTT 出版, 2005, p.29
- 46 他にも予算・人事の権限に関する改革、新しいタイプの公立学校の設立など、それまでの教育とは大きく異なる改革がなされた。
- 47 シックス・フォームは日本流に言えば高校 2 年生、3 年生にあたる。義務教育終了後、大学進学のための準備を行う。
- 48 このパラグラフは、日本音楽教育学会, 塩原, 前掲書, p.32 による。
- 49 下條, 前掲書, 2003, p.57
- 50 プレップ・スクールの予科。
- 51 ウォルフォード, 竹内, 「イングランドとウェールズの学校制度と学外試験－本書の理解のために」前掲書, 1996, p. x ii
- 52 以下本論では、DfES と記す。
- 53 以下本論では、HMC と記す。
- 54 校長会議ホームページ <http://www.hmc.org.uk/schools/q-s.htm> 参照。
- 55 近年のパブリック・スクールの変化に関する記述は、主に下記文献を参照した。
竹内洋「変貌するパブリック・スクール」『悠峰職業科学研究紀要』4 巻, 1996, pp.54-58
- 56 私学学校協会によると、2006 年度現在の私学学校における寄宿生と通学制の割合は下記図を参照されたい。

通学生と寄宿生の割合（初等教育学校、中等教育学校を含む）

区分	割合
寄宿生（男子）	40,344 (8%)
寄宿生（女子）	28,911 (6%)
通学制（男子）	217,730 (43%)
通学制（女子）	218,156 (43%)

Independent Schools Council, *2005-2006 Snapshot Independent Schooling in the United Kingdom*, 2006 より作成。

- 57 学校数は、2006 年度 DfES の調査による。

Department for Education and Skills, *Education and Training Statistics for the United Kingdom*, 2006

- 58 「2. セント・ポール大聖堂学校の歴史的変遷とその位置づけ」は、下記文献による。

『セント・ポール大聖堂 公式ガイドブック』Jarrold Publishing, 1999

St. Paul Cathedral, Jarrold Publishing, 1999

- 59 1981 年には、イギリス王室チャールズ皇太子とレイディ・ダイアナ・スペンサーが結婚式をあげた。君主に属するウェストミンスター・アビー大聖堂ではなく、セント・ポール大聖堂を選んだところに、国民にとってどれほど重要な位置づけを持っている大聖堂であるかが分かるであろう。

- 60 以下本論では、ヴィカル合唱団と記す。

- 61 John Morehen, *Cambridge Studies in Performance Practice English choral practice, 1400-1650*, Lightning Source UK Ltd., 1995, p.31 筆者和訳。

- 62 このパラグラフは下記文献による。

カーティス・プライス, 美山良夫 監訳『西洋の音楽と社会③ オペラの誕生と教会音楽 初期バロック』音楽之友社, 1996, p.293

Curtis Price, *Man & Music The Early Baroque Ear from the late 16 century to the 1660s*, The Macmillan Press Ltd., 1993

- 63 本論では、以下 *St. Paul's Cathedral Choir School* を SPCCS と略記する。

- 64 原文には *Carpentering* と記されており、大工職、大工仕事を意味するので、それに相

当する科目を日本に当てはめ「技術」とした。

⁶⁵ St. Paul's Cathedral, *St. Paul's Cathedral Choir School*, 1937, p.1

⁶⁶ St. Paul's Cathedral, *St. Paul's Cathedral Choir School*, 1952, pp.1-2

⁶⁷ St. Paul's Cathedral, *St. Paul's Cathedral Choir School*, 1967, pp1-2

⁶⁸ St. Paul's Cathedral, *St. Paul's Cathedral Choir School*, 1975, pp.2-3

⁶⁹ ウォルフォード, 前掲書, p.178

インフレだけではなく、労働党政権の助成金の削減も私学学校に大きな打撃を与えた。私学学校は、授業料の引き上げと、学校の効率性を上げること（女子生徒受け入れ、生徒の増加など）で対処するほかなかった。

⁷⁰ St. Paul's Cathedral, *St. Paul's Cathedral Choir School*, 1975, pp.2-3

⁷¹ St. Paul's Cathedral Choir School, *St Paul's*, 1999, p.2

⁷² *ibid.*, p.3

⁷³ *ibid.*, p.5

⁷⁴ *ibid.*, p.5

⁷⁵ *ibid.*, p.10

第2章 セント・ポール大聖堂学校の音楽教育の実際

本章では、セント・ポール大聖堂学校のカリキュラムの検討を行う。

セント・ポール大聖堂学校は、プレ・プレップ・スクールとプレップ・スクール、そして聖歌隊学校から組織される学校である。プレ・プレップ・スクールは4歳から7歳までの子どもたちのための男女共学の学校であり、プレップ・スクール入学の準備をする。また、聖歌隊学校に在籍するのは聖歌隊員（男子のみ）であり、彼らは通常の授業を男女共学のプレップ・スクールで、通学生の子どもたちと共に受けることになる。聖歌隊学校のカリキュラムは、寄宿舎での生活を通して彼らの生活全てを包括するものであり、プレップ・スクールとは別に組まれている。よって本章では、プレップ・スクールのカリキュラムの分析と、聖歌隊学校のカリキュラムの分析を行い、とくに音楽教育のカリキュラムとその実態についてフィールド・ワークをもとに検討する。

第1節 セント・ポール大聖堂学校のカリキュラムの分析

本節では、セント・ポール大聖堂学校から出版された“*St Paul's*”¹を参照して、現行カリキュラムを分析し、カリキュラムの中での音楽教育の位置づけを検討する。

1. セント・ポール大聖堂学校のカリキュラムの分析

(1) セント・ポール大聖堂学校の教育の目的

セント・ポール大聖堂学校は、“*St Paul's*”によれば、次のような教育の目的が掲げられている。² すなわち、①学校は、各々の生徒に知的に、社会的に、個人的に、身体的に、文化的に、そして精神的に発達する機会があるであろうキリスト教の男女共学のコミュニティであることに努める。②正義、寛容、尊敬、誠実、奉仕と信頼のキリスト教理念は、学校コミュニティの中で積極的な関係を成長させるために奨励される。③学校は団体生活を通して、特に全ての生徒への聖職者によるケアは、相互の関係だけではなく一人一人の自主性を奨励する。④学校は、子どもたちの両親や保護者と緊密な関係を促進する。両親はどのような時にも学校に歓迎され、適切に学校生活に参加するよう招かれる。⑤全ての生徒は、彼らの能力の及ぶ限りで勉強し、可能な限り高い水準を成し遂げられるよう努めることを奨励され、学年における到達度と学業成績は適切に評価される。

以上の5つのねらいをまとめると、セント・ポール大聖堂学校は、キリスト教理念に基づいた人格陶冶を目指し、ひとりひとりを伸ばす教育を目指している。そのために、チューター制度も設けている。異年齢で構成された10人ほどのグループ単位でチューター（個人指導教師）が配置され、週に一度は会うことになっている。もしプレ・プレップ・スクールから入学したならば、プレップ・スクールを卒業するまで同じチューターが面倒をみることになっている。これは、パブリック・スクールでいうハウスマスター（舎監）³の役

割に類似している。チューターは、彼らの経験を生かして子どもたちに助言し、教師陣と共に子どもの学力向上に努める。そして、いじめや学校の規律、また遊び場のルールに関する議論を行って、校長と意見を交換している。子どもたちがより良い環境の中で学校生活を送れるように協力しているのである。

また、保護者の学校生活への参加が積極的に受け入れられていることがわかる。筆者が、イギリス滞在中に訪問した帝国戦争博物館は、多くの学校が校外学習の場として利用していた。子どもたちの引率には、教師だけではなく保護者も携わっていた。博物館員の説明によると、イギリスでは特に子どもたちが校外に行くときには、何人かの保護者も協力して引率する。子どもの安全のためと、保護者の学校教育への参加を促すためでもあるらしい。

セント・ポール大聖堂学校では、学業重視を目的とするのではなく、ひとりひとりの能力や可能性を引き出し、キリスト教理念に基づいた人格陶冶を目指して、校長を中心とした教師陣、そしてチューターや寮母、聖職者たちによって、また保護者の協力によって学校は運営され、子どもたちを育成している。

(2) セント・ポール大聖堂学校の現行カリキュラム

プレップ・スクールは、通学生と寄宿している聖歌隊員のための学校である。学校のカリキュラムについて、以下のように記されている。

「セント・ポール大聖堂学校は、子どもたちに奨学金獲得ためにまた彼らが選んだ中等教育機関の共通入学試験のために準備させている。音楽や学術的な奨学金を多く獲得している（過去4年間で、30個の音楽奨学金と6個の学術的な奨学金を獲得した）。近年子どもたちは、バンククロフト（Bancroft's）、シティ・オブ・ロンドン・ボーイズ・アンド・ガールズ（City of London Boys and Girls）、ダリッジ（Dulwich）、イートン（Eton）、フランシス・ホランド（Francis Holland）、キングス・カンタベリー（King's Canterbury）、Oundle（アウンドル）、タンブリッジ（Tonbridge）、アッピンガム、ウェストミンスター、ウィンチェスター⁴などに進学している。

本校は、フランス語、ラテン語、IT、音楽、器楽曲、演劇、芸術、ダンス、体操や野外スポーツと同様に、ナショナル・カリキュラムの科目に及ぶ広い層に基盤を持ったカリキュラムを提供している。」⁵

このように、セント・ポール大聖堂学校は、私学学校の中等教育機関すなわちパブリック・スクールに入学するためにカリキュラムが組まれており、さらに奨学金を獲得することを目的に掲げている。共通入学試験は、私立中学入学の1つの基準とされている。⁶ 奨

学金を獲得することは名誉なことであるが、一方で非常に高いパブリック・スクールの授業料考えると必要があつてのことではないかとも考えられる。例えば、生徒が近年進学しているウィンチェスター・カレッジは、パブリック・スクールの中でも抜きん出て学費が高い。寄宿生からは年額 16,110 ポンド、通学生からでも 12,474 ポンド徴収している。⁷ しかし、ウィンチェスター・カレッジには充実した奨学金制度がある。それらの奨学金を得るためには、奨学金のための試験を受けなければならない。その試験の科目は、英語、数学、科学、一般教養の必須科目の他に、ラテン語、フランス語、ギリシャ語、スペイン語、ドイツ語、歴史、地理、数学などの選択科目から 3 つを選ぶことになっている。⁸ つまり、奨学金の試験に合格するためには、ナショナル・カリキュラムだけでは不十分であり、元来のパブリック・スクール入学のためのカリキュラムを実施しているのである。

一方で、私学学校はナショナル・カリキュラムやナショナル・テストの縛りはないが、義務教育終了時に行う中等教育資格である GCSE⁹を得ようとする、ナショナル・カリキュラムは無視できない。¹⁰ よって、パブリック・スクール入学のためのカリキュラムと、ナショナル・カリキュラムを統合したカリキュラムが用意されているのである。

セント・ポール大聖堂学校では、「全ての子どもたちは、彼らの学業成績と一緒に、文化的でスポーツに興味があることを確実とするために、全ての学校活動に参加することになっている。」¹¹とあるように、美術や演劇、スポーツにも重点を置いている。

美術は、週に 2 時間ある授業の他に放課後を利用した美術クラブの活動を通して、美術の奨学金を目指す子どももいる。演劇はパブリック・スクールでも実施されるものであるが、セント・ポール大聖堂学校でも、演劇の講師のもと子どもたちは指導を受けている。中には、舞台や映画で活躍する子どももいるほどだ。またスポーツは、水泳、フットボール、クリケット、陸上競技、テニス、ネットボール¹²、ラクロス、ホッケー、タッチラグビー、バスケットボール、柔道、フェンシング、器械体操など様々な種目を指導している。これらの競技のいくつかは、私学学校同士で試合が開催される。とくにクリケットは、ロンドンにあるクリケット・チームの中で優勝するほどの実力である。¹³

以上のように、セント・ポール大聖堂学校では、学業成績の向上だけではなく、人格陶冶のために情操教育にも重きを置き、両面からのアプローチによって子どもたちを育成している。音楽だけではなく、美術や体育にも重きを置いてカリキュラムを構成している。また、音楽分野に限らず学科においても美術においても奨学生を輩出していることから、その質の高さは推察される。これこそ、全人教育の理念に基づいた教育ではないだろうか。全人教育とは、「一方に偏した知育を排除し、性格教育、情操教育などを重んずる教育」であり、人間の全体を教育の対象として、人間の全的円満な育成を目指す教育である。¹⁴ セント・ポール大聖堂学校のカリキュラムは、全体的な視野をもったものであり、その中に音楽教育も位置づけられている。

2. セント・ポール大聖堂学校の音楽教育カリキュラムの分析

(1) セント・ポール大聖堂学校の音楽教育カリキュラム

“*St Paul's*”には、音楽教育カリキュラムについて下記のように紹介されている。

「聖歌隊学校として発展してきたセント・ポール大聖堂学校には、必然的に充実した音楽教育システムがある。しかし音楽の適性は、入場の必要条件ではない。学校の設備は、素晴らしい。個人教授のための部屋が14室、練習室、キーボードとコンピュータを備えた大きな音楽室、オーケストラのための音楽室がある。

学校の音楽ディレクターと音楽担当者は、非常に多くの楽器の非常勤講師を組織している。現在、彼らは一週間に280のレッスンを行っている。ほとんどの楽器のレッスンを行っている。全ての子どもたちは音楽の形式を学んで、少なくとも1つの楽器を習得する。子どもによっては、2つあるいは3つの楽器を学ぶ。音楽ディレクターは、どんな楽器が適しているか、子どもと両親に助言する。

学校は、弦楽奏団や吹奏楽団、ジャズバンド、そして3つのオーケストラと3つの合唱団を運営している。子どもたちは、学校コンサートやロンドンのあちこちで演奏する。主要な合唱団であるブレッド・ストリート・クワイア (*The Bread Street Choir*) は、イングランド銀行やいくつかの同業組合ホールで歌ったり、クリスマスにはロンドンの中央刑事裁判所の前で歌ったりする。またチャペルや大聖堂晩祷で定期的に歌う。」¹⁵

以上のように、セント・ポール大聖堂学校には多彩な音楽教育カリキュラムが用意されている。「ほとんどは、王立音楽学校委員会の試験を受ける。本校は、中等教育機関の音楽奨学金を過去5年間で37個獲得するという優れた成功を残している。」¹⁶と紹介していることから、その音楽教育の質も非常に高いことが推察される。その質の高さは、充実した講師陣からも言えよう。

音楽ディレクターは、子どもにあった楽器を選び、ひとりひとりの能力を伸ばす。さらに学校は、ただ合唱や楽器の練習といった学校内だけの学習で終わるだけではなく、それらをアウトプットできる機会を提供している。この点は、非常に興味深い。先述した通り、聖歌隊員の子どもたちは毎日大聖堂で賛美を捧げており、それ以外にも多くの演奏機会を得ている。しかし、聖歌隊員になるための試験を受け、音楽的な才能が認められた子どもたちだけではなく、それ以外の「音楽の適性は、入場の必要条件ではない。」とされた子どもたちにも、音楽を学ぶ機会を与えて、学校外でも演奏できるまでに能力を伸ばしている。

(2) 聖歌隊学校の音楽教育カリキュラム

聖歌隊員の学校生活とはどのようなものなのであろうか。聖歌隊員は、どのように通学生とともに学んでいるのであろうか。1999 年発刊の "ST. PAUL'S" では、彼らの学校生活と練習スケジュールが紹介されている。

まず、月曜日から金曜日までのスケジュールは次のようである。

「7:10 に聖歌隊員のためにベルが鳴る。

7:30 朝食

8:30 聖歌隊練習

8:45 学校開始

3:40 授業修了

4:00 お茶

4:15 聖歌隊練習

5:00 晩祷¹⁷ (木曜日を除く)

6:10 夕食

6:30 自主学習

7:30 下級生の自由時間

7:45 下級生就寝 (8:30 消灯)

8:00 上級生の自由時間

8:30 上級生就寝 (9:15 消灯)」¹⁸

聖歌隊練習は、朝に 45 分、晩祷の前に 45 分間設けられている。朝の練習では、発声も含め練習が進められるが、晩祷前の練習はリハーサルである。学校終了後、お茶をしてすぐに練習に向かう。筆者が見学に行った日には、子どもたちは、体育の先生に連れられて体操服のまま練習室に入ってきていた。イギリスの聖歌学校の紹介パンフレットには、フットボールをしている少年たちを先生が担いで聖歌隊練習に連れて行く写真が掲載されていたが、過密なスケジュールの中で子どもたちは聖歌隊としての責務を果たしている。

週末のスケジュールは、次のように記されている。

「土曜日は、『朝寝坊』から始める。

9:00-11:00 聖歌隊練習

11:00-1:00 体育と自主学習

子どもたちは、両親とともにゆっくりと昼食をとることができる。

3:15 聖歌隊練習

5:00 晩祷

6:10 夕食

自由時間

日曜日

9:30 聖歌隊練習

10:30 朝祷

11:30 礼拝

昼食

2:15 聖歌隊練習

3:15 晩祷

4:30 から、聖歌隊員は両親と共にお茶に行くことを許可されており、7.00pm まで学校に戻ってくる必要はない。」¹⁹

週末は、また、週末には聖歌隊練習の時間も多く確保されているが、両親と共に過ごす時間が設けられている。寄宿生活をしている子どもたちにとって、大切な時間であろう。近年は、パブリック・スクールにおいても、両親と過ごす時間を確保している。というのも、寄宿生活は学費がかかりすぎるという思いと自分の子どもは自分で育てるべきだという考えから寄宿生は激減している。

聖歌隊員である子どもたちには、23 時間の合唱練習が課せられている。合唱練習の他に、毎日 30 分間、楽器の練習もしなければならない。聖歌隊員は、2 つ以上の楽器をマスターすることが求められている。これらの練習を通して、彼らは聖歌隊員として求められる能力を培っていくのである。

第2節 セント・ポール大聖堂学校の実践の分析—フィールド・ワークからみえる学校像

本節では、フィールド・ワークから合唱指導について分析を行う。さらに、セント・ポール大聖堂学校校長のインタビューからみえる学校像を描き出し、親の教育目的と現状について検討する。

1. 合唱指導の実践

2006 年 5 月、セント・ポール大聖堂聖歌隊の練習を見学する機会を得た。大聖堂で行われる晩祷の前に行われる練習を、5 月 8 日から 3 日間見学した。聖歌隊の練習は、大聖堂内にあるリハーサル室で行われる。大聖堂聖歌隊は、少年聖歌隊員 30 人、少年の見習い 8 名と男性聖歌隊員 18 名からなる聖歌隊であるが、曜日によって担当が決まっている。月曜日

は少年たち、木曜日は男性のみ（ヴィカル合唱団）で賛美する。それ以外の曜日は、大聖堂聖歌隊が賛美を担当する。

聖歌隊の指導には、セント・ポール大聖堂オルガニスト兼音楽ディレクターのマルコム・アーチャー（Malcolm Archer）、副オルガニスト兼アシスタント音楽ディレクターのヒュー・ウィリアムズ（Huw Williams）があたる。大聖堂のオルガニストというものは、単なる音楽家でない。オルガニストは音楽ディレクターとして、大聖堂の音楽の全てに責任をもつ。楽曲を選び、聖歌隊を訓練して、高い標準の演奏を維持することが求められる。筆者が見学に行った3日間のうち、5月8日はマルコム・アーチャーが、5月9日、10日はヒュー・ウィリアムズが指導していた。

聖歌隊の練習の前に、係りの者があらかじめその日の晩祷で歌う曲の楽譜を準備していた。16時過ぎになると、寮母あるいは教師に連れられて、少年たちが練習室に入ってくる。体育の先生に連れられて、運動着のまま入室してくる日もあった。子どもたちは練習室に入ると、それぞれの聖歌隊服に着替える。まだおしゃべりをしながら、あるいはハミングをして発声しながら着替えていた。とにかく時間が限られているので、指揮者が子どもたちの準備を促す。「OK, boys. Let's start.」という掛け声で、練習が始まる。晩祷は「Even Song」と言われるくらいであるから、歌う賛美の曲数が実に多い。聖歌隊と聖職者の入場時の賛美、祈りを捧げる賛美、詩篇詠唱、マニフィカト（Magnificat）²⁰、ヌンク・ディミティス（Nunc Dimitis）²¹、アンセム²²など、賛美を中心として晩祷は執り行われる。それらの曲を一時間足らずで用意しなければならないのだから、指揮者が子どもたちを促すのは当然であろう。

見習いの隊員を除いて、少年たちは皆かなり高い読譜能力をもっている。一日一日違う賛美が与えられるので、読譜できなければついていけない。例えば、こんなやり取りがあった。

（新しい曲に取り組むとき）

指揮者：誰か、この曲を歌える人？

（何人かの少年が手を挙げる）じゃ、歌って。1, 2, 3..

少年A：ヤーヤーヤー..

指揮者：はい、よろしい。次の部分は誰が？

（何人かの少年が手を挙げる）はい、歌って。1, 2, ..

少年B：ヤーヤーヤー..

指揮者：よろしい。では、もう一度始めから全員で。今度は歌詞をつけて歌おう。

また、間違えたところあるいは分からなかったところがあれば、子どもたちは自ら手を

挙げたり、指揮者から指摘されたりして、もう一度歌うチャンスを得ていた。そんな時は、一人で歌わされたり、何人かで歌ったりしていた。間違えることに対して恥じることはなく、むしろ歌えるようになるために積極的であった。

さらに、次のようなやり取りも行われた。

指揮者：この和音の次は、この他にどのように展開されるか、誰か答えられるかい？

この和音には3つの場合がある。

少年A：Vの和音だと思います。

指揮者：そうだ。（ピアノで弾きながら）こんな音になる。これはこの曲では、……で使われている。他には？

少年B：えーと、VIかな、いや、Iですか？

指揮者：この和音は、次にはこのように展開されるのが適切だ。よく聞いて。

このように、ただ歌うだけではなく、練習の中に音楽的な能力を高めるための指導も取り組まれていた。次々と展開されていく練習に聖歌隊員はついていけるが、見習いの少年たちはまだ自由に歌うことができていなかった。上級生の聖歌隊員の隣に立ち、今はどこを歌っているのか指し示してもらいながら、歌える部分を歌っていた。上級生の聖歌隊員は、実に良く見習いの少年たちの面倒を見ていた。例えば聖歌隊の入場の時には、まだ若い隊員の肩を押してやって、歩く方向を教えてあげていた。練習のときも、歌えなくてだんだん集中力がなくなってきた隊員に、声をかけてやっていた。

一方で指揮者は厳しく、おしゃべりをして練習に集中していない少年には、前に立っているよう叱っていたし、見習いの少年が歌えなくて座っていたら、「目で楽譜を追って、よく聞きなさい！」と注意していた。日本の教室では、今では「立たされる」ことはあってはならないことになっているが、聖歌隊の練習ではごく当たり前のことであったし、指揮者に言われる前に、注意されたら自ら前に立ちに行く少年もいた。前に立っている間は、決して歌ってはならないし、沈黙が課せられる。本番を前にした彼らに、練習する機会が与えられないということは大きなペナルティーであろう。

30分ほど経ったところで、男性聖歌隊員が入室してくる。そして、全体での練習が始まる。アングリカン・チャント²³で歌われる詩篇詠唱は、特に取り上げて練習されていた。詩篇詠唱は、毎日違う篇が歌われる。また、4声で言葉をはっきりと揃えなければならない。言葉のアクセント、イントネーションを注意深く練習していた。もちろん、音程のずれやリズムなども指導されていた。

そして17時前になると、聖歌隊員はあわただしく回廊に並んで大聖堂へ上っていく。少年聖歌隊員が高く掲げた十字架を先頭に、聖職者と共に入場していくのである。

セント・ポール大聖堂聖歌隊の合唱指導について分析を行ったが、特徴的なこととして次のようなことが挙げられよう。まず、少年聖歌隊員は高い読譜能力を持っている。これは日替わりに歌う曲の多さからも、練習の様子からも容易に推察される。しかし、始めからその能力を持っているわけではない。読譜能力を持っていることは必ずしも聖歌隊には求められていないからだ（聖歌隊の入隊試験については後述する）。見習いの子どもたちは、練習についていくことができなかった。セント・ポール大聖堂聖歌隊で、トップ・ソリストとして活躍したエドワード・バロウズ (Edward Burrowes) ²⁴も次のように述べている。

「聖歌隊に入りたての頃ですけれど、細かい楽譜を読むことから始めるのではなく、すぐにキャセドラル（聖堂）で楽譜を渡されるわけです。譜を読むのと詞を読むのと、一度にしなければならず、最初の頃はとても苦労しました。」²⁵

ところが、練習の中で読譜能力をつける指導はされていなかった。つまり彼らは、合唱指導だけで読譜能力を身に付けていくのではなく、第 1 節で分析したように、楽器のレッスンや音楽の授業などを通して読譜能力を習得していつているのである。

次に、合唱指導の内容は高度なものであり、高い専門性を求めたものであった。単なる子どもの合唱団ではなく、大聖堂聖歌隊としてその責務を全うできるように指導されていた。そのためにも、音楽的な知識や能力は必要とされてくるのである。日本の学校現場では「子どもに適した教材」というものが考えられるが、セント・ポール大聖堂聖歌隊では「大聖堂に適した音楽」言い換えれば「大聖堂に必要な音楽」というものが存在し、それを用いて子どもたちを指導している。

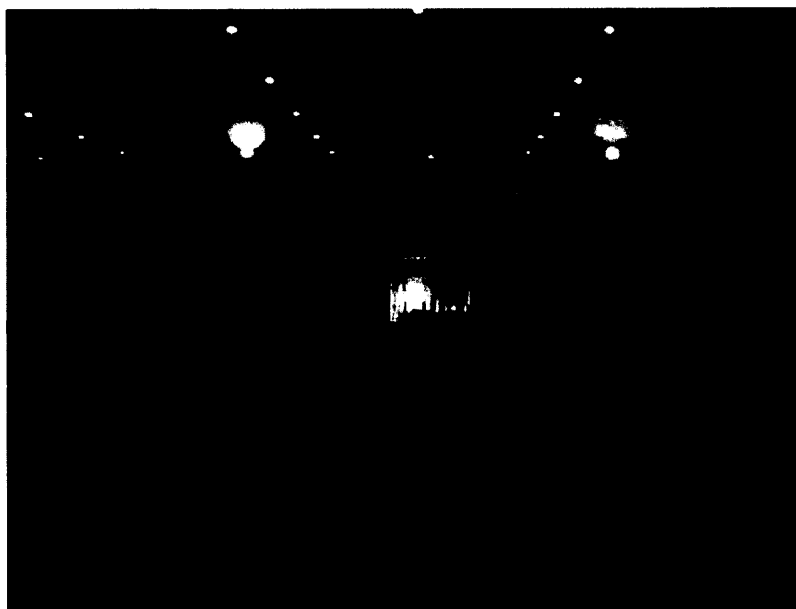


写真 1：聖歌隊練習室

2. 校長インタビューからみえる学校像

(1) セント・ポール大聖堂学校校長の聞き取り調査

2006年5月9日、セント・ポール大聖堂学校校長アンドリュー・ドビン(Andrew Dobbin)氏と面談し聞き取り調査を行った。そこで、セント・ポール大聖堂聖歌隊について、また学校教育についていくつかの質問をしたのでここで紹介したい。なお、筆者はカリキュラムに関する質問も行ったが、カリキュラムの検討はすでに行ったのでここでは省略することをあらかじめ断っておく。

まず、聖歌隊の入隊試験である。聖歌隊の入隊試験「voice trial」は、7歳もしくは8歳の少年を対象に年3回行われる。試験時には、完成された声や確実に歌を歌えることは求められていない。聞こえてきた旋律を正しく歌うことができるか、正しい英語が話せるかどうか、また楽器の演奏も試験に含まれる。同時に、学科試験も行われる。この試験は、ある程度のレベルに達しているかどうかで判断されるので、多くの少年が合格するときもあれば、合格者がいないときもある。

入隊した後しばらくは見習いとして過ごす。黒いキャソックと白いガウンの隊服を着る正隊員とは違い、見習いは黒いキャソックだけである。聖歌隊員の中には、聖歌隊服の上に首からメダルを掛けているものが何人か見られた。このメダルは、ギルド・カンパニーをはじめとするロンドンにある企業から奨学金を得ている証であるそうだ。

子どもの声に関する質問もいくつか行った。まず、子どもの声と大人の声についての考え方である。校長は、大人の声と子どもの声は違うものと捉えていた。子どもの声は非常に純粹であり、そこから大人の声になるにはトレーニングを積みねばならない。その大人の声とは、透き通った美しい声、すばらしい声であると表現していた。また、変声期に関しては、個人によってかなり差があるようである。早い子どもでは11歳くらいから歌えなくなってしまうし、卒業するまで変声期を迎えず美しい歌声で歌っている少年もいる。実際、セント・ポール大聖堂聖歌隊を卒業した後も、別の合唱団に入ったり、あるいはCDをリリースしたりと美しい歌声で歌い続けている少年も多くいる。いったん変声期に入った少年は、聖歌隊員として歌以外の奉仕をしているようである。

聖歌隊の卒業後の進路については次のように答えている。「卒業生は音楽家だけではなくビジネスマンあるいはエンジニア、その他どのような職にも就くことができる。聖職者になる子どもは確かに現在も存在しているが、ごく少数である。かつては多く存在したが、時代の変化を受けてその数は減少した。学校は、今の子どもたちが何をしたいのか、どのような職に就きたいのかという彼らの意見を尊重して教育活動を行っている。」

最後に、両親にとってセント・ポール大聖堂学校に入学させる目的は何かとの質問をした。校長は、非常に良い質問であり興味深いテーマであると答えた上で次のように答えている。「両親はまだ幼い子どもを手元から放すことに対して、とても大きな痛みを伴ってい

るであろう。しかし本校を希望する理由は多くあると考えられる。まず第 1 に、充実した音楽教育であろう。我々は非常に質の高い音楽教育を行っている。音楽教育によって、音楽的な能力だけではなく精神的な成長も遂げるであろう。第 2 の理由として考えられるのは、経済的な問題であろう。聖歌隊員は給費生として寄宿料のみで教育を受けることができるし、彼らの多くは奨学金を得て中等教育機関に進学している。」

聖歌隊員の生活は、非常に忙しい。一般家庭であれば家族で休日を過ごすことができるイースターやクリスマスに、聖歌隊員は休むことができない。これは親にとっては、つらい選択でもあるだろう。しかし、それでも通学制ではなく聖歌隊員としてセント・ポール大聖堂学校に入学させる親の目的は、まず第 1 に充実した音楽教育であり、第 2 に奨学金であった。つまり質の高い教育を、給費生として受けることができるのである。そしてその後の教育も奨学金を得て受けることができる可能性が高いことは、親にとっても魅力的な要因に違いない。

(2) セント・ポール大聖堂学校と親の教育目的

先述したが、イギリスの私立学校は非常に学費が高い。寄宿制のパブリック・スクールはなおのことである。第 1 章で検討したとおり、近年は生徒獲得のためにも通学制を採用する学校が増えてきた。通学生は寄宿生よりも学費が安い、それでも普通家庭にとっては負担が大きい。しかし、私学学校への進学者は増加しているのである。なぜ親は、高い学費を払ってまで私学学校の教育を受けさせたいのか。その教育目的について、親の私学教育に対する期待をまとめた下記表 2-1 を参考に検討したい。

表 2-1 私学教育に対する親の期待²⁶

(単位%)

要因	①重要な要因Ⅰ				②重要視要因Ⅱ
	1989	1993	1997	2001	2001
小規模学級	66	67	73	81	37
規律	86	84	79	80	21
教師の質				80	29
責任感の育成	77	77	78	79	23
潜在能力の開発			69	79	38
生徒ひとりひとりに対応している	65	68	68	70	28
学校の評判	70	79	81	70	15
特別活動		61	60	66	10
スポーツ教育	54	55	56	58	11

立地				55	13
試験の成績	79	80	63	54	12
多様な科目				54	9
芸術・音楽教育	56	46	50	50	10

注) 「子どもをどの学校に行かせるかを決定する際、下にあげた要因のうち重要視するのはどれですか。」

Ⅱ「学校を決定する際、最も重要視する要因を2つか3つだけあげるならばどれですか。」

表2-1は、親たちの私立学校教育への期待のうち2001年に調査において2人に1人以上が選んだ項目を挙げている。80%の親が、「小規模学級」²⁷「規律」「教師の質」を私学学校選択の基準としている。

「試験の成績」を選んだのは54%であり、表2-1にはないが大学入学の見込みは21%でしかない。パブリック・スクールにおいては、学業は第2義的なものであり、人格形成を主目的として教育が行われてきた。親たちもテストの成績や大学進学ではなく、それ以外の要因に重きをおいている。

私立学校の学業成績に注目してみよう。表2-2は、イギリスのナショナル・テストの結果である。キー・ステージ2のナショナル・テストは、レベル1からレベル5までに分類された到達度によって評価される。表2-2は、レベル4以上をとった子どもの割合を示したものである。DEFSは、レベル4をとることを基準と定めている。

表2-2から分かるように、私立学校の子どもたちは、公立校よりもレベル4をとる割合が多い。

表2-2 2006年 レベル4以上の子どもの割合²⁸

単位 (%)			
学校の種類	国語	数学	理科
公立校Ⅰ			
男の子	74	76	86
女の子	84	75	87
全体	79	75	86
私立学校Ⅱ			
男の子	93	92	95
女の子	97	92	96
全体	95	92	96
学校全体			

男の子	74	76	86
女の子	85	75	87
全体	79	76	87

注) Ⅰ公立校には特別支援教育学校、ホスピタル・スクールも含まれている。

Ⅱ私立学校はナショナル・テストを受けることを義務付けられていない。これは、任意で受けた学校。

表 2-3 は、レベル 5 をとった子どもの割合である。レベル 5 をとった子どもの割合は、私立学校と公立校の間で大きく差がでている。私立学校においては、実に子どもたちの 6 割以上がレベル 5 を獲得しており、殊に理科においては 7 割の子どもたちがレベル 5 を獲得している。

私立学校と公立校の成績の差は、さまざまな要因が考えられるであろう。そのひとつとして、私立学校では教師ひとりあたりの子どもの数が公立校より少なく、よりひとりひとりの学力の伸長を図ることができていることが考えられる。

表 2-3 2006 年 レベル 5 の子どもの割合²⁹

単位 (%)			
学校の種類	国語	数学	理科
公立校			
男の子	25	35	45
女の子	39	30	46
全体	32	33	46
私立学校			
男の子	52	61	68
女の子	69	58	71
全体	61	60	70
学校全体			
男の子	26	35	45
女の子	39	31	46
全体	32	33	46

一方で、大学進学のための GCE 試験の結果は必ずしも私学学校が上位を占めているわけではない。公立校も上位に入ってきている。つまり高い学費を払っているからといって、

成績が良いわけではない。³⁰ もちろん、私立学校は全体としては公立校よりも成績は良い。私立学校協会によると、GCSE や GCE の A レベル試験といった学外試験では公立校よりも私立学校の方がかなり高い成績をとっている。³¹ しかし高額な学費に見合った学業成績かどうかといえばそうではない場合もある。

さらに表 2-1 からは、「芸術・音楽教育」を選んだのは親が 50% いることがわかる。実に 2 人 1 人の親が音楽教育を重要視している。また 79% の親が「潜在能力の開発」を重要視している。この項目は、最重要視要因で最も高い割合を示す。さらに「生徒ひとりひとりに対応している」を 70% が選んでいる。

つまり私立学校を選んだ親たちは、学業成績よりも子どもの潜在能力を発見して開発するというひとりひとりに対応した教育を求めている。そのためには、小規模学級でありまた質の高い教師が存在していることが望まれている。また、特別活動やスポーツ、芸術・音楽教育といったものを重視していることから、学業成績だけにとらわれない親の学校選びが明らかになった。

これらの親の期待をセント・ポール大聖堂学校は十分に満たしているといえよう。同校は、ひとりひとりの能力を見つけ出し伸ばすことを目標としており、音楽教育においても個々に応じた教育実践がなされている。また音楽教育だけではなく、美術、スポーツ、演劇などといったカリキュラムを通して、ひとりひとりの能力を伸ばす全人教育を目指している。セント・ポール大聖堂学校は、親の教育目的と非常に合致した学校であるといえよう。

¹ 第1節は、下記文献による。

St Paul's Cathedral School, *St Paul's Prosepectus Information Booklet*, 2005/2006

² 以下5つのねらいは、ibid., p.3による。

³ 寄宿制のパブリック・スクールには、いくつかのハウスがあり、生徒は学校に入学すると同時に、ハウスにも入寮する。ハウスマスターは、有名パブリック・スクールにおいては、子どもが生まれる前から入学させたい学校に登録すると言われ、ハウスマスター宛に申し込みを行う。プレパラートリー・スクールにおいても、入学試験より登録順、また卒業生の子どもを優先させるという昔ながらの方針をとる学校もかなりある。息子にも、同じ学校で、同じハウスで学校生活を送らせたいと願うほどの教育の価値をパブリック・スクールに見出していることもあるが、この制度によって階層の再生産を行っていることは否めない。

⁴ これらの学校は、パブリック・スクールの中でも有名校である。

⁵ St Paul's Cathedral School, op. cit., 2005, p.5

⁶ 私立中学の入学は、必ずしも成績だけでは判断されない。校長の推薦書や、面接、あるいは子どもの持っている才能、特技によって総合的に判断される。私立中学入試の様子については、下記文献を参照されたい。

秋島百合子『パブリック・スクールからイギリスが見える』朝日新聞社, 1995, pp.32-67

⁷ 宮島健次「イギリスにおけるパブリック・スクールの教育効果の一側面に関する研究－パフォーマンス・テーブルの分析を中心に－」『国立教育政策研究所紀要』第131集, 2001, p.137

⁸ ウィンチェスター・カレッジの下記ホームページを参照。

<http://www.winchestercollege.co.uk/NetCommunity/Page.aspx?&pid=178&srcid=337>

⁹ 中等教育修了時に行われる試験。公立校、私学校ともに義務付けられている。以下、中等教育資格のことをGCSEと記す。

¹⁰ 藤田利光「英国ナショナル・カリキュラムと学習指導要領」『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』第56集, 和歌山大学教育学部, 2006, p.61

¹¹ St Paul's Cathedral School, op. cit., 2005, p.6

¹² サッカーボールを使って行うバスケットボールに似た戸外のゲーム。

¹³ 私学学校、とくにパブリック・スクールではスポーツは非常に重要な位置づけを持っている。これは、ラグビー校のアーノルド校長による改革によって始まった。

¹⁴ 『新教育学大事典』第4巻, 1990, pp.508-509

¹⁵ ibid., pp.5-6

¹⁶ ibid., p.6

¹⁷ 原文では、Evensongと記されている。セント・ポール大聖堂では、平日には次のようなスケジュールで祈りが捧げられている。7:30から朝祷(Mattins)、8:00から聖餐式(Holy Communion)、12:30から聖餐式(Holy Communion)、17:00から晩祷(Evensong)である。夕べの祈りには、観光客を含め多くの人が祈りを捧げに集まってくる。筆者もほとんど毎日参列した。木曜日はヴィカル合唱団が賛美を捧げるが、それ以外はセント・ポール大聖堂聖歌隊が賛美を捧げる。

¹⁸ St Paul's Cathedral Choir School, *St Paul's*, 1999, p.7

¹⁹ ibid., p.8

²⁰ ルカによる福音書、第1章47-55節。聖母マリアのカンティクム。聖務日課の中で最も盛大に行われる「晩課」＝夕べの祈りで歌われる。

三ヶ尻正『ミサ曲・ラテン曲・教会音楽ハンドブックーミサとは・歴史・発音・名選曲ー』ショパン, 2001, p.166

²¹ ルカによる福音書第2章29-32節。シメオンのカンティクム。一日を締めくくる聖務

日課「終課」で歌われる。

三ヶ尻, 前掲書, p.167

²² おもに英国国教会系教派の礼拝において任意に歌われる原則として英語の宗教合唱曲集。

金澤正剛監修『新編 音楽小辞典』音楽之友社, 2004, p.15

²³ 英国国教会の礼拝において詩篇などをハーモニーで唱える朗唱法、およびそのための4声体定型。同和音反復主体の定型で、中間と結びで和声が動く。詩篇各行の長短に同和音反復部で適応しながら、各行をこの定型で唱えていく。

金澤, 前掲書, pp.14-15

²⁴ エドワード・バロウズは、1985年8月に生まれた。彼は、1993年のセント・ポール大聖堂の聖歌隊員になり、1997年の聖歌隊員長に任命された。彼は卒業後、弟のパトリック(Patrick)と一緒に兄コナーがクアイア・マスターを務めるボーイズ・エアー・クワイア(Boys Air Choir)のメンバーになった。(三兄弟そろってセント・ポール大聖堂聖歌隊員である。)これは、イギリスのトップクラスの聖歌隊員7名によって構成された少数精鋭ユニット。エドワードは奨学金を得て、チャーターハウスに進学した。彼の妹エリザベスはソールズベリー大聖堂少女聖歌隊員である。

²⁵ ダンスマガジン編『少年合唱団 Boy's Choir 天使の歌声』新書館, 2004, p.107

²⁶ 竹内洋「イギリスの私立中学における親のか階層と文化的・社会的再生産」『大衆教育時代におけるエリート中等学校の学校文化と人間形成に関する比較研究』2002, p.10

この調査は、私立学校情報サービス協会(The Independent Schools Information Service)がシンクタンク MORI に依頼した("Why and How Parents Choose Independent Schools" 2001)である。

²⁷ 私学学校では教師一人当たりの生徒数は9.5人、公立校では18人である。

Independent Schools Council, 2005-2006 *Snapshot Independent Schooling in the United Kingdom*, 2006

²⁸ Department for Education and Skills, *National Curriculum Assessments at Key Stage 2 in England*, 2006, p.17 から作成。

²⁹ *ibid*, p.17 より作成。

³⁰ この点については、宮島, 前掲書, 2001 を参照した。宮島は、HMC 加盟校 204 校と、全国上位 100 校の GCE の試験結果を分析し、HMC 加盟校は全体的に他の学校種より非常に学力は高いとした上で以下のことを明らかにした。学費が高ければそれだけ GCE でいい成績をとっているというわけではなく、逆に学費が安ければそれだけ GCE でいい成績をとっているというわけでない。むしろその逆で、学費が高い学校よりも低い学校のほうが上位に食い込んでいく傾向が非常に多いように見受けられる。

³¹ Independent Schools Council, *op. cit.*

第3章 セント・ポール大聖堂学校における卒業生の進路調査

本章では、セント・ポール大聖堂学校における卒業生の進路の統計的な調査により、彼らが形成したキャリアを検討し、セント・ポール大聖堂学校の教育効果について考察を試みる。

第1節 セント・ポール大聖堂学校卒業生の進路

本節では、セント・ポール大聖堂学校卒業生の進路調査の対象について検討を行う。そして、セント・ポール大聖堂学校卒業生の進路調査の分析方法について、基礎データとともにその詳細を述べる。本研究で使用した“*Register*”（レジスター）（1991）¹はデータ化し、資料として添付しているので、ひとりひとりの具体的な情報については巻末資料を参照されたい。

1. 分析する対象について

セント・ポール大聖堂学校卒業生の進路調査はギルド・カンパニーから出版されているレジスター（1991）の中の「Old Boys」、いわゆる同窓会名簿を統計して行う。レジスターには、歴代の校長、副校長、オルガニスト、副オルガニスト、アシスタントオルガニスト、オルガン奨学生、音楽監督、それぞれの楽器の先生、そして監督生（Head Boys）、クリケットのキャプテン、フットボールのキャプテン、卒業生の名前などが記されている。

ギルド・カンパニー（正式名称は The Guild of the Companions of the St. Paul）は、次のような目的で 1891 年に設立された。第 1 に、大聖堂学校の卒業生を結びつけることであり、それぞれが思い出とともに連絡を取り合うことができるため、また現在の大聖堂や大聖堂学校の組織と関係を持つためである。第 2 は、信仰告白式²の時に誓った彼らの純粋な人生と目標を保ち続け、さらに発展させることを援助するためであるとされている。³

ギルド・カンパニーから出版されているレジスターは、1920 年から発刊されており、1991 年に発刊されたものが最新である。レジスターは第 1 刊（1920）、第 2 刊（1924）、第 3 刊（1928）、第 4 刊（1932）、第 5 刊（1935）、第 6 刊（1937）、第 7 刊（1947）、第 8 刊（1952）、第 9 刊（1964）、第 10 刊（1991）と発刊されている。しかし発刊年から見ても分かるように、定期的に整理され出版されているものではない。特に 1964 年に発刊された第 9 刊と、1991 年に発刊された第 10 刊の間には 27 年もの開きがある。⁴ また第 10 刊には、それまで発刊されたレジスターとは整理の仕方に違いが見られる。第 1 刊から第 9 刊までは、整理した当時の職業あるいは在籍学校と現住所のみが記されていた。しかし第 10 刊には、卒業後進学した中等教育機関、高等教育機関、そして職業と現住所について記されている。よって本研究では、情報の多い第 10 刊を調査の対象とし、卒業生の職業から音楽教育の効果について検討を行う。さらに進学した中等教育機関、ならびに高等教育機関と職業の関係について分析する。

資料に記されている卒業生の人数は 556 名である。まず、卒業生の年代は 1890 年代から 10 年ごとに区切って分けた。これは卒業年次に年代を合わせたものであり、1890 年代から 1990 年代まで分布している。下記表 3-1 は、年代ごとの分布である。表 3-1 から分かるように、それぞれの年代の人数にはばらつきがあるが、これは時代ごとに整理された資料ではないので、年代ごとの人数をそろえることはしていない。

しかし、第 2 節で用いる年代別のグラフは、あまりに年代分布の少ない「1890 年」「1900 年」「1910 年」「1920 年」は、あらかじめ除外して作成している。

表 3-1 年代分布

年代	人数	% (全体)
1890	1	0.2
1900	4	0.7
1910	31	5.6
1920	47	8.5
1930	69	12.4
1940	66	11.9
1950	75	13.5
1960	81	14.6
1970	80	14.4
1980	92	16.5
1990	6	1.1
不明	4	0.7
合計	556	100.0

2. 分析方法について

セント・ポール大聖堂学校で行われている音楽教育の教育の成果について検討するために、卒業生の進路とその職業選択について資料をもとに分析する。彼らが進学した中等教育機関また高等教育機関は、エリート養成に携わっている学校としての位置づけを明らかにすると同時に、職業選択にも影響を及ぼしていると考えられる。

資料を分析するにあたって、「年代」「中等教育機関」「中等教育機関有名校」「第 1 高等教育機関」「第 2 高等教育機関」「第 1 職業」「第 2 職業」の 7 項目に分類した。

以上の項目を用いて、本研究では、以下の視点で分析を行う。

第 1 に、卒業生が進学した中等教育機関ならびに高等教育機関について分析する。

第 2 に、卒業生が就いている職業について分析する。また、音楽関係の職業をさらに分析するために、音楽関係の職業については詳細に検討を加えた。

第2節 セント・ポール大聖堂学校卒業生の進路調査結果と考察

本節では、エリート教育機関として位置づけられたセント・ポール大聖堂学校で行われる音楽教育の教育効果について、彼らのキャリアの実証的なデータにもとづいて分析と考察を行いたい。

1. 卒業生の進学中等教育機関の分析

進学した中等教育機関は、「私立学校」「公立校」「不明」の3つのカテゴリに分類した。なお、学校の分類については主に各々の学校のホームページを参考にして行った。また、私立学校会議 (Independent Schools Council)⁵や全国グラマー・スクール協会 (National Grammar Schools Association)⁶、さらに校長議会 (The headmasters' and headmistresses' Conference)⁷も参照した。

「私立学校」にはインデペンデント・スクール、そしていわゆるパブリック・スクールも含む。「公立校」には、エリート選抜校であったグラマー・スクールを含むほか、1950年代に設立されたコンプリヘンシブ・スクールもカテゴリの中に含んでいる。公立校に関しては教育改革に伴い学校が変化しているが、本調査は1890年代から1990年代と約100年と範囲が広いので、政府下におかれている学校を「公立校」としている。

表3-2は、進学した中等教育機関の分布である。

表3-2 中等教育機関

学校分類	人数	% (全体)
私立学校	409	73.6
公立校	58	10.4
不明	89	16.0
合計	556	100.0

セント・ポール大聖堂学校卒業生が進学した中等教育機関は、私立学校進学が73.6%を占めている。私立学校の予科であるプレパラートリー・スクールであるので、私立学校に進学するものが多い。一方で、10%ほどの生徒は公立校に進学している。これは、エリート選抜校であったグラマー・スクールに進学している生徒がほとんどである。しかし近年はコンプリヘンシブ・スクールに進学する者も見られた。

進学先の大半をなす私立学校のうち、超有名校 (9大パブリック・スクール) と、有名校といわれるパブリック・スクールを分類して図3-1に表した。超有名校にあたる9大パブリック・スクールは、先述したウィンチェスター、イートン、セント・ポールズ、シュールズベリー、ウェストミンスター、マーチャント・テイラーズ、ハロウ、チャーターハウスである。有名校の分類は、伊藤が作成した「有名パブリック・スクール一覧 (44校)」⁸を参照している。⁹

有名パブリック・スクールへの進学は、「9 大パブリック・スクール」と「有名校」を合わせて 30%を超える。9 大パブリック・スクールの中では、セント・ポールズ校への進学が最も多かった。

図3-1 有名パブリック・スクール

No. 3 中等教育 有名校〈SA〉5桁目

N = 556				
9大パブリック	有名校	その他私学	公立	不明
4.7	27.5	41.4	10.4	16.0

図 3-2 の年代別の進学先を見ると、1950 年代以降、公立校に進学する生徒の割合が増加していることが分かる。これは先述した労働党による教育改革が影響しているのではないかと考える。第 1 章で述べたように、1960 年以降労働党の教育改革によって、「無選抜」を基本とするコンプリヘンシブ・スクールは普及した。その教育内容は、従来のグラマー・スクール、テクニカル・スクールおよびモダン・スクールすべての要素を合わせもつものとして充実していた。¹⁰ 第 2 章で分析を行ったカリキュラムの変遷をみても、1960 年代以降には「11 歳試験」の受験の対応についても触れられており、児童が公立校へ進学する道が用意されたのではないかと考える。

図3-2 年代別中等教育機関

表 1 (X軸) No. 13 中等教育機関〈SA〉3桁目
表 1 (Y軸) No. 12 年代〈SA〉8桁目

	私学学校	公立校	不明	N
全体	73.8	10.5	15.7	541
1910	67.7	6.5	25.8	31
1920	55.4	10.6	34.0	47
1930	63.8	4.3	31.9	69
1940	71.2		25.8	66
1950	84.0		9.3	75
1960	80.3		14.8	81
1970	76.2		16.3	80
1980	78.3		14.1	92

2. 卒業生の進学高等教育機関の分析

次に進学した高等教育機関は、「ケンブリッジ」「オックスフォード」「音楽大学」「他の大学」「進学なし」の5つのカテゴリの分類し、卒業生の高等教育機関への進学傾向を見る。高等教育機関は、進学した高等教育機関を2つまでデータ化した。これは複数の高等教育機関で教育を受けたものを調べるためである。

イギリスには元来大学が少なかった。大学というのは、ケンブリッジやオックスフォードのように研究機関を指すものであり、まさに選ばれた者、つまりエリートだけが進学するものであったため、大学進学率も極めて低かった。また、実業家の子息の学歴はパブリック・スクールだけで十分と考えられ、卒業後は実務経験を積んで、父親の職を継ぐ者が多かった。

しかし、戦後の労働党を中心とした教育の機会均等を目指す改革により、大学進学率は現在約40%にまで上昇している。¹¹ また、このような教育改革に伴い、かつてはポリテクニク（Polytechnic）と呼ばれていた科学技術の専門教育機関は、1992年以降順次大学に格上げされたので、この種の学校も「他の大学」のカテゴリに含んでいる。表3-3は、進学した高等教育機関である。

表3-3 高等教育機関

学校分類	人数	% (全体)
オックスフォード	65	11.7
ケンブリッジ	35	6.3
音楽大学	27	4.9
他の高等教育機関	95	17.1
進学なし	334	60.1
合計	556	100.0

高等教育機関への進学率を見ると40%に近い者が進学しており、これはイギリスにおいて非常に高い進学率といえよう。

高等教育機関の内訳は、オックスブリッジに進学する者が約20%近く、他の高等教育機関に進学する者の割合がその後を追う。これらに比べて、音楽大学への進学は多くはない。

図3-3で、年代別に高等教育機関への進学率を見てみると、1950年代以降高等教育機関への進学率が上昇している。また、オックスブリッジ以外の高等教育機関への進学もかなり増加している。1980年代は年齢的にまだ中等教育機関に在籍している者もいるので「進学なし」の割合が増えているが、イギリスにおける高等教育機関への進学率が1980年代前半で10%であるから、セント・ポール大聖堂卒業生の高等教育機関への進学率は非常に高いといえよう。とくに1960年代には高等教育機関への進学率が70%を超えている。つまり、セント・ポール大聖堂学校の卒業生は高学歴な者が多いことが判明した。

図3-3 年代別高等教育機関

表 題 (X軸) No.4 高等教育機関 種別 <SA> 5桁ナリ
表例1 (Y軸) No.12 年代 <SA> 8桁ナリ

	ケンブリッジ	オックスフォード	音楽大学	他の大学	進学なし	N
全体	12.0	6.3	5.0	17.6	59.1	541
1910	6.5	6.5	6.5		77.3	31
1920	8.5	4.3	10.6		74.5	47
1930	10.1		8.7		76.9	69
1940	9.1	10.6			80.3	66
1950	14.7	9.3	18.7		56.0	75
1960	17.3	16.0	9.9	29.6	27.2	81
1970	16.3	7.5	6.3	37.4	32.5	80
1980	8.7	14.1			70.6	92

図3-4は、第1高等教育機関から第2高等教育機関への進学を表す。X軸は第1高等教育機関、Y軸は第2高等教育機関である。さらに第3高等教育機関へと進学した者もいるが、これは特別な場合であると考え、第2高等教育機関までを分析の対象とする。

図3-4 高等教育機関と第2高等教育機関

表 題 (X軸) No.5 高等教育2 <SA> 5桁ナリ
表例1 (Y軸) No.4 高等教育機関 種別 <SA> 5桁ナリ

	ケンブリッジ	オックスフォード	音楽大学	他の大学	進学なし	N
全体	7.2			89.7		556
ケンブリッジ	4.6	6.2	10.8		75.3	65
オックスフォード	5.7	11.4		80.0		35
音楽大学	11.1	18.5		70.4		27
他の大学		25.3		72.6		95
進学なし				100.0		334

図3-4を見ると、オックスブリッジを卒業した者はさらにオックスブリッジへ進学しているが、音楽大学や他の高等教育機関からは進学していない。また、オックスブリッジ、音楽大学、他の大学のカテゴリに共通して、第2の高等教育機関として音楽大学へ進学す

る者がいることから、他の学問を修めながらも音楽に対し高い関心を持っていたことが推察される。これは、セント・ポール大聖堂学校の音楽教育の影響が考えられよう。

さらに、中等教育機関と高等教育機関の関係を図3-5を見ると、有名パブリック・スクールからのオックスブリッジへの進学が最も多いことがわかった。

図3-5 中等教育機関と高等教育機関

表 題 (X軸) No. 4 高等教育機関 種別 <SA> 5桁目
表 例 1 (Y軸) No. 13 有名校 <SA> 4桁目

	ケンブリッジ			オックスフォード	音楽大学	他の大学	進学なし	N
全体	11.7	6.3	4.9	17.1		60.1		556
有名校	17.3	8.9	5.6	15.6		52.6		179
他の私学	10.0	6.1	6.1	22.6		55.2		230
公立校	13.8	5.2	5.2	19.0		56.8		58
不明	4.5					89.9		89

3. 卒業生の職業選択の分析

職業種については、「音楽関係」「芸術」「メディア・舞台」「国教会・教会関係」「軍人」「金融」「医療」「教師」「科学・技術」「政治家・行政官」「ビジネス」「法律」「その他」「死亡」「不明・退職・学生」の15のカテゴリに分類し、卒業生が就く職業から音楽教育の効果、また複線型の教育体系との関係について分析する。この分類は、バムフォードがハロウ校やイートン校の卒業生の就職先を調査した研究¹²を参考にし、「音楽関係」などセント・ポール大聖堂学校で特徴的な職業であると考えられるものを加えたものである。

「音楽関係」には、演奏家、大学や学校で音楽の教鞭をとる者、また民間で教えている者、教会で聖歌隊の指揮者やオルガニストを勤める者、さらに音楽に関する仕事をしている者など、音楽に直接関わりのある仕事に就いている者を含んでいる。「芸術」にはアートやインテリア関係の仕事、「メディア・舞台」はテレビ関係の仕事や、舞台俳優などを含む。

「国教会・教会関係」は、大聖堂や教会、また学校のチャペルで聖職者として教会に従事している者を指す。「軍人」は英国軍に従事する者、「金融」は銀行や投資家、会計士として働く者を含む。「医療」は、病院で医師として勤務するもの、また薬剤関係の仕事をしている者も含む。「教師」は、大学教授、大学の講師、チューターとして勤める者、また小・中・高校で勤務する者を含む。「科学・技術」は、エンジニアとして勤めるなどを指す。「政

「政治家・行政官」は、政府職員として、あるいは地方政府の職員として働く者を含む。「ビジネス」は、会社の経営者や、会社に従事しているものを含む。「法律」は、弁護士や事務弁護士として法に関わる仕事をしている者を含む。「その他」には、農業など上記に記したものには分類されないものを含む。「死亡」とは、資料に「d.」と記された者を指す。資料にはどのように亡くなったかまで記されている。「不明・退職・学生」は、資料に職業が記されていない者、あるいは退職したと考えられる年代の者、そして年齢的に学生であると考えられるものを含んでいる。表3-4は、分類した職業の分布である。

表3-4 職業分類

年代	人数	% (全体)
音楽関係	86	15.5
メディア・舞台	10	1.8
芸術	9	1.6
国教会・教会関係	18	3.2
教師・大学人	24	4.3
金融	35	6.3
医療	14	2.5
軍人	8	1.4
科学・技術	23	4.1
行政官・政治家	9	1.6
ビジネス	53	9.5
法律	10	1.8
その他	20	3.6
死亡	45	8.1
不明・退職・学生	192	34.5
合計	556	100.0

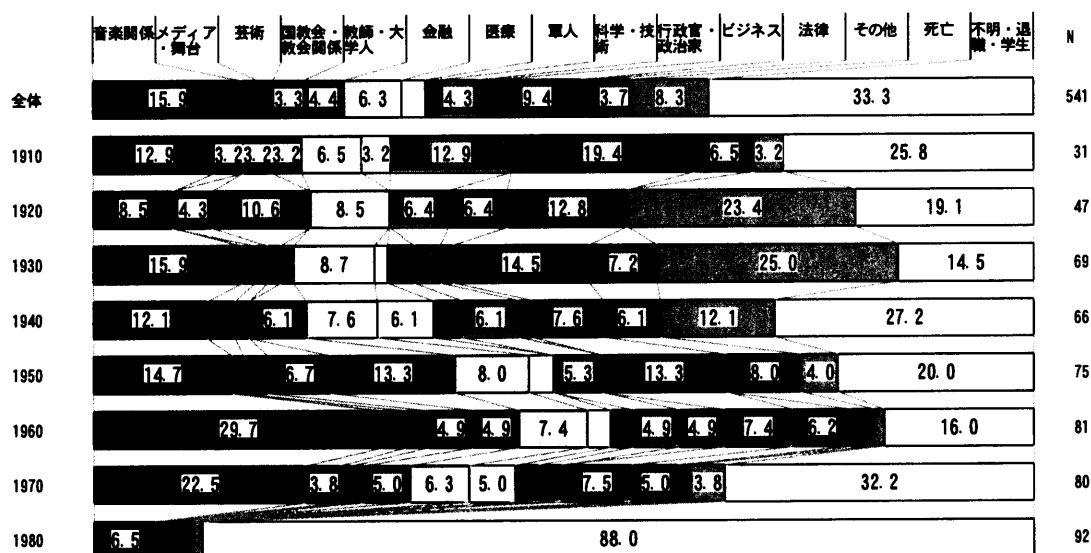
表3-4を見ると、音楽関係の職に就く者が15.5%と、他の職業に比べて群を抜いて多い。次いで、ビジネスが9.5%、金融も6.3%である。イギリスにおいて金融や国教会関係の職というものは、エリートが占める割合が高い職¹³である。

音楽関係の職に就くものが多いことは、学校での行われた音楽教育が職業選択の文脈に含まれることを意味すると考えられよう。

図3-6は、年代別の職業分類である。どの時代においても、音楽関係の職に就く者の割合が高いことがわかる。

図3-6 年代別職業分類

表 頭 (X軸) No.6 職業1 <SA> 15歳以下
表 例1 (Y軸) No.12 年代 <SA> 8歳以下



さらに、高等教育機関と職業の関係を表した図3-7を見ると、音楽関係の職に就いている者は、音楽大学卒業の者に限っておらず、オックスブリッジをはじめ他の大学、あるいは大学に進学していない者もその職に就いていることがわかる。特に、高学歴であるオックスブリッジに進学した者が音楽関係の職についている割合は高いということが明らかになった。

図3-4の第1高等教育機関からさらに第2高等教育機関へ進学を表すグラフと比較して分析すると、オックスブリッジからさらに音楽大学へ進学している者がいるので音楽関係の職に就く者の割合には影響している。しかし、オックスブリッジ卒業生で音楽関係の職に就いている者の大半は、オックスブリッジが最終学歴である。ゆえに、オックスブリッジへ進学した者のエリート教育課程には、音楽が深く関わっていたと推察できる。

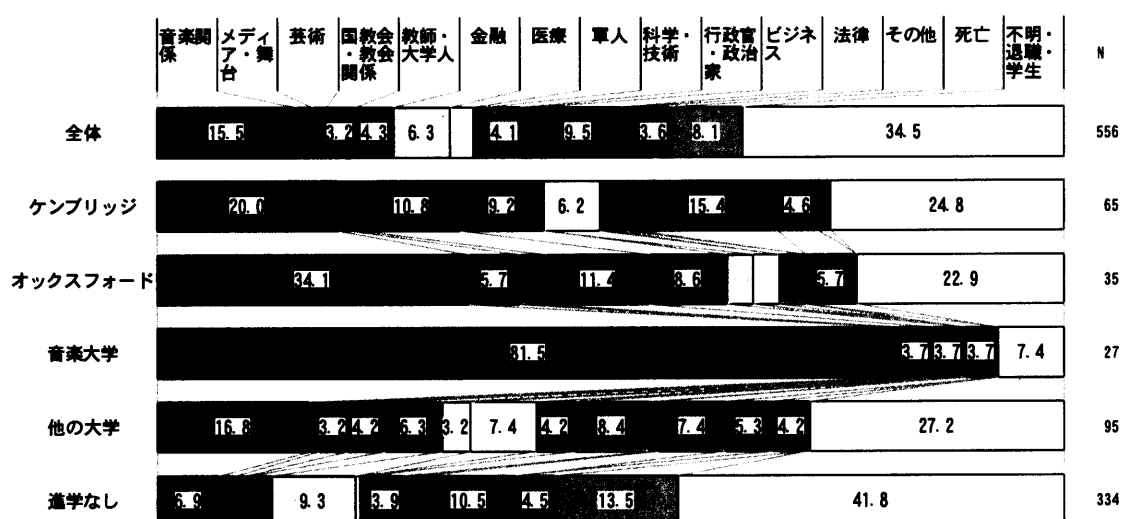
また、イギリスでは社会的地位の高い職である「国教会・教会関係」の聖職者の職には、オックスブリッジを卒業した者が就く割合が他と比べて高い。聖職者は、伝統的専門職の最たるもので、長きにわたりオックスフォード大学出身者の最大かつ独占的なマーケットであった。大学の世俗化とともに「聖職離れ」は進行し、1890年以降は社会的な要因¹⁴と大学・カレッジのポストに関する宗教的制限の撤廃などによって決定的となった。¹⁵しかし聖職者の職に就く者の割合は減ったとはいえ、オックスブリッジの優位性は認められる。

そして、オックスフォード出身者が新たに進出した専門職は、法廷弁護士や事務弁護士などの法曹職や、パブリック・スクールあるいは新設中等教育機関の校長や教師などの教職であった。¹⁶図3-7に見るように、オックスブリッジを卒業した者の「教師・大学人」の割合は10%近い。セント・ポール大聖堂学校卒業生の場合、オックスブリッジ卒業生は、大学で教授や講師として勤めている者が多い。また、パブリック・スクールなどの中等教

育機関の校長、教師として勤める者は、「他の大学」あるいは「進学なし」であった。（巻末資料参照）

図3-7 高等教育機関と職業分類

表 題 (X軸) No.6 職業 1 <SA> 15桁'リ
表 例 1 (Y軸) No.4 高等教育機関 種別 <SA> 5桁'リ



セント・ポール大聖堂学校以外の学生は、どのような職業選択をしているのであろうか。表 3-4 は、1970 年代におけるイギリスの大学学部卒業者の産業分布就職状況を表したものである。本研究とはカテゴリーの分類が違うため直接的な比較はできないが、参考までに紹介する。

表 3-4 大学学部卒業者の産業別就職状況（1973 年度）¹⁷

	大学学部卒業者 ⁱ	男子	人文・芸術系
林業・漁業	155 (0.7%)	1,233 (0.8%)	10 (0.3%)
石油化学工業	1,251 (5.4%)	1,037 (6.2%)	52 (1.7%)
製造業	4,469 (19.2%)	3,984 (23.6%)	208 (6.8%)
建築・土木業	1,229 (5.2%)	1,175 (7.0%)	5 (0.2%)
電気・ガス・水道事業・交通・運輸業	1,270 (5.4%)	1,053 (6.2%)	118 (3.9%)
金融・保険業	2,443 (10.5%)	1,946 (11.5%)	359 (11.8%)
卸売・小売業・不動産業	1,350 (5.8%)	829 (4.9%)	254 (8.4%)
公務 ⁱⁱ	7,333 (31.5%)	4,390 (26.0%)	1,034 (34.1%)
教職 ⁱⁱⁱ	1,448 (6.2%)	687 (4.1%)	389 (12.8%)
その他 ^{iv}	2,363 (10.1%)	1,642 (9.7%)	608 (20.0%)

合計	23,311(100.0)	16,876(100.0)	3,037(100.0)
----	---------------	---------------	--------------

注) イングランド、ウェールズ及びスコットランドの 42 大学に関する数値を示す。ここでいう卒業生とは、在籍年数に関わらず 1973 年度中に、第 1 学位（学士号に相当）を取得した者をいう。

ii 「公務」は、軍関係、病院・医療サービスを含む。

iii 「教職」は、高等教育機関及び継続教育機関教員を含む。

iv 「その他」は、開業弁護士、獣医、歯科医、文化施設、団体職員などである。

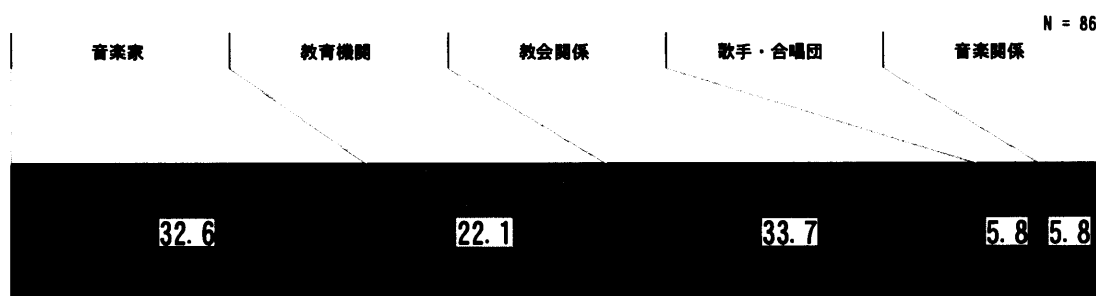
本調査のカテゴリ分類「音楽関係」の職に該当するのは、「教職」あるいは「その他」に含まれると推察される。「その他」のカテゴリには多くの職業が含まれているので、音楽関係の職に就いたものの割合は 2,363 人以下である。おそらく音楽関係の職に就いた者が多いと推察される人文・芸術系の学部を卒業した者の 608 人が「その他」の職についているので、全体の 2%以下の者が「その他」のうちの音楽関係の職に就いているのではないかと考えられる。同じように人文・芸術系の「教職」は、全体の 1%になる。2つのカテゴリを合計しても、音楽関係の職に就いたと推察されるのは 3%以下である。図 3-7 と比較すると、セント・ポール大聖堂学校卒業生の職業選択の分類との違いは明らかである。

4. 音楽関係の職についての分析

筆者は「音楽関係」と音楽に関係する職を 1 つのカテゴリにまとめたが、実際どのような職業についているのかを表したのが図 3-8 である。

図3-8 音楽関係の職業内訳

No.2 音楽関係分類〈SA〉5桁目



オーケストラでの演奏者や指揮者、作曲家など音楽家として働く者は「音楽家」、大学や中等教育機関などで教鞭をとる者、あるいは学校のオーケストラなどで指導する者、民間で音楽教師として教えている者は「教育機関」、大聖堂や教会の聖歌隊指揮者や聖歌隊員、オルガニストとして勤める者は「教会関係」、教会以外の合唱団で歌う者また声楽家として働く者は「歌手・合唱団」、そしてそれ以外の音楽関係の仕事をする者を「音楽関係」と分

類した。

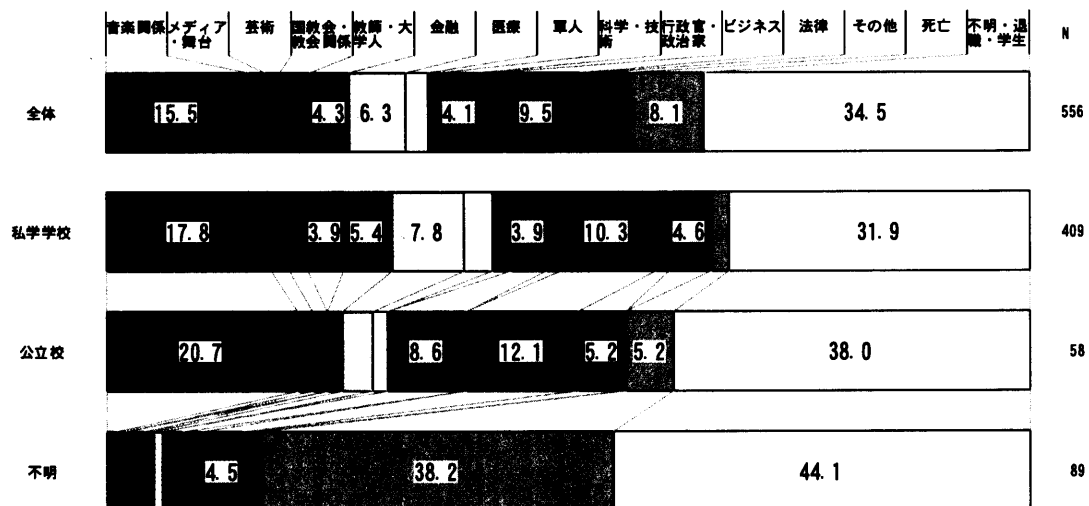
図3-8によると、わずかの差ではあるが「教会関係」に従事している者の割合が33.7%と最も高いことが明らかになった。ついで「音楽家」として働く者の割合が高いが、これは音楽を仕事とする者にとって、演奏家あるいは音楽教師として働くことと同じに、「教会関係」でその職に就くことが職業選択としてあることを意味する。ヨーロッパでは、音楽家の職業選択の1つとして教会に従事することが元来存在している。教会において、聖歌隊やオルガニストは非常に重要な役割を担っており、教会の礼拝、典礼には欠くことのできない存在である。また彼らは職務上の役割だけではなく、宗教的な役割も大きく担っている。キリスト教理念に基づいた人格形成を目指している大聖堂学校では、もちろん宗教教育も行われたし、聖歌隊員であった彼らは毎日賛美でもって教会で奉仕し、祈りを捧げていた。

本来聖歌隊学校というものは、聖職者育成のために、また聖歌隊員育成のために設立された。先述したように、そのような職に就く者は少なくなっているが、本来の学校の目的の実現が、現在においても見られることが明らかになった。

さらに図3-9は、中等教育機関と職業分類との関係を表したものである。

図3-9 中等教育機関と職業分類

表 1 (X軸) No. 6 職業1 (SA) 15272リ
表 1 (Y軸) No. 12 中等教育機関 (SA) 3472リ



「音楽関係」に注目すると、私立学校と公立校ともに高い割合を示している。また、「音楽関係」の職に就いた者の中等教育機関の詳細を下記表3-5に見ても、キングス・スクール・カンタベリー (King's School, Canterbury) に進学した卒業生の数は他と比べて多いが、ある特定の学校に限られておらず、実にさまざまな中等教育機関に進学していることがわかる。音楽学校に進学しているものもほとんどいない。

表 3-5

中等教育機関	卒業生数
King's School, Canterbury	10
Ardingly School	4
Trent College	4
King's College School, Wimbledon	3
Haileybury College	3
その他	62

以上のことから、以下の2点のことが推察される。

まず、セント・ポール大聖堂学校の卒業生にとって、学校生活と音楽活動との関係は中等教育機関に影響されていないこと。彼らがどのような教育機関に進学したとしても、音楽活動を持続していたと考えられる。音楽学校に進学して音楽活動を継続したのではなく、どのような学校に進学しても、それらの活動を受け入れられる環境が、エリート養成体系にはあるということが推察されよう。

第2に、セント・ポール大聖堂学校の音楽教育は生涯学習へとつながる音楽教育であり、彼らのキャリアに重要な影響を与えているということが考えられる。

- ¹ Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, Chase Web, 1991
- ² 原文では、「communion」となっており、これはプロテスタント教会で幼児洗礼を受けた者が、自己の信仰告白をして教会の正会員となる儀式である。堅信礼とも言われる。
- ³ St. Paul's Cathedral, *Choir School Register and War Roll*, W. STRAKER, LTD., 1920
- ⁴ レジスターが27年もの間発刊されなかった理由は定かではない。セント・ポール大聖堂のライブラリアンによると、特別な理由があつて発刊されなかったのではなく、計画的に発刊されているものではないようだ。
- ⁵ 私学学校会議は、1974年に教育の多様性と学校選択の機会をより促進するために設立された。
ホームページ <http://www.isc.co.uk/index.php/1>
- ⁶ 全国グラマー・スクール協会は1970年に創立された非政府団体である。この協会は、グラマー・スクールについての情報を公開するために創られた。
ホームページ <http://www.ngsa.org.uk/index.htm>
- ⁷ 校長会議は、1869年に結成された有名パブリック・スクールを含む団体である。この校長会議にはイギリスでも主要な約240校の学校が加盟している。9大パブリック・スクールもこれに属する。
ホームページ <http://www.hmc.org.uk/index.shtml>
- ⁸ 伊藤元道『英国パブリック・スクール物語』丸善、1993、pp.214-215
- ⁹ パブリック・スクールの分類に関しては、ハニー (J. Honey) が主要パブリック・スクールと弱小パブリック・スクールとにまとめたパブリック・スクールのリストもあるが、本研究では4つの観点から有名パブリック・スクールをまとめた伊藤のリストを参照した。
- ¹⁰ 下條美智彦『ヨーロッパの教育現場からーイギリス・フランス・ドイツの義務教育事情』春風社、2003、p.67
- ¹¹ イギリスの大学進学率は、近年急激に上昇している。1980年代前半は10%であったので、この20年間の間に飛躍的に上昇した。
- ¹² Bamford, T. W., *Rise of the public schools a study of boys' public boarding schools in England and Wales from 1837 to the present day*, London, 1967, pp.210-211
- ¹³ 先行研究においても、これらの職業をエリートが独占する職としている。
- ¹⁴ 社会的要因とは、農業恐慌による教会の地代収入の減少、神に対する信仰についての疑念の増大などを指す。
- ¹⁵ 安原義仁「近代オックスフォード大学の教育と文化ー装置とエートス」橋本伸也、藤井泰、渡辺和行、進藤修一、安原義仁共著『近代ヨーロッパの探求④ エリート教育』ミネルヴァ書房、2001、p.224
- ¹⁶ 安原、前掲書、2001、pp.225-226
- ¹⁷ 本間政雄、文部省大臣官房調査統計課「イギリスにおける大学卒業者の進路状況」『厚生補導』136号、1977、pp.54-58より作成。

終章 結論と今後の課題

これまでイギリスのエリート養成学校としての位置付けをもつセント・ポール大聖堂学校の音楽教育のカリキュラムと実態、またその教育効果についてみてきた。最後にその音楽教育の意義について検討し、今後の研究のために日本の音楽教育への示唆を論じて本論を閉じたい。

第1節 各章の要旨

各章で行った検討についてまとめると、以下の通りである。

序章では、イギリスの音楽教育に関する先行研究、またエリート教育に関する先行研究の検討を行った。先行研究には、聖歌隊学校の音楽教育の実態についての研究は見られず、本研究の直接的な先行研究は存在しなかった。また、エリート養成機関の初等段階における研究はまだあまり蓄積されておらず、卒業生の進路調査も中等教育機関以降が中心であった。よって本研究では、セント・ポール大聖堂学校を事例にし、音楽教育という切り口でエリート教育の検討を試みるとし、本研究における課題と方法を明らかにした。

第1章では、イギリス教育史と教育制度について検討を行い、聖歌隊学校という側面だけではなく、イギリスの教育体系の中にエリート養成学校として位置づくセント・ポール大聖堂学校の側面を明らかにした。また、セント・ポール大聖堂学校の1930年代以降のカリキュラム特に音楽教育カリキュラムの分析を行った。同校のカリキュラムは、戦後行われた様々な教育改革から大きな影響は受けておらず、カリキュラムの中での音楽教育の位置に変わりはない。むしろ音楽教育カリキュラムの内容は、年代をおって充実していったことが分析を通して明らかになった。

第2章では、セント・ポール大聖堂学校の現行カリキュラム、さらに聖歌隊学校のカリキュラムの分析を行った。またフィールド・ワークをもとに、聖歌隊の合唱指導の実態を明らかにした。さらに校長の聞き取り調査と私立学校を選ぶ親の教育目的からみえる学校像の検討を行った。同校の教育の目的は、決して学業重視ではなく、ひとりひとりの能力や可能性を引き出し、キリスト教理念に基づいた人格形成を目指すものである。現行カリキュラムの中に、音楽教育は重要な位置づけをもっていた。しかし音楽が特化的に配置されているのではない。パブリック・スクールと同様に、体育は実施される種目においてもまた施設においても充実したカリキュラムを擁している。また音楽から多くの奨学生を輩出しているように、学科や美術の分野からも奨学生を輩出していた。つまりセント・ポール大聖堂学校のカリキュラムは、どの分野にも偏らない全体的な視野をもったものであることが示された。私立学校を選ぶ親の期待は、質の高い教師による小規模学級で行われるひとりひとりに応じた教育であり、子どもがもつ潜在能力の開発であった。さらに親は、芸術・音楽教育が実施されるという要因も重視していることが明らかになった。セント・

ポール大聖堂学校はその期待に合致している学校であることがわかった。

第3章では、セント・ポール大聖堂学校の卒業生の進路について調査を行った。そして、彼らが進学した中等教育機関、高等教育機関、そして職業選択について分析した。卒業生の進路調査を通して明らかになったことは、卒業生には高学歴な者が多く、職業選択は多岐に渡っていることである。一方で聖歌隊学校としての特徴的である音楽関係の職に就いた者の割合が、他の職業の割合より群を抜いて多いことが判明した。さらに音楽関係の職に就いた者の進路の分析を通して、セント・ポール大聖堂学校で受ける音楽教育が彼らのキャリア形成に重要な影響を及ぼしていることが明らかになった。セント・ポール大聖堂学校は充実した音楽教育を誇る学校である。しかしながら第2章において校長も述べたように、同校の教育は音楽の専門家を育てることを目的としているのではなく、生徒の希望を尊重しまた支援していることが進路調査の結果からも示された。

第2節 結論

本研究では、エリート養成学校としての位置付けをもつセント・ポール大聖堂学校を事例として、卒業生の進路調査の分析を通して、エリート教育における音楽教育について検討を行った。

各章での検討の結果、明らかになったことは以下の通りである。

- ①セント・ポール大聖堂学校の音楽教育のカリキュラムは、戦後行われた様々な教育改革から大きな影響は受けず、カリキュラムの中での音楽教育の位置に変わりはない。
- ②セント・ポール大聖堂学校の教育の目的は学業重視ではなく、ひとりひとりの能力や可能性を引き出し、キリスト教理念に基づいた人格陶冶を目指すものである。
- ③現行カリキュラムの中に、音楽教育は重要な位置づけをもっていた。しかし音楽が特化的に配置されているのではない。セント・ポール大聖堂学校のカリキュラムは、どの分野にも偏らない全体的な視野をもったものである。
- ③私立学校を選ぶ親の期待は、質の高い教師による小規模学級で行われるひとりひとりに応じた教育であり、子どもがもつ潜在能力の開発であった。さらに親は、学校選択の要因として芸術・音楽教育が実施されていることも重視している。
- ④卒業生の進路調査から明らかになったことは、卒業生には高学歴な者が多く、その職業選択も多岐に渡っていたことである。また学校はそれを支援し、多くの可能性をもった教育を提供していることがわかった。
- ⑤多岐に渡る職業分類のなかでも、音楽関係の職に就いた者の割合が他の職業の割合より群を抜いて多いことが解明された。さらに音楽関係の職に就いた者の進路の分析を通して、セント・ポール大聖堂学校で受ける音楽教育が、彼らのキャリア形成に重要な影響を及ぼしていることが示唆された。
- ⑥充実した音楽教育を誇る学校であるが、音楽の専門家を育てることを目的として音楽教

育が実施されているわけではなく、音楽教育は人格形成に極めて重要なものとして位置づけられ、全人教育の一環として実施されていることが明らかになった。

セント・ポール大聖堂学校における音楽教育が、カリキュラムの中で重要な位置づけをもっていることはすでに検討したとおりである。同校の卒業生は高学歴な者が多く、オックスブリッジへの進学者も多く輩出している。さらにその職業選択は、音楽関係だけではなく多岐に渡っており、世にいうエリートを輩出しているエリート養成学校である。

ではエリート養成学校における音楽教育の意義とはなんだろうか。

第1章で検討した通り、さまざまな教育改革によってパブリック・スクールは学業重視への変化を余儀なくされている。今や公立校との競争化におかれたパブリック・スクールは、通学生や学業重視に傾斜することによって伝統的なパブリック・スクールの校風を失っていくので、全寮制を維持し続けるパブリック・スクールとの差は広がっている。それでもなお今でも、パブリック・スクールは勉強以外にスポーツ、宗教、演劇、工芸、音楽などの課外活動はかなり重視されていると竹内は述べている。¹

ウォルフォードは、パブリック・スクールの教師について以下のように述べている。

「教師は、学外試験の結果が重視されすぎることにも抵抗を感じている。彼らは、学校ができる限り効果的な教育をし、受験戦争に勝ち、大学入学率を上げるよう努力することは間違いなく受け入れているが、これらの目的を達成するため、学校が「受験産業」化することは拒んでいる。多くの教師が主張していたのは、パブリック・スクールとは全人格形成の場であり、学問と同時に、教育の文化、芸術、社会面についても関心をもつべきであるということだった。」²

さらに、竹内の聞き取り調査によると、パブリック・スクールのハウス・マスターは、オールラウンドな能力を身に付けた人に育てることを教育目標としている。学校は教育の場であるので、学問的に優秀な成績を収めることは当然であるが、それだけではなく、スポーツでも演劇でも、音楽でもさまざまな趣味を持って、それを練習できるようなチャンスを与えて、学問的な面だけではなく、人格のあらゆる面を育てる努力をしていると語っている。³

エリート養成学校であるパブリック・スクールが全人教育を目指していることはすでに周知のことであるが、エリート養成学校における音楽教育は、全人教育の理想の中に位置づけられている。そして、充実した音楽教育カリキュラムを擁している。しかしながら、音楽だけが特化的にあるいは閉鎖的に配置されているのではなく、全体的な視野をもったカリキュラムの枠組みの中に位置づいている。

非常に充実した音楽教育カリキュラムをもった学校ではあるけれども、セント・ポール大聖堂学校の目的は音楽家を育てることではなかった。その教育効果として音楽関係の職に就く者が最も多かったのであるが、学校はどこまでもひとりひとりの資質に適したものを見つけてそれを伸ばしていくことを目標としており、本人の意思を尊重して教育活動を行っている。それが、エリート養成学校における音楽教育なのである。

一方、日本の音楽教育はどうであろうか。ある意味において音楽における成功と学業における成功は複線型の教育体系をとっているといえるであろう。音楽家のコースと、学業において成功するコースが存在する。それぞれの教育体系に、音楽だけがあるいは学業だけが特化されて位置づいている。それゆえ、日本のエリート教育体系の中に、音楽教育というものは重要な位置づけをもっていない。ともすればエリート教育といった場合、偏差値エリートと言われがちな日本の現状は、全人教育を志向したオールラウンドな能力開発をめざすイギリスのエリート教育とは対照的であるといえよう。そのような日本の音楽教育の捉え方が、日本の公教育にも及んでいると考える。

セント・ポール大聖堂学校が目指すもの、それはキリスト教理念に基づいた人格形成そしてひとりひとりの潜在能力を伸ばす教育すなわち全人教育である。音楽教育は非常に充実しているが、決して特化的に配置するのではなく、全体的な視野を持ってカリキュラムは構成されている。換言すると、「一定の支配権をもつ・ないし指導的な地位にある少数の社会集団」⁴を世に送り出すエリート養成学校では、全人教育の理想の中に音楽教育を位置づけ充実したカリキュラムを擁して教育を施している。

つまり、イギリスの開放的なカリキュラム論にたつて音楽教育が実施されるとき、音楽教育は人間形成に豊かに反映されるのではないだろうか。このことを本論文の結論として主張したい。

第3節 今後の課題

本研究では、イギリスの養成学校に位置づくセント・ポール大聖堂学校を対象に検討を行った。本研究では、その教育効果を明らかにするために、1991年に発刊されたレジスターを用いて進路調査を分析した。しかし、よりその教育効果を明らかにするためにも、1920年から発刊された他のレジスターの分析を今後取り組む必要があるであろう。

また、同窓会名簿に書かれた職業からだけではなく、セント・ポール大聖堂学校の卒業生を対象に聞き取り調査を行うことによって、彼らにどのように音楽教育が影響を与えているのか、その効果についてより具体的、実証的に検討を加えたい。

加えて、セント・ポール大聖堂と同種のプレップ・スクールの分析を今後行い、エリート養成学校における音楽教育の位置づけとその意義について、またその教育効果についてさらなる検討を試みたい。

注

-
- ¹ ウォルフォード著，竹内洋，海部優子共訳「パブリック・スクールのディレンマ－解説にかえて」『パブリック・スクールの社会学 英国エリート教育の内幕』世界思想社，1996
 - ² ウォルフォード，前掲書，p.259
 - ³ 竹内洋「イギリスの私立中学における親のか階層と文化的・社会的再生産」『大衆教育時代におけるエリート中等学校の学校文化と人間形成に関する比較研究』2002，p.12
 - ⁴ 田中智志「エリート」『教育思想事典』教育思想学会，2000，pp.50-51

主要参考文献一覧

1. イギリスの音楽教育に関する文献

- (1) 川原浩, 石井博「イギリスにおける音楽教育の動態 (I) - エリザベス朝の音楽教育 -」『広島大学教育学部紀要 第一部』20 巻, 1971, pp.79-90
- (2) 川原浩, 石井博「イギリスにおける音楽教育の動態 (II) - イギリス革命期の音楽教育 -」『広島大学教育学部紀要 第一部』21 巻, 1972, pp.95-105
- (3) 川原浩, 石井博「イギリスにおける音楽教育の動態 (III) - 産業革命期の音楽教育 -」『広島大学教育学部紀要 第一部』22 巻, 1973, pp.105-116
- (4) 川原浩「イギリスにおける音楽教育の動態 (IV) - 19 世紀中期における音楽教育の思潮と実践 -」『広島大学教育学部紀要 第一部』23 巻, 1974, pp.163-175
- (5) 川原浩「イギリスにおける音楽教育の動態 (V) 19 世紀中期における音楽教育の思潮と実践 (B) ケイ・シャトルワースの民衆音楽教育に関する理論と実践 (その 1)」『広島大学教育学部紀要 第一部』26 巻, 1977, pp.237-247
- (6) 川原浩「イギリスにおける音楽教育の動態 (VI) - ケイ・シャトルワースの民衆音楽教育に関する理論と実践 (その 2) -」『広島大学教育学部紀要 第一部』31 巻, 1982, pp.111-119
- (7) 川原浩「イギリスにおける音楽教育の動態 (VII) - 19 世紀中期における学校音楽教育の発展 (その 1) -」『広島大学教育学部紀要 第二部』32 巻, 1983, pp.133-142
- (8) 川原浩「イギリスにおける音楽教育の実態 (VIII) - 19 世紀中期における音楽教育の発展 (その 2) -」『広島大学教育学部紀要 第二部』33 巻, 1984, pp.157-165
- (9) 塩原麻里「イギリスの中等音楽科教育に関する一考察 - キーステージ 3 から GCSE へ -」『東京学芸大学紀要 第 5 部門 芸術・健康・スポーツ科学』54 巻, 2002, pp.19-29
- (10) 塩原麻里「イギリスの音楽教育における評価 - ナショナルカリキュラムを中心にして -」『東京学芸大学紀要 第 5 部門 芸術・健康・スポーツ科学』55 巻, 2003, pp.25-34
- (11) 塩原麻里「英国の音楽科教育におけるカリキュラムの変遷とその背景 - ナショナル・カリキュラム成立の過程とその導入 -」『東京学芸大学紀要 第 5 部門 芸術・健康・スポーツ科学』56 巻, 2004, pp.1-16
- (12) 高須一「英国の学校音楽教育における『作曲領域』の変遷 (1)」『音楽文化教育学研究紀要』2002, pp.79-94
- (13) 高須一「英国の学校音楽教育における『作曲領域』の変遷 (II)」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』2002, pp.501-507

2. イギリスのエリート教育に関する文献

- (1) 秋島百合子『パブリック・スクールからイギリスが見える』朝日新聞社, 1995
- (2) 伊藤元道『英国パブリック・スクール物語』丸善, 1993

- (3) 竹内洋「イギリス学外試験と大学入学者選抜ー近年の変化と機会の不平等の視点からー」『京都大学教育学部紀要』1991, pp.62-79
- (4) 竹内洋『パブリック・スクール 英国式受験とエリート』講談社, 1993
- (6) 竹内洋「変貌するパブリック・スクール」『悠峰職業科学研究紀要』4 巻, 1996, pp.54-58
- (7) 竹内洋「イギリスの私立中学における親のか階層と文化的・社会的再生産」『大衆教育時代におけるエリート中等学校の学校文化と人間形成に関する比較研究』2002, pp.1-18
- (8) 橋本伸也, 藤井泰, 渡辺和行, 進藤修一, 安原義仁共著, 『近代ヨーロッパの探求④ エリート教育』ミネルヴァ書房, 2001
- (9) 藤井泰「近代イギリスのエリート教育に関する研究ー19 世紀パブリック・スクールの生徒の社会的構成ー」『松山大学論集』249 巻, 1999, pp.97-121
- (10) 藤井泰「19 世紀イギリスのパブリック・スクール出身者の進路」『松山大学論集』250 巻, 1999, pp.153-169
- (11) 宮島健次「イギリスにおけるパブリック・スクールの教育効果の一側面に関する研究ーパフォーマンス・テーブルの分析を中心にー」『国立教育政策研究所紀要』第 131 集, 2001
- (12) 村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ書房, 1980
- (13) 望田研吾『現代イギリスの中等教育改革の研究』九州大学出版会, 1996
- (14) 渡辺誠一「イギリスにおけるエリート教育」『日本の科学者』340 号, 1996, pp.11-15
- (15) G. ウォルフォード著, 竹内洋, 海部優子共訳『パブリック・スクールの社会学 英国エリート教育の内幕』世界思想社, 1996
Geoffrey Walford, *Life in Public Schools*, Methuen, 1986
- (16) W. D. ルービンSTEIN 著, 藤井泰, 村田郁夫, 平田雅博, 千石好郎共訳『衰退しない大英帝国 その経済・文化・教育 1750-1990』晃洋書房, 1997
W. D. Rubinstein, *Capitalism, culture and decline in Britain 1750-1990*, Chapman & Hall Ltd., 1993
- (17) Bamford, T. W., *Rise of the public schools a study of boys' public boarding schools in England and Wales from 1837 to the present day*, London, 1967
- (18) Donald Leinster - Mackay, *The Rise of The English prep school*, The Falmer Press, 1984

3. イギリスの教育に関する文献

- (1) 池田潔『自由と規律 イギリスの学校生活』岩波書店, 1963
- (2) 池田良三『イギリスの教育』ぎょうせい, 1980, pp.13-14
- (3) 大田直子「国家の教育責任の新たな在り方ーイギリス『品質保証国家』の教育政策」『教育学研究』第 71 巻-1 号, 2004

- (4) 小林章夫『教育とは－イギリスの学校から学ぶ』NTT 出版, 2005
- (5) 下條美智彦『ヨーロッパの教育現場から－イギリス・フランス・ドイツの義務教育事情』春風社
- (6) 田口仁久『イギリス学校教育史』学芸図書株式会社, 1975
- (7) 秦由美子『変わりゆくイギリスの大学』学文者, 2001
- (8) 藤田利光「英国ナショナル・カリキュラムと学習指導要領」『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』第 56 集, 和歌山大学教育学部, 2006, pp.59-69
- (9) 本間政雄, 文部省大臣官房調査統計課「イギリスにおける大学卒業者の進路状況」『厚生補導』136 号, 1977, pp.54-64
- (10) J.R.H.ムアマン著／八代崇, 中村茂, 佐藤哲典共訳『イギリス教会史』聖公会出版, 1991, pp.41-42
John Richard Humpidge Moorman, *A history of the church in England*, Morehouse Pub Co, 1986
- (11) Department for Education and Skills, *National Curriculum Assessments at Key Stage 2 in England*, 2006
- (12) Department for Education and Skills, *Education and Training Statistics for the United Kingdom*, 2006
- (13) Independent Schools Council, *2005-2006 Snapshot Independent Schooling in the United Kingdom*, 2006

4. セント・ポール大聖堂学校に関する文献

- (1) 『セント・ポール大聖堂 公式ガイドブック』Jarrold Publishing, 1999
St. Paul Cathedral, Jarrold Publishing, 1999
- (2) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register and War Roll*, W.STRAKER, LTD., 1920
- (3) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, 1924
- (4) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, 1928
- (5) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, 1932
- (6) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, WM. BRIDGE & Co., 1935
- (7) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, WM. BRIDGE & Co., 1937
- (8) St. Paul's Cathedral, *St. Paul's Cathedral Choir School*, 1937

- (9) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, NETHERTON & WORTH LTD., 1947
- (10) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, NETHERTON & WORTH LTD., 1952
- (11) St. Paul's Cathedral, *St. Paul's Cathedral Choir School*, 1952
- (12) St. Paul's Cathedral, *Choir School Register*, HEADS (Congleton) LTD., 1964
- (13) St. Paul's Cathedral, *St. Paul's Cathedral Choir School*, 1967
- (14) St. Paul's Cathedral, *St. Paul's Cathedral Choir School*, 1975
- (15) St. Paul's Cathedral, *St. Paul's Cathedral Choir School*, 1975
- (16) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, Chase Web, 1991
- (17) St. Paul's Cathedral Choir School, St Paul's, 1999
- (18) St. Paul's Cathedral Choir School, *St Paul's Prosepectus Information Booklet*, 2005/2006

5. 聖歌隊に関する文献

- (1) ダンスマガジン編『少年合唱団 Boy's Choir 天使の歌声』新書館, 2004
- (2) 三ヶ尻正『ミサ曲・ラテン曲・教会音楽ハンドブッケーミサとは・歴史・発音・名選曲一』ショパン, 2001
- (3) カーティス・プライス, 美山良夫 監訳『西洋の音楽と社会③ オペラの誕生と教会音楽 初期バロック』音楽之友社, 1996
Curtis Price, *Man & Music The Early Baroque Era From the late 16 century to the 1660s*, The Macmillan Press Ltd., 1993
- (4) John Morehen, Cambridge Studies in Performance Practice English choral practice, 1400-1650, Lightning Source UK Ltd., 1995

6. 事典類

- (1) 中森義治「全人教育」『新教育学大事典』第4巻, 第一法規出版, 1990, pp.508-509
久世敏雄「人格形成」『新教育学大事典』第4巻, 第一法規出版, 1990, pp.237-238
- (2) 松村明監修「ジェントリー (gentry)」『大辞泉』小学館『大辞泉』編集部, 1995, p.1138
- (3) 中森義治「全人教育」『現代学校教育大事典』第4巻, 2002, pp.493-495
- (4) 塩原麻里「イギリス」『日本音楽教育事典』音楽之友社, 2004, pp.29-32
山下薫子「音楽教育思想」『日本音楽教育事典』音楽之友社, 2004, pp.133-138
- (5) 金澤正剛監修「アングリカン・チャント」『新編 音楽小辞典』音楽之友社, 2004, pp.14-15
「アンセム」『新編 音楽小辞典』音楽之友社, 2004, p.15

7. 主要参考ホームページ

- (1) ウィンチェスター・カレッジホームページ

<http://www.winchestercollege.co.uk/NetCommunity/Page.aspx?&pid=178&srcid=337>

- (2) 教育雇用訓練省ホームページ

<http://www.dfes.gov.uk/>

- (3) 校長会議ホームページ

<http://www.hmc.org.uk/schools/q-s.htm>

- (4) 私学学校会議ホームページ

<http://www.isc.co.uk/index.php/1>

- (5) セント・ポール大聖堂ホームページ

<http://www.stpauls.co.uk/page.aspx?theLang=001lngdef&pointerid=169345dwprEOVViTRLd8xXbHBDHGbzge>

- (6) 聖歌隊学校協会ホームページ

<http://www.choirschools.org.uk/index.htm>

- (7) 全国グラマー・スクール協会ホームページ

<http://www.ngsa.org.uk/index.htm>

主要参考文献一覧

1. イギリスの音楽教育に関する文献

- (1) 川原浩, 石井博「イギリスにおける音楽教育の動態 (I) - エリザベス朝の音楽教育 -」『広島大学教育学部紀要 第一部』20 巻, 1971, pp.79-90
- (2) 川原浩, 石井博「イギリスにおける音楽教育の動態 (II) - イギリス革命期の音楽教育 -」『広島大学教育学部紀要 第一部』21 巻, 1972, pp.95-105
- (3) 川原浩, 石井博「イギリスにおける音楽教育の動態 (III) - 産業革命期の音楽教育 -」『広島大学教育学部紀要 第一部』22 巻, 1973, pp.105-116
- (4) 川原浩「イギリスにおける音楽教育の動態 (IV) - 19 世紀中期における音楽教育の思潮と実践 -」『広島大学教育学部紀要 第一部』23 巻, 1974, pp.163-175
- (5) 川原浩「イギリスにおける音楽教育の動態 (V) 19 世紀中期における音楽教育の思潮と実践 (B) ケイ・シャトルワースの民衆音楽教育に関する理論と実践 (その 1)」『広島大学教育学部紀要 第一部』26 巻, 1977, pp.237-247
- (6) 川原浩「イギリスにおける音楽教育の動態 (VI) - ケイ・シャトルワースの民衆音楽教育に関する理論と実践 (その 2) -」『広島大学教育学部紀要 第一部』31 巻, 1982, pp.111-119
- (7) 川原浩「イギリスにおける音楽教育の動態 (VII) - 19 世紀中期における学校音楽教育の発展 (その 1) -」『広島大学教育学部紀要 第二部』32 巻, 1983, pp.133-142
- (8) 川原浩「イギリスにおける音楽教育の実態 (VIII) - 19 世紀中期における音楽教育の発展 (その 2) -」『広島大学教育学部紀要 第二部』33 巻, 1984, pp.157-165
- (9) 塩原麻里「イギリスの中等音楽科教育に関する一考察 - キーステージ 3 から GCSE へ -」『東京学芸大学紀要 第 5 部門 芸術・健康・スポーツ科学』54 巻, 2002, pp.19-29
- (10) 塩原麻里「イギリスの音楽教育における評価 - ナショナルカリキュラムを中心にして -」『東京学芸大学紀要 第 5 部門 芸術・健康・スポーツ科学』55 巻, 2003, pp.25-34
- (11) 塩原麻里「英国の音楽科教育におけるカリキュラムの変遷とその背景 - ナショナル・カリキュラム成立の過程とその導入 -」『東京学芸大学紀要 第 5 部門 芸術・健康・スポーツ科学』56 巻, 2004, pp.1-16
- (12) 高須一「英国の学校音楽教育における『作曲領域』の変遷 (1)」『音楽文化教育学研究紀要』2002, pp.79-94
- (13) 高須一「英国の学校音楽教育における『作曲領域』の変遷 (II)」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』2002, pp.501-507

2. イギリスのエリート教育に関する文献

- (1) 秋島百合子『パブリック・スクールからイギリスが見える』朝日新聞社, 1995
- (2) 伊藤元道『英国パブリック・スクール物語』丸善, 1993

- (3) 竹内洋「イギリス学外試験と大学入学者選抜－近年の変化と機会の不平等の視点から－」『京都大学教育学部紀要』1991, pp.62-79
- (4) 竹内洋『パブリック・スクール 英国式受験とエリート』講談社, 1993
- (6) 竹内洋「変貌するパブリック・スクール」『悠峰職業科学研究紀要』4 巻, 1996, pp.54-58
- (7) 竹内洋「イギリスの私立中学における親のか階層と文化的・社会的再生産」『大衆教育時代におけるエリート中等学校の学校文化と人間形成に関する比較研究』2002, pp.1-18
- (8) 橋本伸也, 藤井泰, 渡辺和行, 進藤修一, 安原義仁共著, 『近代ヨーロッパの探求④ エリート教育』ミネルヴァ書房, 2001
- (9) 藤井泰「近代イギリスのエリート教育に関する研究－19 世紀パブリック・スクールの生徒の社会的構成－」『松山大学論集』249 巻, 1999, pp.97-121
- (10) 藤井泰「19 世紀イギリスのパブリック・スクール出身者の進路」『松山大学論集』250 巻, 1999, pp.153-169
- (11) 宮島健次「イギリスにおけるパブリック・スクールの教育効果の一側面に関する研究－パフォーマンス・テーブルの分析を中心に－」『国立教育政策研究所紀要』第 131 集, 2001
- (12) 村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ書房, 1980
- (13) 望田研吾『現代イギリスの中等教育改革の研究』九州大学出版会, 1996
- (14) 渡辺誠一「イギリスにおけるエリート教育」『日本の科学者』340 号, 1996, pp.11-15
- (15) G. ウォルフフォード著, 竹内洋, 海部優子共訳『パブリック・スクールの社会学 英国エリート教育の内幕』世界思想社, 1996
Geoffrey Walford, *Life in Public Schools*, Methuen, 1986
- (16) W. D. ルービンステイン著, 藤井泰, 村田郁夫, 平田雅博, 千石好郎共訳『衰退しない大英帝国 その経済・文化・教育 1750－1990』晃洋書房, 1997
W. D. Rubinstein, *Capitalism, culture and decline in Britain 1750-1990*, Chapman & Hall Ltd., 1993
- (17) Bamford, T. W., *Rise of the public schools a study of boys' public boarding schools in England and Wales from 1837 to the present day*, London, 1967
- (18) Donald Leinster - Mackay, *The Rise of The English prep school*, The Falmer Press, 1984

3. イギリスの教育に関する文献

- (1) 池田潔『自由と規律 イギリスの学校生活』岩波書店, 1963
- (2) 池田良三『イギリスの教育』ぎょうせい, 1980, pp.13-14
- (3) 大田直子「国家の教育責任の新たな在り方－イギリス『品質保証国家』の教育政策」『教育学研究』第 71 巻-1 号, 2004

- (4) 小林章夫『教育とは－イギリスの学校から学ぶ』NTT 出版, 2005
- (5) 下條美智彦『ヨーロッパの教育現場から－イギリス・フランス・ドイツの義務教育事情』春風社
- (6) 田口仁久『イギリス学校教育史』学芸図書株式会社, 1975
- (7) 秦由美子『変わりゆくイギリスの大学』学文者, 2001
- (8) 藤田利光「英国ナショナル・カリキュラムと学習指導要領」『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』第 56 集, 和歌山大学教育学部, 2006, pp.59-69
- (9) 本間政雄, 文部省大臣官房調査統計課「イギリスにおける大学卒業者の進路状況」『厚生補導』136 号, 1977, pp.54-64
- (10) J.R.H.ムアマン著／八代崇, 中村茂, 佐藤哲典共訳『イギリス教会史』聖公会出版, 1991, pp.41-42
John Richard Humpidge Moorman, *A history of the church in England*, Morehouse Pub Co, 1986
- (11) Department for Education and Skills, *National Curriculum Assessments at Key Stage 2 in England*, 2006
- (12) Department for Education and Skills, *Education and Training Statistics for the United Kingdom*, 2006
- (13) Independent Schools Council, *2005-2006 Snapshot Independent Schooling in the United Kingdom*, 2006

4. セント・ポール大聖堂学校に関する文献

- (1) 『セント・ポール大聖堂 公式ガイドブック』Jarrold Publishing, 1999
St. Paul Cathedral, Jarrold Publishing, 1999
- (2) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register and War Roll*, W.STRAKER, LTD., 1920
- (3) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, 1924
- (4) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, 1928
- (5) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, 1932
- (6) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, WM. BRIDGE & Co., 1935
- (7) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, WM. BRIDGE & Co., 1937
- (8) St. Paul's Cathedral, *St. Paul's Cathedral Choir School*, 1937

- (9) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, NETHERTON & WORTH LTD., 1947
- (10) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, NETHERTON & WORTH LTD., 1952
- (11) St. Paul's Cathedral, *St. Paul's Cathedral Choir School*, 1952
- (12) St. Paul's Cathedral, *Choir School Register*, HEADS (Congleton) LTD., 1964
- (13) St. Paul's Cathedral, *St. Paul's Cathedral Choir School*, 1967
- (14) St. Paul's Cathedral, *St. Paul's Cathedral Choir School*, 1975
- (15) St. Paul's Cathedral, *St. Paul's Cathedral Choir School*, 1975
- (16) Guild of the Companions of St. Paul, *St. Paul's Cathedral Choir School Register*, Chase Web, 1991
- (17) St. Paul's Cathedral Choir School, St Paul's, 1999
- (18) St. Paul's Cathedral Choir School, *St Paul's Prosepectus Information Booklet*, 2005/2006

5. 聖歌隊に関する文献

- (1) ダンスマガジン編『少年合唱団 Boy's Choir 天使の歌声』新書館, 2004
- (2) 三ヶ尻正『ミサ曲・ラテン曲・教会音楽ハンドブッケーミサとは・歴史・発音・名選曲ー』ショパン, 2001
- (3) カーティス・プライス, 美山良夫 監訳『西洋の音楽と社会③ オペラの誕生と教会音楽 初期バロック』音楽之友社, 1996
Curtis Price, *Man & Music The Early Baroque Ear From the late 16 century to the 1660s*, The Macmillan Press Ltd., 1993
- (4) John Morehen, Cambridge Studies in Performance Practice English choral practice, 1400-1650, Lightning Source UK Ltd., 1995

6. 事典類

- (1) 中森義治「全人教育」『新教育学大事典』第4巻, 第一法規出版, 1990, pp.508-509
久世敏雄「人格形成」『新教育学大事典』第4巻, 第一法規出版, 1990, pp.237-238
- (2) 松村明監修「ジェントリー (gentry)」『大辞泉』小学館『大辞泉』編集部, 1995, p.1138
- (3) 中森義治「全人教育」『現代学校教育大事典』第4巻, 2002, pp.493-495
- (4) 塩原麻里「イギリス」『日本音楽教育事典』音楽之友社, 2004, pp.29-32
山下薫子「音楽教育思想」『日本音楽教育事典』音楽之友社, 2004, pp.133-138
- (5) 金澤正剛監修「アングリカン・チャント」『新編 音楽小辞典』音楽之友社, 2004, pp.14-15
「アンセム」『新編 音楽小辞典』音楽之友社, 2004, p.15

7. 主要参考ホームページ

- (1) ウィンチェスター・カレッジホームページ

<http://www.winchestercollege.co.uk/NetCommunity/Page.aspx?&pid=178&srcid=337>

- (2) 教育雇用訓練省ホームページ

<http://www.dfes.gov.uk/>

- (3) 校長会議ホームページ

<http://www.hmc.org.uk/schools/q-s.htm>

- (4) 私学学校会議ホームページ

<http://www.isc.co.uk/index.php/1>

- (5) セント・ポール大聖堂ホームページ

<http://www.stpauls.co.uk/page.aspx?theLang=001ngdef&pointerid=169345dwprEOVViTRLd8xXbHBDHGbzge>

- (6) 聖歌隊学校協会ホームページ

<http://www.choirschools.org.uk/index.htm>

- (7) 全国グラマー・スクール協会ホームページ

<http://www.ngsa.org.uk/index.htm>

おわりに

エリート養成学校における音楽教育は、全人教育の理想の中に位置づけられており、子どもたちの人格形成に欠かせない重要なものとされていることが、本研究の検討を通して明らかになった。

日本の公教育の学習指導要領においても、音楽教育は「豊かな情操を養う」ことを目標の中に掲げている。それは「教科の目標では美的情操を養うことを中心にはするものの、学校教育の最終的な目標が、知性と感性の調和のとれた豊かな人間の形成を目指すものであるところから、ここでは、豊かな情操を養うことを示しているのである。豊かな情操を養うことは…略…一人一人の豊かな心を育てるという重要な意味をもっているのである。」¹と解説されている。この目標が実現実行されているかはさておき、なぜ音楽教育は人格形成に影響を及ぼすものであると位置づけられているのであろうか。この問題は非常に根源的な課題であり、今後の研究に頼るところである。この問題の回答が、「論理的な」に検証されるならば、日本の音楽教育も変わるかもしれない。

しかしながら、音楽でもって子どもたちの心に変化をもたらしている実践例は数多くある。筆者は合唱研究のために各地に合唱指導の見学に赴いたが、その中でも「荒れていた子どもたちが、合唱を通して変わりました。」ということ述べられる先生が何人もおられた。暴力を振るっていた子どもたちが、あるいは偏差値が低い高校の生徒と言われて自尊心をなくし荒れていた生徒たちが、合唱を通して変わったということを報告してくださった。おそらくこのような事例は、他にも多くあるであろう。音楽には力がある。だからこそ、そのような価値を生かす教育活動をしていかなければならない。

全人という言葉をかかげて教育論を展開したペスタロッチは、音楽教育を教育の中に重要なものとして位置づけた。彼の思想を多くの思想家が受け継いでいる。全人教育というものは、知的偏重であってはならない。また、芸術偏重であってもならない。

イギリスのエリート養成学校における音楽教育の現状は、全人教育の理想を体現したものであるといえよう。教育事情が変わった今でも、教師たちは全人教育の意義と重要性を忘れていない。めまぐるしく変わる日本の教育事情ではあるが、教育とは如何なるものかということを改めて見つめなおすことができた。これを今後の教職に生かしていきたい。

注

¹ 文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽』教育芸術社，1999，p.12

謝辞

本研究において貴重な聞き取り調査にご協力いただきましたセント・ポール大聖堂学校校長アンドリュー・ドビン氏、また大変貴重な資料の数々を提供して下さいましたセント・ポール大聖堂図書館員ジョー・ウィズタム氏に心から御礼申し上げます。

さらに、合唱研究にあたり多くの助言、ご協力くださいました暁星学園の蓮沼勇一先生、進路調査においてご指導下さいました本学教育社会学研究室的村上登司文先生、また本学社会哲学研究室的平石隆敏先生はじめ快く資料をご提供くださいました方々に、心から御礼申し上げます。

資料

“Register” (1991) の「Old Boys」をデータ化したもの。

<留意点>

- ① 年代は卒業年に合わせている。
- ② 中等教育機関の種別を「A」「P」「I」は私立学校、「G」「S」は公立校、「M」は音楽学校、「E」は不明と分類している。この表記は、それぞれの学校紹介によるもので、「P」パブリック・スクール、「I」インデペンデント・スクール、「A」その他の私学をまとめて本稿では私立学校とした。「G」はグラマー・スクール、「S」はセカンダリー・スクールであり、これらを公立校とまとめている。
- ③ 高等教育機関の種別を、「C」はケンブリッジ大学、「O」はオックスフォード大学、「M」は音楽大学、「A」は他の高等教育機関と分類している。「C/O」はケンブリッジ大学、オックスフォード大学の両大学への進学を表す。
- ④ 高等教育機関は、「高等教育機関 1」「高等教育機関 2」に分けている。卒業生の中には、いくつかの高等教育機関に卒業した者がいるが、そのうち 2 つまでを記した。
- ⑤ 職業分類は、「音楽関係」「芸術」「メディア・舞台」「国教会・教会関係」「軍人」「金融」「医療」「教師」「科学・技術」「政治家・行政官」「ビジネス」「法律」「その他」「死亡」「不明・退職・学生」に分類した。
- ⑥ 職業は、「職業 1」「職業 2」に分けている。卒業生の中にはいくつかの職業に就いている者がいるが、そのうちの 2 つまでを記した。
- ⑦ 海外移住者は、卒業後海外へ移住して進学した者、あるいは海外で職業についた者を表す。
- ⑧ 職業の「D」は「死亡」、「E」は「不明・退職・学生」を表す。

資料

“Register” (1991) の「Old Boys」をデータ化したもの。

<留意点>

- ① 年代は卒業年に合わせている。
- ② 中等教育機関の種別を「A」「P」「I」は私学学校、「G」「S」は公立校、「M」は音楽学校、「E」は不明と分類している。
- ③ 高等教育機関の種別を、「C」はケンブリッジ大学、「O」はオックスフォード大学、「M」は音楽大学、「A」は他の高等教育機関と分類している。「C/O」はケンブリッジ大学、オックスフォード大学の両大学への進学を表す。
- ④ 高等教育機関は、「高等教育機関 1」「高等教育機関 2」に分けている。
- ⑤ 職業分類は、「音楽関係」「芸術」「メディア・舞台」「国教会・教会関係」「軍人」「金融」「医療」「教師」「科学・技術」「政治家・行政官」「ビジネス」「法律」「その他」「死亡」「不明・退職・学生」に分類した。
- ⑥ 職業は、「職業 1」「職業 2」に分けている。
- ⑦ 海外移住者は、卒業後海外へ移住して進学した者、あるいは海外で職業についた者を表す。
- ⑧ 職業の「D」は「死亡」、「E」は「不明・退職・学生」を表す。

番号	年代	入隊	卒業	中等教育機関	種別
1	1920	1923	1928	E	E
2	1910	1910	1915	Sedbergh School	P
3	1940	1938	1942	Clifton College	I
4	1940	1935	1941	Haileybury College	I
5	1960	1957	1961	Clifton College	I
6	1910	1909	1913	Mercers' School	P
7	1970	1975	1979	Epsom College	I
8	1960	1956	1960	Sevenoaks School	I
9	1950	1955	1959	Chigwell School	I
10	1980	1977	1982	Reading School	G
11	1930	1929	1935	University College School	I
12	1990	1986	1990	Malvern College	I
13	1920	1928	1924	Tollington School,Muswell Hill	P
14	1920	1920	1926	E	E
15	1930	1934	1939	St John's School,Leatherhead	I
16	1950	1948	1952	Lancing College	I
17	1970	1970	1975	Bishop's Stortford College	P
18	1950	1946	1951	Woodhouse Grammar School	G
19	E	E	E	E	E
20	1960	1963	1968	King's School,Canterbury	I
21	1970	1967	1971	Forest School	P
22	1980	1984	1989	Tonbridge School	I
23	1940	1943	1947	St John's School,Leatherhead	I
24	1930	1925	1931	Haileybury College	I
25	1930	1926	1932	Dulwich College	I
26	1940	1942	1948	Felsted School	P
27	1970	1969	1974	Clifton College	I
28	1950	1946	1951	Canford School	P
29	1980	1977	1982	Lancing College	I
30	1950	1951	1956	Beckenham Grammar School	G
31	1970	1969	1974	King's School,Canterbury	I
32	1910	1911	1917	St.Paul's School	I
33	1940	1941	E	E	E
34	1910	1914	1915	E	E
35	1920	1922	1928	Bedford Grammar School	G
36	1940	1934	1940	E	E
37	1940	1938	1944	Dulwich College	I
38	1940	1944	1949	Trent College	I
39	1940	1945	1949	St.Edward's School,Oxford	P
40	1970	1967	1971	Working Grammar School	G
41	1940	1940	1945	Destone College	P
42	1940	1943	1947	Destone College	P
43	1970	1968	1972	King's School,Worcester	P
44	1950	1947	1951	Mill Hill School	P
45	1970	1970	E	E	E
46	1920	1922	1927	E	E
47	1970	1970	1975	Tiffin School	G
48	1960	1958	1963	Bedford School	I
49	1960	1956	1960	Bishop Gore Grammar School,Swansea	S
50	1940	1935	1941	City of London School	I
51	1990	1988	1990	E	E
52	1940	1935	1941	E	E
53	1980	1977	1981	Bishop of Landaff Church in Wales High School	S

54	1930	1927	1932	Hurstpierpoint College	I
55	1980	1984	1988	Oakham School	P
56	1910	1912	1917	Union Castle Line	A
57	1910	1910	1911	St.Edward's School,Oxford	P
58	1930	1924	1930	E	E
59	1960	1961	1965	Wells Cathedral School	I
60	1990	1985	1990	Bishop's Stortford College	P
61	1920	1920	1924	Sutton Valence School	I
62	1980	1982	1983	Temple Grove School	I
63	1940	1944	E	E	E
64	1910	1913	E	E	E
65	1980	1975	1980	Haberdashers' Aske's School,Elstree	I
66	1980	1980	1985	Wellington College	I
67	1920	1919	1927	Wellington College	I
68	1980	1981	1983	Holmwood House School,Colchester	I
69	1970	1974	1978	St.Paul's School	I
70	1950	1948	1954	Lancing College	I
71	1940	1939	1944	King's College, Taunton	I
72	1950	1947	1952	Magdalen College School,Oxford	P
73	1960	1964	1969	Wellington College	I
74	1930	1932	1933	E	E
75	1980	1975	1980	Canford School	P
76	1970	1972	1977	Charterhouse	I
77	1980	1977	1982	Charterhouse	I
78	1970	1972	1977	Wellington High school	P
79	1950	1947	1952	E	E
80	1960	1965	1969	Wellington College	I
81	1980	1985	1989	Old Swinford Hospiial,Stourbridge	P
82	1970	1969	1974	King's School,Canterbury	I
83	1940	1945	1946	E	E
84	1980	1983	1987	Lancing College	I
85	1980	1985	1989	Lancing College	I
86	1950	1951	1956	St.Jhon's School,Leatherhead	I
87	1960	1964	1968	Lancing College	I
88	1980	1983	1988	Cheltenham College	I
89	1980	1981	1985	Sherborne School	I
90	1980	1982	1986	Sedbergh School	P
91	1970	1969	1973	Haileybury & Imperial Sevice College	P
92	1940	1941	1946	Eastbourne College	P
93	1930	1931	1935	E	E
94	1960	1964	1968	Highgate School	P
95	1980	1982	1987	Ardingly College	I
96	1970	1975	1979	Freudown Middle School	S
97	1940	1945	1946	E	E
98	1930	1931	1938	Eastbourne College	P
99	1970	1968	1972	Forest School	P
100	1970	1971	1975	Liverpool College	I
101	1970	1973	1978	Oakham School	P
102	1970	1965	1970	Monkton Combe School	I
103	1960	1958	1963	Monkton Combe School	I
104	1930	1925	1932	E	E
105	1960	1961	1964	Eltham College	I
106	1930	1932	1939	Trent College	I
107	1970	1965	1970	Ardingly College	I

108	1950	1949	1954	St.Jhon's School,Leatherhead	I
109	1950	1952	1957	Lancing College	I
110	1960	1961	1965	Trinity College,Glenalmond	I
111	1930	1925	1931	Sutton Valence School	I
112	1970	1965	1970	Cranleigh School.	P
113	1960	1963	1968	Cranleigh School	P
114	1910	1912	1917	Charterhouse	I
115	1950	1945	1950	Cranbrook School	P
116	1940	1941	1945	Culford School	I
117	1930	1925	1930	E	E
118	1970	1970	1974	Manshead School	P
119	1980	1980	1984	Trinity College,Croydon	I
120	1960	1956	1961	King's School,Canterbury	I
121	1950	1954	1958	King's School,Canterbury	I
122	1970	1968	1973	King Edward VI Grammar School,King's Lynn	G
123	1980	1987	1989	Wilson's Shool	G
124	1910	1908	1911	Brentwood Grammar School	G
125	1910	1917	1919	E	E
126	1970	1968	1972	City of London School	I
127	1920	1927	1928	E	E
128	1910	1909	1914	Hurstpierpoint College	I
129	1950	1951	1957	St.Jhon's School,Leatherhead	I
130	1950	1951	1956	Ardingly College	I
131	1960	1959	1964	Yehudi Menuhin School	M
132	1980	1982	1987	E	E
133	1930	1924	1930	St. Paul's School	I
134	1910	1908	1913	City of London School	I
135	1970	1973	1977	Brighton College	P
136	1910	1908	1913	St.Bee's School	I
137	1960	1963	1968	King's School,Canterbury	I
138	1960	1959	1963	Llandovery College	P
139	1920	1924	1929	King's College School,Wimbledon	I
140	1980	1982	1987	Bishop's Stortford College	P
141	1930	1928	1935	E	E
142	1960	1958	1963	Canford School	P
143	1960	1964	1968	Bedford Modern School	I
144	1960	1959	1963	King's School,Canterbury	I
145	1970	1969	1973	King's College Taunton	I
146	1970	1970	1975	Ranelagh Grammar School,Bracknell	G
147	1970	1968	1972	Ranelagh Grammar School,Bracknell	G
148	1940	1938	1943	Epsom College	I
149	1930	1931	1938	Ardingly College	I
150	1930	1926	1933	E	E
151	1930	1932	1938	Sedbergh School	P
152	1950	1953	1958	Hove County Grammar School	G
153	E	E	E	E	E
154	1980	1984	1988	Aldenham School	I
155	1970	1973	1978	Northgate Grammar School, Ipswich	G
156	1960	1960	1965	Bedford School	I
157	1970	1971	1974	Charterhouse	I
158	1930	1929	1936	University College School	I
159	1980	1975	1980	Tiffin School	G
160	1960	1957	1961	Ardingly College	I
161	1960	1962	1968	Repton School	I

162	1980	1986	1989	Bishop's Stortford College	P
163	1940	1939	1945	Trent College	I
164	1970	1971	1974	Woodberry Down Comprehensive School	S
165	1940	1939	1944	Dauntsey's School	P
166	1940	1937	1942	King's College, Taunton	I
167	1910	1910	1914	E	E
168	1940	1943	1949	Royal Grammar School, Guildford	I
169	1960	1960	1965	Ottershaw School	P
170	1950	1945	1951	Ottershaw School	P
171	1980	1980	1984	Stafford Independent School	I
172	1930	1934	1939	Wellington College	I
173	1940	1939	1943	Cifton College	I
174	1960	1962	1966	Pocklington School	P
175	1970	1975	1976	E	E
176	1940	1934	1940	King's College, Taunton	I
177	1960	1963	1967	Radley College	P
178	1950	E	E	E	E
179	1930	1930	1936	E	E
180	1930	1933	1939	E	E
181	1940	1936	1941	St.Jhon's School,Leatherhead	I
182	1940	1938	1944	St.Jhon's School,Leatherhead	I
183	1970	1968	1972	King's College School,Wimbledon	I
184	1970	1970	1975	King's College School,Wimbledon	I
185	1930	1927	1933	E	E
186	1980	1980	1981	Wells Cathedral School	I
187	1960	1964	1968	King's Edward's School, Witley	I
188	1980	1982	1986	Monmouth School	P
189	1940	1936	1940	E	E
190	1930	1930	1935	St.Paul's School	I
191	1950	1954	1958	City of London School	I
192	1950	1952	1957	Cifton College	I
193	1920	1923	1929	Haileybury College	I
194	1940	1940	1945	Haberdashers' Aske's School	I
195	1930	1924	1930	Sutton Valence School	I
196	1980	1977	1982	King's School, Canterbury	I
197	1970	1971	1976	King's School, Canterbury	I
198	1920	1923	1926	Dulwich College	I
199	1930	1931	1935	E	E
200	1920	1921	1926	Sutton Valence School	I
201	1940	1940	1945	St.Paul's School	I
202	1970	1969	1973	Winchester College	I
203	1940	1938	1942	St.Jhon's School,Leatherhead	I
204	1960	1957	1962	Slough Grammar School	G
205	1960	1961	1966	St.Paul's School	I
206	1960	1964	1969	St.Paul's School	I
207	1930	1926	1933	Haileybury College	I
208	1980	1978	1982	Seaford College	P
209	1920	1920	1926	King's School,Bruton	I
210	1980	1976	1980	Chigwell School	I
211	1980	1977	1982	Chigwell School	I
212	1950	1946	1950	King's College, Taunton	I
213	1950	1951	1956	Cranleigh School	P
214	1950	1952	1958	St.Jhon's School,Leatherhead	I
215	1980	1978	1983	Bishop's Stortford College	P

216	1980	1980	1982	Victoria College, Jersey	P
217	1950	1946	1951	Lancing College	I
218	1930	1933	1938	E	E
219	1910	1912	1918	Clifton College	I
220	1950	1954	1958	Royal Grammar School, High Wycombe	G
221	1970	1976	1979	Loughborough Grammar School	G
222	1890	1885	1890	Felsted School	P
223	1980	1983	1987	Gosfield School, Halstead	I
224	1950	1953	1957	King's College School, Wimbledon	I
225	1960	1959	1963	Magdalen College School, Oxford	P
226	1960	1957	1962	Wallington County Grammar School	G
227	1930	1933	1938	Mercers' School	P
228	1910	1907	1910	E	E
228	1920	1920	1926	E	E
230	1930	1924	1930	E	E
231	1910	1911	1919	Dulwich College	I
232	1950	1948	1953	Rendcomb College	I
233	1940	1942	1948	Trent College	I
234	1910	1914	1917	St. Edward's School, Oxford	P
235	1980	1981	1986	Gresham's School, Holt.	P
236	1980	1982	1987	Uppingham School	P
237	1920	E	E	E	E
238	1960	1962	1968	Haberdashers' Aske's School	I
239	1930	1933	1937	Wellington College	I
240	1930	1931	1936	University College School	I
241	1980	1984	1987	Lancing College	I
242	1980	1983	1987	Eton College	I
243	1960	1961	1965	Preston Manor Grammar School	G
244	1920	1920	1926	E	E
245	1930	1926	1932	E	E
246	1980	1980	1985	Radley College	P
247	1920	1927	1928	E	E
248	1950	1949	1954	St. Jhon's School, Leatherhead	I
249	1950	1949	1954	St. Jhon's School, Leatherhead	I
250	1980	1981	1986	Royal Grammar School, High Wycombe	G
251	1910	1908	1911	St. Bee's School	I
252	1970	1973	1978	Manchester Grammar School	I
253	1970	1974	1978	Aldenham School	I
254	1950	1954	1958	St. Jhon's School, Leatherhead	I
255	1960	1954	1960	Royal Grammar School, High Wycombe	G
256	1930	E	E	E	E
257	1980	1976	1981	Trinity School, Croydon	I
258	1980	1976	1982	Wellington College	I
259	1910	1910	1911	E	E
260	1920	1921	1928	E	E
261	1990	1986	1990	Bradford Grammar School	I
262	1980	1979	1984	Lancing College	I
263	1980	1977	1980	Bishop Luffa School, Chichester	S
264	1960	1962	1964	Judd School, Tonbridge	G
265	1950	1945	1950	Aldenham School	I
266	1930	1930	1931	Richmond Hill School	S
267	1930	1925	1930	E	E
268	1980	1979	1983	Wellington College	I
269	1980	1977	1981	Lancaster Royal Grammar School	G

270	1970	1974	1975	King's School, Worcester	P
271	1970	1971	1975	King's School, Worcester	P
272	1950	1955	1959	Leeds Grammar School	P
273	1960	1961	1966	Ardingly College	I
274	1940	1943	1948	Ardingly College	I
275	1970	1966	1970	Birkenhead School	I
276	1970	1968	1972	Birkenhead School	I
277	1930	1933	1939	E	E
278	1960	1964	1969	Repton School	I
279	1920	1918	1923	Ley's School, Cambridge	I
280	1970	1971	1975	Sir Roger Manwood's School, Sandwich	P
281	1970	1966	1971	Sir Roger Manwood's School, Sandwich	P
282	1930	1926	1932	Tower House College, Slough	A
283	1920	1918	1923	Sutton Valence School	I
284	1950	1948	1953	Monmouth School	P
285	1950	1945	1951	Destone College	P
286	1980	1986	1988	Purcell School	M
287	1970	1967	1971	E	E
288	1950	1949	1955	Clifton College	I
289	1970	1967	1971	Queen Elizabeth's Hospital, Bristol	I
290	1970	1970	1975	Henbury School, Bristol	S
291	1940	1936	1941	St.Jhon's School, Leatherhead	I
292	1950	1947	1952	Highgate School	P
293	1940	1944	1949	E	E
294	1990	1985	1990	Coopers' Coburn School	A
295	1980	1982	1987	Coopers' Coburn School	A
296	1950	1948	1954	Sedbergh School	P
297	1950	1954	1959	King's School, Canterbury	I
298	1970	1972	1977	Dulwich College	I
299	1980	1979	1984	St.Olave's School, Oripington	S
300	1970	1966	1970	Trinity College, Glenalmond	I
301	1960	1957	1962	Trinity College, Glenalmond	I
302	1960	1959	1964	Trinity College, Glenalmond	I
303	1920	E	E	E	E
304	1920	1918	1924	Dulwich College	I
305	1930	1933	1939	Haileybury College	I
306	1930	1928	1934	Haileybury College	I
307	1930	1926	1933	E	E
308	1970	1972	1977	King's School, Ely	I
309	1950	1947	1951	Destone College	P
310	1930	1925	1930	Hurstpierpoint College	I
311	1960	1962	1966	George Abbot's School	S
312	1930	1929	1934	E	E
313	1900	1904	1908	Ardingly School	I
314	1990	1986	1990	King's School, Ely	I
315	1930	1932	1938	St.Paul's School	I
316	1980	1984	1985	Orleans Park School, Twickenham	S
317	1960	1963	1967	Epsom College	I
318	1950	1947	1952	Tonbridge School	I
319	1960	1961	1966	King's School, Canterbury	I
320	1980	1976	1981	Christ's Hospiral	I
321	1970	1968	1972	King's School, Canterbury	I
322	1980	1981	1985	Reed's School, Cobham	P

323	1970	1975	1971	Tiffin School	G
324	1900	1906	E	Exeter Cathedral Choir School	P
325	1940	1934	1940	E	E
326	1910	1913	1918	St.Paul's School	I
327	1960	1954	1969	Hurstpierpoint College	I
328	1980	1984	1988	Trinity School, Croydon	I
329	1940	1934	1940	Ardingly School	I
330	1940	1938	1943	Destone College	P
331	1980	1980	1984	St.Peter's School, York	P
332	1950	1954	1959	St.Jhon's School,Leatherhead	I
333	1960	1958	1962	St.Jhon's School,Leatherhead	I
334	1970	1966	1970	E	E
335	1960	1957	1962	Destone College	P
336	1920	1920	1927	Whitgift School	I
337	1980	1921	1928	E	E
338	1920	1925	1926	Newcastle-upon-Tyne Grammar School	I
339	1920	1916	1921	Clark's College	A
340	1960	1959	1963	Brighton, Hove & Sussex Grammar School	A
341	1960	1955	1960	King's School, Canterbury	I
342	1950	1951	1957	King's School, Canterbury	I
343	1960	1956	1961	Lower School of John Lyon, Harrow	A
344	1980	1973	1983	Pimlico School	S
345	1980	1983	1987	City of London School	I
346	1920	1921	1927	E	E
347	1980	1981	1985	King's School, Macclesfield	P
348	1970	1967	1971	Surbiton Grammar School	G
349	1960	1956	1961	Felsted School	P
350	1950	1951	1952	E	E
351	1920	1915	1921	Cadet, H.M.S(士官候補生)	A
352	1960	1965	1969	King's School, Canterbury	I
353	1970	1971	1976	St.Jhon's School,Leatherhead	I
354	1980	1979	1984	Trent College	I
355	1940	1939	1943	E	E
356	1900	1903	1908	Mercers' School	P
357	1960	1963	1938	Colfe's School	P
358	1920	1920	1926	E	E
359	1960	1958	1963	Ardingly School	I
360	1930	1934	1939	Ardingly School	I
361	1910	1913	1918	St. Paul's School	I
362	1950	1954	1959	Ardingly School	I
363	1980	1984	1989	Eton College	I
364	1980	1976	1980	Wymondham College	P
365	1940	E	E	E	E
366	1950	1952	1957	Bradfield College	P
367	1960	1956	1962	Bradfield College	P
368	1910	1913	1917	Eastbourne College	P
369	1970	1970	1975	King's School, Canterbury	I
370	1930	1930	1935	St.Paul's School	I
371	1920	1921	1927	E	E
372	1940	1942	1948	City of London School	I
373	1900	1904	1905	St.Edward's School,Oxford	P
374	1920	1922	1928	King's College School,Wimbledon	I
375	1940	1942	1947	Cranbrook School	P
376	1940	1939	1944	E	E

377	1960	1956	1961	Lancing College	I
378	1900	1903	1908	Highgate School?	P
379	1910	1908	1913	Commercial School	A
380	1930	1929	1934	University College School	I
381	1930	1928	1934	University College School	I
382	1910	1914	1919	Nautical College, Pangbourne	P
383	1920	1922	1929	Haileybury College	I
384	1950	1947	1952	Haileybury & Imperial Sevice College	P
385	1920	1915	1922	Haileybury College	I
386	1930	1932	1939	Cranbrook School, Kent	P
387	1920	1917	1924	Haileybury College	I
388	1950	1950	1956	Cranbrook School	P
389	1940	1941	1946	Hurstpierpoint College	I
390	1980	1976	1980	Stockport Grammar School	I
391	1920	1918	1925	St.Paul's School	I
392	1970	1966	1970	Haberdashers' Aske's School	I
393	1940	1942	1947	Clifton College	I
394	1950	1953	1958	King's School, Canterbury	I
395	1960	1958	1963	Lancing College	I
396	1980	1984	1989	Marlborough College	P
397	1980	1978	1983	Marlborough College	P
398	1930	1933	1939	Churcher's College	P
399	1930	1931	1937	Churcher's College	P
400	1950	1950	1955	Lancing College	I
401	1980	1985	1989	Lancing College	I
402	1950	1950	1955	King's School, Canterbury	I
403	1950	1948	1953	School at Canada	A
404	1930	1926	1932	Haileybury College	I
405	1920	1916	1921	Whitgift School	I
406	1980	1987	1988	E	E
407	1930	1931	1936	Pitman's College	A
408	1940	1939	1945	Lancing College	I
409	1930	1927	1933	E	E
410	1930	1927	1933	Kingston Grammar School	I
411	1920	1924	1925	E	E
412	1940	1938	1943	King's College, Taunton	I
413	1960	1965	1969	E	E
414	1940	E	E	E	E
415	1930	1933	1939	Trent College	I
416	1960	1958	1963	Haberdashers' Aske's School	I
417	1950	1955	1959	St.Edmund's School, Canterbury	P
418	1980	1978	1983	Bryanston School	P
419	1950	1954	1958	Felsted School	P
420	1980	1978	1982	Cheltenham College	I
421	1930	1928	1933	Sedbergh School	P
422	1950	1949	1955	King's School, Canterbury	I
423	1950	1947	1951	King's School, Canterbury	I
424	1970	1975	1979	King's School, Canterbury	I
425	1930	1928	1935	Magdalen College School, Oxford	P
426	1980	1976	1980	Merchant Taylors' School	P
427	1970	1967	1972	City of London School	I
428	1970	1968	1971	Stowe School	P
429	1930	1932	1938	Eastbourne College	P
430	1970	1971	1975	Bedford Modern School	I

431	1960	1963	1967	King's School, Canterbury	I
432	1970	1972	1976	Christ's Hospiral	I
433	1960	1964	1969	King's School, Canterbury	I
434	1950	1946	1951	Trent College	I
435	1970	1969	1974	Highgate School	P
436	1970	1971	1976	Winchester College	I
437	1920	1919	1925	Woodbridge School	P
438	1950	1950	1954	Portora Royal School, Enniskillen	I
439	1940	E	E	E	E
440	1960	1962	1965	Ottershaw School, Chertsey	P
441	1980	1982	1985	Solefields Preparatory School, Sevenoaks	P
442	1940	1935	1941	King's College, Taunton	I
443	1970	1969	1973	Churcher's College	P
444	1960	1957	1962	King's School, Canterbury	I
445	1960	1962	1967	King's School, Canterbury	I
446	1980	1980	1984	Felsted School	P
447	1970	1967	1971	King's School, Canterbury	I
448	1910	1909	1914	Brekhamsted School	P
449	1940	1935	1940	Ardingly School	I
450	1960	1965	1969	Christ's Hospiral	I
451	1960	1957	1962	King's School, Canterbury	I
452	1950	1951	1956	Ardingly School	I
453	1920	1923	1929	St.Paul's School	I
454	1950	1951	1956	St.Paul's School	I
455	1950	1953	1958	Ardingly School	I
456	1940	1937	1943	Dauntsey's School	P
457	1920	1923	1928	E	E
458	1980	1983	1987	Ipswich School	P
459	1980	1981	1986	Queen Elizabeth's Hospital, Bristol	I
460	1980	1984	1987	Queen Elizabeth's Hospital, Bristol	I
461	1950	1946	1950	Sandon House School, Chelmsford	S
462	1940	1936	1940	E	E
463	1920	1921	1927	E	E
464	1980	1981	1986	E	E
465	1940	1936	1940	Christ's College, Brecon	I
466	1930	1931	1937	E	E
467	1960	1963	1967	King's School, Canterbury	I
468	1920	1913	1920	Repton School	I
469	1980	1975	1980	Epsom College	I
470	1960	1964	1968	Aylesbury Grammar School	G
471	1920	1921	1928	St.Paul's School	I
472	E	E	E	E	E
473	1970	1970	1975	Bloxham School	I
474	1980	1984	1986	E	E
475	1950	1953	1958	King's School, Canterbury	I
476	1910	1913	1919	St.Paul's School	I
477	1920	1923	1928	E	E
478	1980	1983	1985	Bedford School	I
479	1930	1929	1936	E	E
480	1930	1927	1933	St.Jhon's School, Leatherhead	I
481	1980	1980	1984	Dulwich College	I
482	1950	1945	1950	E	E
483	1950	1947	1950	City of London School	I
484	1950	1945	1950	E	E

485	1940	1937	1942	Beckenham Technical School	A
486	1930	1928	1934	Cannings Commercial College, Bath	A
487	1920	1924	1929	E	E
488	1930	1928	1933	E	E
489	1910	1913	1919	Archbishop Holgate's School, York	A
490	1960	1960	1964	Marlborough College	P
491	1980	1978	1983	Radley College	P
492	1960	1962	1967	Marlborough College	P
493	1980	1977	1981	Bishop's Stortford College	P
494	1960	1958	1962	Emanuel School, Wandsworth	I
495	1910	1914	1919	Framlingham College	I
496	1960	1963	1967	Weymouth Grammar School	G
497	1950	1952	1957	King's School, Canterbury	I
498	1980	1983	1987	Eton College	I
499	1920	1919	1921	E	E
500	1960	1962	1967	St.John's School, Leatherhead	I
501	1960	1957	1962	Ardingly School	I
502	1960	1960	1964	Ardingly School	I
503	1950	1950	1955	King's School, Canterbury	I
504	1970	1974	1978	Sydney Church of England Grammar School	A
505	1940	1939	1945	Chifton College	I
506	1910	1904	1910	St.Edward's School,Oxford	P
507	1960	1959	1962	The Roan School, Blackheath	A
508	1930	1926	1931	Woodbridge School	P
509	1970	1972	1975	Bedford School	I
510	1970	1970	1975	Bedford School	I
511	1950	1949	1954	Woodbridge School	P
512	1980	1976	1981	Cranleigh School	P
513	1980	1975	1980	Cranleigh School	P
514	1980	1981	1984	Cranleigh School	P
515	1960	1959	1963	Hinchley Wood Country Secondary School	S
516	1970	1973	1978	Royal Grammar School, High Wycombe	G
517	1980	1977	1982	Royal Grammar School, High Wycombe	G
518	1950	1947	1951	Harrow School	I
519	1950	1948	1954	Rossall School	P
520	1920	1921	1927	St.Edward's School,Oxford	P
521	1930	1927	1933	Haileybury College	I
522	1960	1954	1960	St.marylebone Grammar School	G
523	1940	1943	1948	Clifton College	I
524	1940	1943	1944	E	E
525	1970	1972	1977	Tiffin School	G
526	1950	1954	1959	Radley College	P
527	1970	1968	1973	St.Paul's School	I
528	1940	1938	1943	The Sir John Lyon School, Harrow	P
529	1940	1941	1944	E	E
530	1910	1910	1914	King's School, Worcester	P
531	1940	1936	1941	Epsom College	I
532	1940	1937	1942	Northgate Grammar School	G
533	1930	1932	1937	Westminster School	P
534	1980	1981	1986	Ardingly School	I
535	1980	1976	1981	Watford Grammar School	S
536	1970	1973	1977	E	E
537	1940	1947	1948	City of London School	I
538	1940	1942	1947	Bloxham School	I

539	1950	1944	1950	City of London School	I
540	1970	1974	1978	Beaconsfield Secondary School	S
541	1960	1965	1969	St.Edward's School,Oxford	P
542	1970	1973	1976	Beaconsfield Secondary School	S
543	1920	1919	1921	E	E
544	1960	1960	1964	King's College, Taunton	I
545	1950	1953	1959	St. John's School,Leatherhesd	I
456	1960	1963	1968	Dean Close School, Cheltenham	P
547	1930	1928	1933	Dover College	P
548	1950	1952	1956	Lancing College	I
549	1980	1977	1981	Queen Elizabeth High School, Hexham	G
550	1970	1972	1977	City of London School	I
551	E	E	E	E	E
552	1980	1985	1987	E	E
553	1970	1966	1970	Pocklington School	P
554	1930	1927	1934	University College School	I
555	1940	1944	1949	Cranbrook School	P
556	1950	1947	1953	Woodbridge School	P

番号 高等教育機関 1	高等教育機関 2	種別
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8 Guildhall School of Music	St.Luke's College, Exeter	A
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16		
17 Leeds University		A
18 Hendon Technical College		A
19		
20 Exter College, Oxford	Exter College, Oxford	O
21 Magdalen College, Oxford		O
22		
23		
24		
25		
26 Gonville&Caius, Cambridge		C
27 Gonville&Caius, Cambridge	Guildhall School of Music&Drama	C
28 King's College, Cambridge		C
29 York University		A
30		
31 Royal Academy of Music		M
32		
33		
34		
35		
36		
37		
38		
39		
40 Surrey University	Newcastle Univesity	A
41 University of Leeds		A
42		
43 Clare College, Cambridge		C
44		
45		
46		
47 King's College, Cambridge	Royal College of Music	M
48 Corpus Christi College, Cambridge		C
49		
50		
51		
52		
53 Queen Mary College	London University	A

54		
55		
56	Guildhall School of Music	M
57	Keble College, Oxford	O
58		
59	Royal Academy of Music	M
60		
61	L..C.C	General School of Arts & Crafts
62		A
63		
64		
65	New College, Oxford	O
66		
67		
68		
69	Trinity College, Cambridge	C
70		
71		
72		
73	Keble College, Oxford	Goldsmiths' College, London
74		O
75	Guildhall School of Music	M
76	Royal College of Music	M
77	Bournemouth Art College	A
78		
79		
80	St. John's College, Oxford	O
81		
82		
83		
84		
85		
86		
87	Bede College, Durham	Selwyn College, Cambridge
88		C
89		
90		
91	Charing Cross Hospital Medical School	A
92		
93		
94	Magdalen College, Oxford	O
95		
96	Budehaven School, Bude	Exeter University
97		A
98		
99		
100	Nottingham University	A
101	Middlesex Polytechnic	Bath College of H.E
102	Bishop Otter College, Chichester	A
103	King's College, Cambridge	C
104		
105		
106	Royal Academy of Music	M
107	Southampton University	A

108		
109		
110	Royal Scottish Academy of Music	Royal College of Music
111		M
112	Durham University	
113	Christ Church, Oxford	O
114	Balliol College, Oxford	O
115	Exster College, Oxford	O
116		
117		
118		
119	Trinity College, Cambridge	C
120	King's College, Cambridge	C
121	Queen's College, Oxford	O
122	Leicester University	A
123		
124		
125		
126		
127		
128		
129		
130	London University	Nottingham University. Lincoln Theological
131		CA
132	Chichester College	A
133		
134		
135	Hove & Sussex College	A
136	St. Thomas's Hospital	A
137		
138	St. John's College, Cambridge	C
139	King's College of London	A
140		
141		
142	Royal College of Music	M
143		
144	Magdalen College, Oxford	O
145	Southampton University	A
146	South Bank Polytechnic, London	A
147	Guildhall School of Music	M
148		
149		
150		
151		
152		
153		
154		
155	Manchester University	Royal Northern College of Music
156	Bangor University	A
157		
158	Selwyn College, Cambridge	C
159		
160	Sussex University	Birkbeck College, University of London
161		A

162		
163	Durham University	A
164		
165		
166		
167		
168		
169		
170		
171		
172		
173	Fellow College, Cambridge	C
174	Leeds University	Ripon College of Education A
175		
176		
177		
178		
179		
180		
181		
182	King's College, Cambridge	Trinity Hall, Cambridge C
183	Jesus College, Cambridge	C
184		
185		
186		
187	Birmingham University	Aston University A
188		
189		
190		
191		
192	Magdalen College, Oxford	O
193	St. Catherine's College, Cambridge	Lincoln Theological College C
194		
195	Royal College of Music	M
196	Trinity College, Cambridge	C
197	King's College, Cambridge	C
198	Selwyn College, Cambridge	C
199		
200		
201		
202	University of York	University of Illinois at Champaign-Urbana A
203		
204	University of Wales	A
205	Bangor University	A
206	Aberdeen University	A
207	Christ's College, Cambridge	C
208		
209	Worcester College, Oxford	Wycliffe Hall, Oxford O
210	King's College, Cambridge	C
211		
212		
213	Exeter College, Oxford	O
214		
215		

216	Lancing College		
217			
218			
219			
220			
221	Christ Church, Oxford		O
222			
223			
224	King's College, Cambridge	New College, Oxford	C/O
225	Oriel College, Oxford		O
226			
227			
228			
228			
230			
231	Guildhall School of Music	Royal Academy of Music	M
232	College of Estate Management		A
233	King's College, Cambridge		C
234	Westcott House, Cambridge		C
235			
236			
237			
238	St. Catherine's College, Cambridge		C
239	Worcester College, Oxford		O
240			
241			
242			
243	Hull University	Newton Park College, Bath	A
244			
245			
246	Worcester College, Oxford		O
247			
248	Christ's College, Cambridge		C
249	Christ's College, Cambridge		C
250			
251			
252	Leeds University	Central London Polytechnic	A
253			
254	Royal Veterinary College, London		A
255	Cambridge	Liverpool	C
256			
257	Leeds Polytechnic, bursary student of the Royal Regiment of Fusiliers		
258	St. Albans School	Durham University	A
259			
260			
261			
262			
263			
264			
265			
266			
267			
268	St. John's College, Cambridge		C
269	University College of North Wales.		

270		
271	New College, Oxford	O
272		
273	Royal College of Music	King's College, Cambridge C
274	Training College, Bognor Regis	Guildhall School of Music M
275	Christ Church, Oxford	O
276	King's School, Canterbury	Magdalen College, Oxford O
277		
278	Imperial College	A
279	Christ College, Cambridge	O
280	Nottingham University	Sandhurst A
281	Gonville&Caius, Cambridge	City University Business School C
282		
283		
284		
285	Clare College, Cambridge	Cuddesdon College C
286		
287		
288		
289	King's College, London	A
290		
291	Seale-Hayne Agricultural College	City of Worcester Training College A
292		
293		
294		
295		
296	Edinburgh University	A
297		
298	York University	Guildhall School of Music and Drama M
299	Aston University	
300	Heriot-Watt University, Edinburgh	A
301	Nottingham University	Sandhurst A
302	Welbeck College	Sandhurst A
303		
304		
305	Queen's College, Cambridge	C
306	Peterhouse, Cambridge	C
307		
308	Royal Free Hospital	
309	Liverpool University	A
310	Royal Academy of Music	M
311		
312		
313		
314		
315		
316		
317	Merton College, Oxford	Bristol Royal Infirmary O
318		
319	Christ Church, Oxford	O
320		
321	Corpus Christi College, Oxford	O
322		

323	Magdalen College, Oxford		O
324			
325			
326			
327			
328			
329			
330			
331			
332	University of Toronto		A
333			
334			
335	Nottingham University		A
336	Guildhall School of Music	King's College, London	M
337			
338	King's College Newcastle-upon-Tyne		A
339	Royal College of Music		M
340			
341	Wycliffe Hall, Oxford		O
342			
343			
344			
345			
346			
347			
348			
349			
350			
351			
352	Corpus Christi College, Cambridge		C
353	King's College, London		A
354			
355			
356			
357			
358			
359	Worcester College, Oxford		O
360			
361			
362	Borough Road College of Education	Open University	A
363			
364	Birmingham Polytechnic Journalist		A
365			
366	King's College, London	Polytechnic of the South Bank	A
367	Bristol University		A
368			
369	Nonington College		A
370			
371			
372			
373			
374			
375			
376			

377 St.John's College, Cambridge		C
378		
379		
380		
381		
382		
383 Christ's College, Cambridge	Ridley Hall, Cambridge	C
384		
385		
386 Derbyshire College of Agriculture		
387 Royal Academy of Music		M
388 Gonville&Caius, Cambridge	Leeds University	C
389 Queen Mary College, London		A
390 Royal Northern College of Music		M
391		
392 Jesus College, Cambridge		C
393		
394 Auckland University		A
395 Sussex University		A
396		
397		
398		
399		
400 Magdalen College, Oxford		O
401		
402		
403		
404 St.John's College, Cambridge		C
405		
406		
407		
408		
409		
410 Royal Academy of Music		M
411		
412 University of London		A
413		
414		
415 Royal College of Music		M
416 Merchant Navy		A
417 Christ Church, Oxford		O
418		
419 Imperial College		A
420 Bristol University		A
421 St.John's College, Cambridge		C
422		
423		
424 Durham University		
425		
426 Magdalene College, Cambridge		C
427 King's Collge, London	Guildford College of Law	A
428 Nottingham University		A
429		
430 Gonville&Caius College, Cambridge		C

431	Guildhall School of Music		M
432	GOnville&Caius College, Cambridge		C
433	Royal Academy of Music	Royal Northern College of Music	M
434	King's College, London	Westminster Hospital Medical School	A
435			
436	Imperial College, London		
437			
438			
439			
440	Leicester Polytechnic		A
441			
442			
443	York University		A
444	Royal Academy of Music		M
445	Royal Academy of Music		M
446			
447	Bristol University		A
448			
449			
450	Royal College of Music		M
451	McGill University, Montreal	Exeter University	A
452			
453			
454			
455	Liverpool University		A
456			
457			
458			
459			
460			
461			
462			
463			
464			
465			
466			
467	St. Edmund Hall, Oxford	Ripon College of Education	O
468			
469	St. Catherine's College, Cambridge		C
470	Manchester University		A
471			
472			
473	Goldsmiths' College		A
474			
475	St. John's College, Cambridge		C
476			
477			
478			
479			
480			
481	Trinity College, Cambridge		C
482			
483			
484			

485		
486		
487		
488		
489		
490 Brunel University		A
491 Royal Academy of Music		M
492 Selwyn College, Cambridge	Cuddesdon College, Oxford	C/O
493 Cambridge College of Arts & Technology		A
494		
495		
496 Scarborough High School	Pembroke College, Cambridge	C
497 King's College, Cambridge		C
498		
499		
500 Durham University	Royal College, Dartmouth	A
501 Wolverhampton Polytechnic	Seale-Hayne College, Devon	A
502 Jesus College, Cambridge		C
503		
504		
505 St. Catharine's College, Cambridge		C
506 Sidney Sussex College, Cambridge		C
507		
508 St. John's College, Oxford		O
509		
510		
511		
512 Manchester University		A
513 Christ Church, Oxford		O
514		
515		
516 King's College, Cambridge		C
517 King's College, Cambridge		C
518 Fitzwilliam College, Cambridge		C
519 Worcester College, Oxford		O
520 King's College, London		A
521 Royal College of Music		M
522 King's College, London		A
523 Clare College, Cambridge		C
524		
525 Queen's College, Cambridge		C
526 Queen's College, Cambridge		C
527 University College Hospital		A
528		
529		
530		
531		
532		
533		
534		
535 Harrow College of Further Education		A
536		
537		
538 Liverpool College of Technology		A

539		
540	Castle Comprehensive School, Thornbury	South Glamorgan Institute
541	New College, Oxford	Guildhall School of Music and Drama
542	Castle Comprehensive School, Thornbury	O
543		
544	Clare College, Cambridge	Sussex University
545	Clare College, Cambridge	Ridley Hall, Cambridge
456	Brimingham School of Music	C
547		C
548	St. John's College, Cambridge	M
549		
550	Cambridge	University of Louvain
551		C
552		
553	Nottingham University(law)	Guildhall School of Music and Drama
554		C
555		
556	University College of North Staffordshire	A

番号 職業 1

- 1 E
- 2 D
- 3 Lecturer
- 4 Operatic Conductor.Director
- 5 Managing Director CPM Sales Promotion
- 6 Music Critic
- 7 Stockbroker
- 8 Woodwind Teacher and orchestral coach
- 9 E
- 10 E
- 11 Company Director
- 12 E
- 13 Chaplain,Schoreham School
- 14 E
- 15 Social work with Kent County Council
- 16 Managing Director Gold Build
- 17 Electronics Engineer
- 18 Freelance Technical Illustrator
- 19 E
- 20 Solicitor
- 21 Schoolmaster,Cheney Upper School,Oxford
- 22 E
- 23 Producer,Television
- 24 Ltd.
- 25 H.M.S
- 26 Director General,Army Medical Services
- 27 Actor
- 28 E
- 29 E
- 30 Electronics Engineer
- 31 Musician
- 32 Bank of England
- 33 E
- 34 E
- 35 E
- 36 D
- 37 Diagnostic Radiologist
- 38 E
- 39 Financial Adviser
- 40 School Head of Music
- 41 Examining Medical Officer
- 42 teacher in music
- 43 Medical Practice Manager
- 44 Stockbroker
- 45 Vicar
- 46 D
- 47 E
- 48 Organist,Church of Holy Spirit
- 49 Chartered Accountant
- 50 Commissioners of Inland Revenue
- 51 E
- 52 D
- 53 E

54 In Town Planning
55 E
56 Composer
57
58 D
59 Clarinettist and Musical director
60 E
61 Interior desiner
62 E
63 E
64 E
65 E
66 E
67 Investment Manager
68 E
69 Freelance orchestral violinist
70 Schoolmaster
71 E
72 Jeweeleer
73 E
74 E
75 E
76 Principal Clarinet
77 E
78 E
79 D
80 Assistant Musical Director,Ballet Rambert
81 E
82 Air Traffic Controller Sydney Airport
83 E
84 E
85 E
86 Chartered Accountant
87 Computer Systems Analyst,PCL Computer Services Ltd.
88 E
89 E
90 E
91 E
92 Consultant Anaesthetist
93 D
94 Countrywide Museum Curator
95 E
96 Oxford Polytechnic
97 D
98 Bank of England
99 Director of Music St.Catherine's Leytonstone
100 E
101 Hotel and Catering Administration
102 Second Master & Director of Music,Bembridge School
103 Assistant Director of Music,Tiffin School
104 D
105 Composer,arranger,session pianist and keyboardist
106 Schoolmaster,Organist and Music Critic
107 The Sorbonne,Paris.Opera conductor

108 Insurance Executive
109 E
110 Supervisor, Scottish Express
111 Retired
112 B.B.C producer & disc jockey
113 Solicitor & Company Secretary
114 Chemical Engineer
115 Actor and Theatre Director. Prindpal. London Academy of Music &
116 Formerly Secretary to Benjamin Britten and Peter Pears.
117 D
118 E
119 E
120 E
121 Director of Music, St. Olave's School, Orpington
122 Psychotherapist
123 E
124 E
125 E
126 E
127 British Commonwealth Society, latterly in Brazil (retired)
128 E
129 Schoolmaster
130 Vicar, St. Mary's, Theydon Bois
131 Cellist in a Californian Orchestra
132 E
133 In insurance
134 Actor
135 Marchant Banker, New York, U.S.A
136 Medical Practitioner
137 Selling electronic musical instruments
138 E
139 Farmer. Retired
140 E
141 Comedian
142 Musician (violinist)
143 Organist & choirmaster
144 Associate Professor of Music at Indiana University
145 Royal Engineers
146 Chartered Surveyor
147 Co-principal Oboist, Oslo Philharmonic
148 Accountant, Bank of England
149 Consultant Quantity Surveyor
150 D
151 Marine insurance underwriter
152 E
153 E
154 E
155 Composer, Conductor, Accompanist.
156 E
157 International Banking
158 Contracts Executive, Electronics Industry
159 E
160 History Teacher, Woking College
161 E

162 E
163 Housemaster and Head of Biology Dept.
164 Usher, National Theatre
165 E
166 Regular Army
167 Company Director
168 Current Affairs Producer, Australian Radio
169 Financial Journalist
170 British Council School Inspector
171 Church organist
172 Regular Army
173 Cueator, Museum of Archaeology & Ethnology, Cambridge
174 Director of Music, York House School
175 E
176 Writer and editorial consultant
177 Actor
178 E
179 D
180 D
181 Technical representative for a paint company
182 Professor of Spanish
183 Tax Dept., Price Waterhouse
184 Peripatetic Violin Teacher, Bexley
185 D
186 E
187 Inspector of Factories
188 E
189 E
190 E
191 City Police
192
193 Rector of Stratford St.Mary and Higham St.Mary
194 E
195 Conductor
196 E
197 Barrister: General Common Law, Planning and Envirnmental Law
198 Rector of Stratford St.Mary and Higham St.Mary
199 D
200 Colonial Police Officer & Foreign Office Official
201 Architect
202 Compliance Officer, Henderson Administrarion(Fund Management
203 Agent
204 Merchant
205 Librarian, Cannon Street Library
206 Accountant
207 St.Bartholomew's Hospital. Madical Practitioner
208 E
209 Formerly Vicar of Holy Triniry, Rudgwick, Sussex
210 E
211 E
212 Paper maker
213 Assistant Sub-organist, St.Paul Cathdral
214 Systems Analyst, Canadian Pacific
215 E

216 E
217 E
218 D
219 Electrical Engineer
220 Technical Manager, Racal Data Networks
221 E
222 E
223 E
224 Composer. University teacher
225 Management Consultant
226 E
227 E
228 E
228 D
230 Historian
231 Professor R.A.M.
232 Chartered Surveyor
233 Hochschule für Musik, Stuttgart Singer, Concert and Opera
234 Rector of St. Mark's Cape Town.
235 Organist, Upper Sheringham Church
236 E
237 E
238 Viola Player, Lindsay String Quartet
239 teacher and chamber music coach at the Guildhall School of Music
240 Personnel Manager
241 E
242 E
243 Musician-freelance singer and choral director
244 D
245 D
246 E
247 E
248 Cardiac Dept. St. Thomas's Hospital
249 E
250 E
251 Singer, under the name of Edward Merryne
252 Law (barrister?)
253 E
254 Director of Zoos, Zoological Society of London
255 Solicitor
256 E
257 E
258 E
259 E
260 D
261 E
262 E
263 Organ Scholar, Wells Cathedral
264 E
265 Teacher of Maladjusted Children
266 Textile representative
267 D
268 E
269 Studying law at Lancashire Polytechnic

270 Chorister, Worcester Cathedral
 271 music staff, English National Opera
 272 Managing Director Actionplan Ltd.
 273 Master of the Choristers and Organist, Durham Cathedral
 274 E
 275 Investment Banking
 276 Sub-Organist, Christ Church Cathedral, Oxford
 277 Evacuated to U.S.A
 278 E
 279 E
 280 Regular Army
 281 Director, Country Nat West Investment Mgt.Ltd.
 282 Banking
 283 With Fenning & Co., Ltd.
 284 Electrical Engineer
 285 Rural Dean and Vicar of Cheshunt
 286 E
 287 E
 288 E
 289 Organ Scholar, St.Paul's Cathedral
 290 E
 291 Schoolmaster
 292 Chartered Accountant
 293 E
 294 E
 295 E
 296 Consultant Surgeon, Dumfries & Galloway Royal Infirmary
 297 Banking
 Freelance musician-orchestrator,arranger,songwriter,bass guitar
 298 player,professional choral singer,currently working with pop and
 299 E
 300 Petroleum Engineer
 301 Regular Army
 302 Regular Army(Royal Engineers)
 303 E
 304 Bank of England
 305 National Farmers' Union
 306 Fellow & Tutor, Peterhose Oxford
 307 D
 308 E
 309 Director of a design company
 310 Organist Emeritus, St.Mary's, Bryanston Square
 311 Senior Photographer, Woodmasterne Ltd.
 312 D
 313 Baltic Exchange
 314 E
 315 E
 316 E
 317 Medical Practitioner
 318 Company Secretary
 319 Fellow in English, Trinity College, Cambridge
 320 E
 321 Assistnt master, Sedbergh School
 322 Move planned to Toronto

323 E
324 E
325 D
326 Bank of England
327 Chartered Accountant
328 Organ Scholar, St.George's Church, Beckenham
329 Bank of England
330 Director, Parkland Manufacturing Co.Ltd
331 E
332 Division Chief, Financial Operations Dept, World Bank, Washington
333 Assistant Director, Commonwealth Secretariat
334 D
335 Member, British Computer Society
336 Priest
337 D
338 Rolls Royce Research Laboratory
339 Director of Music, Cranbrook School
340 Petroleum Engineer
341 Vicar of Siddington & Preston
342 E
343 E
344 E
345 E
346 D
347 E
348 E
349 National Westminster Bank
350 E
351 Merchant Navy
352 Composer and Music Producer
353 E
354 E
355 D
356 Banking
357 Banking
358 D
359 Composer
360 Architect, Timber Research and Development Association, High Wycombe
361 Farmer in New Zealand
362 Salisbury and Wells Theological College. Vicar of St.Mary's Primrose
363 E
364 E
365 E
366 Vicar of St.John's Devoran, and medical social worker
367 Marketing & Publishing Consultant
368 With Cavendish Furnishing Co.,
369 E
370 Underwriting member of Lloyds
371 D
372 Probation Officer
373 E
374 With South London Motor's, Streatham
375 Staff Relations, Manager
376 D

377 Business Communications Consultancy
378 Manager, Smithfield Meat Market
379 Purveyor of meat
380 Research Chemist
381 Legal & General Assurance Society
382 Master Mariner
383 Vicar of Aldingborne, Sussex
384 Lecturer
385 Secretary, South & Est African Steamship Confederation, London
386 Farm Manager, Cotswolds
387 Violinist
388 Lecturer in English, University of Roskilde, Denmark
389 The London Hospital Dental Surgeon
390 Lay Clerk, Manchester Cathedral
391 Architect
392 E
393 Chartered Accountant
394 E
395 E
396 E
397 E
398 Engineer, formerly with Lever Bros
399 E
400 Engineering Consultant
401 E
402 Land Agent
403 Headmaster
404 Box Office Manager, Wembley Stadium
405 Westminster Bank
406 E
407 Staff of B.O.A.C
408 Highway Surveyor
409 D
410 Composer
411 E
412 Business Consultant
413 D
414 Non-chorister day-boy
415 Decca Record Company, R &D
416 Sound Engineer/Special Effects, TV and Film
417 Organ builder, Canterbury Organ Co.Ltd.
418 E
419 E
420 E
421 Lecturer, Norfolk College of Arts & Technology
422 In business
423 E
424 Teaching English in Italy
425 Chartered Accountant
426 E
427 Solicitor
428 Medical Practitioner
429 Bank of England
430 Guy's Hospital. Doctor

431 Principal Bassoon, Royal Ccottish National Orchestra
432 Assistant Master, Eton College
433 City of Birmingham Symphony Orchestra
434 Ear, Nose & Throat Surgeon, Portsmouth
435 E
436 E
437 Barclays Bank, Covent Garden branch
438 E
439 Went back to Australia
440 Westminister Hospital (Pharmacy)
441 E
442 Company Director, Building Industry
443 Keyboard Player
444 Violinist, Royal Opera House Orchestra, Covent Garden
445 E
446 E
447 Organ Scholar, St.Paul's Cathedral
448 Engineer
449 E
450 Tenor Vicar-Choral, St.Paul's Cathedal
451 Senior Partner, Saundrers & Co., Solicitors, Putney
452 Cellist, London Symphony Orchestra
453 Local Government Officer
454 Senior Lecturer in Businesss Studies, Melton Mowbray College
455 Architect
456 Farmer
457 D
458 E
459 E
460 E
461 E
462 D
463 D
464 E
465 Ceramic Industry Director
466 D
467 Nashotah House, Wisconsin. Priest
468 Chartered Accountant
469 Investment Manager
470 Priest
471 Gas Light & Coke CO., Imperial House, Fulham, London
472 E
473 Accountant
474 E
475 Lecturer in modern history, St.Andrews University
476 With Cable & Witrless Ltd.,Kingdton, Jamaica, and later Malta
477 D
478 E
479 D
480 Cost Accountant, Tabacoo CO. of India
481 Organ Scholar
482 D
483 Marketing Personal Systems with IBM in Paris
484 D

485 E
 486 Formerly with Butler & Tanner, Printers, Frome
 487 D
 488 D
 489 Electrical Engineer
 490 Engineer
 491 Organ Scholar & Master of the Choristers, Exeter College, Oxford
 492 Theological Union, Berkeley, California
 493 E
 494 Local Government Officer
 495 Formerly with Reuters, Colombo, Ceylon
 496 E
 497 Singer, Formerly Vicar-Choral, St. Paul's Cathedral
 498 E
 499 E
 500 Solicitor
 501 Vice-Principal, Brackenhurst College, Southwell, Notts
 502 Linguist
 503 Computer Sales Executive
 504 E
 505 Proprietor, Telecommunications Consultancy Services
 506 Assistant Master, North Down Hill Preparatory School
 507 Chartered Accountant
 508 Rector, St. Sepulchre's Holborn
 509 E
 510 E
 511 Lloyds Bank (Deputy Manager, Law Courts)
 512 E
 513 E
 514 E
 515 E
 516 Barrister
 517 E
 518 Director of Public Sector Services, Price Waterhouse Europe
 519 House Tutor, Greenhill House, Sherborne
 520 Engineer
 521 Tutor, Royal Northern College of Music
 522 In publishing, with Longmans
 523 With Lloyds Bank
 524 E
 525 E
 526 Peripatetic and private music teacher
 527 E
 528 Accountant
 529 E
 530 Formerly with Foley, Son and Mundy, Auctioneers, Clarendon
 531 With United Africa Co., P.O Box 201
 532 Bandmaster
 533 E
 534 E
 535 E
 536 D
 537 E
 538 Production Engineer (Aerospace), Abatec Staff Consultants

539 With Mount Rose Mining Co., British Columbia
540 Designer
541 Composer
542 Writer, motoring magazine 'Auto Express'
543 Surveyor
544 Social worker
545 Vicar, Christ Church, Epson
456 Musician (Freelance trumpeter and teacher)
547 banking
548 Hoogleraar at the Higher Institute for Translators and Interpreter
549 E
550 E
551 E
552 E
553 Sub-editor, Bradford Telegraph & Argus
554 International Marketing Director, Mars Incorporated, Washington
555 Accountant, Assessor and Receiver, Melbourne Water Services
556 Paper technologist

番号 職業1 日本語訳

- 1 E
- 2 D
- 3 講師
- 4 オペラ指揮者、ディレクター
- 5 経営者
- 6 音楽評論家
- 7 株式仲介人
- 8 木管楽器部の先生とオーケストラの指導員
- 9 E
- 10 E
- 11 経営者
- 12 E
- 13 牧師（施設付き司祭）
- 14 E
- 15 社会事業（地方自治体）
- 16 経営者
- 17 エンジニア
- 18 フリーイラストレーター
- 19 E
- 20 事務弁護士
- 21 男性教師
- 22 E
- 23 テレビのプロデューサー
- 24 経営者
- 25 英国陸海空軍
- 26 英国軍高官
- 27 男優
- 28 E
- 29 E
- 30 エンジニア
- 31 音楽家
- 32 銀行
- 33 E
- 34 E
- 35 E
- 36 D
- 37 医療
- 38 E
- 39 財政アドバイザー
- 40 校長
- 41 医療
- 42 音楽教師
- 43 医療
- 44 株式仲介人
- 45 牧師
- 46 D
- 47 E
- 48 オルガニスト
- 49 公認会計士
- 50 公務員
- 51 E
- 52 D
- 53 E

- 54 都市計画
- 55 E
- 56 作曲家
- 57
- 58 D
- 59 クラリネット奏者、ミュージカルディレクター
- 60 E
- 61 インテリアデザイナー
- 62 E
- 63 E
- 64 E
- 65 E
- 66 E
- 67 投資経営者
- 68 E
- 69 ヴァイオリニスト
- 70 校長
- 71 E
- 72 宝石商
- 73 E
- 74 E
- 75 E
- 76 クラリネット奏者
- 77 E
- 78 E
- 79 D
- 80 ミュージカルディレクター
- 81 E
- 82 航空交通管制官シドニー空港
- 83 E
- 84 E
- 85 E
- 86 公認会計士
- 87 コンピュータシステムアナリスト、PCLコンピューターサービス社
- 88 E
- 89 E
- 90 E
- 91 E
- 92 顧問麻酔専門医
- 93 D
- 94 全国的な博物館管理官
- 95 E
- 96 オックスフォード工芸学校
- 97 D
- 98 銀行
- 99 音楽監督
- 100 E
- 101 ホテルと仕出し管理
- 102 副校長と音楽監督
- 103 アシスタント音楽監督
- 104 D
- 105 作曲家 編曲家 ピアニスト キーボード
- 106 校長 オルガニスト兼音楽評論家
- 107 オペラ指揮者

- 108 保険相談役
- 109 E
- 110 スコットランド急行の管理者
- 111 退職
- 112 B.B.Cプロデューサー
- 113 事務弁護士と総務担当重役
- 114 化学工学技術者
- 115 俳優と劇場ディレクター ロンドン舞台芸術大学校長
- 116 秘書
- 117 D
- 118 E
- 119 E
- 120 E
- 121 音楽監督（学校）
- 122 精神療法医
- 123 E
- 124 E
- 125 E
- 126 E
- 127 イギリス連邦協会（最近はブラジルの）退職
- 128 E
- 129 校長
- 130 牧師
- 131 チェロ奏者
- 132 E
- 133 保険
- 134 男優
- 135 マーチャント銀行家、ニューヨーク、U.S.A
- 136 開業医
- 137 電気楽器の販売
- 138 E
- 139 農家
- 140 E
- 141 コメディアン
- 142 音楽家（ヴァイオリニスト）
- 143 オルガニスト兼聖歌隊指揮者
- 144 インディアナ大学の音楽の准教授
- 145 英国陸軍工兵隊
- 146 公認の測量士
- 147 オーボエ奏者
- 148 会計係、イングランド銀行
- 149 顧問積算士
- 150 D
- 151 海上保険引受業者
- 152 E
- 153 E
- 154 E
- 155 作曲家、指揮者、伴奏者
- 156 E
- 157 国際的な銀行業務
- 158 契約相談役、エレクトロニクス産業
- 159 E
- 160 歴史の教師
- 161 E

162 E
163 寮長 生物教師
164 国立劇場の案内係
165 E
166 正規軍
167 会社経営者
168 時事プロデューサー、オーストラリアラジオ
169 財政ジャーナリスト
170 英国文化協会視学官
171 教会オルガニスト
172 正規軍
173 館長、考古学と民族学博物館、ケンブリッジ
174 音楽監督 学校
175 E
176 作家と編集コンサルタント
177 男優
178 E
179 D
180 D
181 ペンキ会社の技術部門代表
182 スペイン語の教授
183 税部門、プライスウォーターハウス
184 バイオリン教師
185 D
186 E
187 工場の監査官
188 E
189 E
190 E
191 警察官
192 音楽講師、教育学部研究、ワーウィック大学
193 教会主管者
194 E
195 指揮者 数多くのオーケストラ
196 E
197 法廷弁護士：一般的な慣習法、計画と環境法律
198 聖職者
199 D
200 植民地警官と外務省官僚
201 建築家
202 基金管理
203 エージェント
204 商人
205 図書館員
206 会計係
207 病院勤務 開業医
208 E
209 聖職者
210 E
211 E
212 製紙業者
213 オルガニスト セントポール大聖堂
214 システムアナリスト
215 E

216 E
217 E
218 D
219 電気技師
220 技術マネージャー
221 E
222 E
223 E
224 作曲家 大学教師
225 経営コンサルタント
226 E
227 E
228 E
228 D
230 歴史家
231 教授
232 公認の測量士
233 歌手 (バリトン)
234 聖職者
235 オルガン奏者
236 E
237 E
238 ヴィオラ奏者
239 ギルドホール音楽学校の先生と室内楽コーチ
240 人事部長
241 E
242 E
243 音楽家 フリーの歌手と合唱ディレクター
244 D
245 D
246 E
247 E
248 心臓外科医
249 E
250 E
251 歌手
252 法律(法廷弁護士?)
253 E
254 動物園 (ロンドン動物学会) のディレクター
255 事務弁護士
256 E
257 E
258 E
259 E
260 D
261 E
262 E
263 オルガン奨学生 ウェールズ大聖堂
264 E
265 不適応児の先生
266 織物工業代表
267 D
268 E
269 ランカシャポリテクニックで法律を勉強

270 聖歌隊員、ウスター大聖堂
271 音楽スタッフ 英国オペラ
272 常務
273 聖歌隊長とオルガニスト
274 E
275 投資バンキング
276 オルガニスト クライストチャーチ
277 アメリカへ移住
278 E
279 E
280 正規軍
281 投資会社のディレクター
282 銀行業務
283 会社
284 電気技師
285 地方参事と牧師
286 E
287 E
288 E
289 オルガン奨学生 セント・ポール大聖堂
290 E
291 校長
292 特許会計士
293 E
294 E
295 E
296 顧問外科医
297 銀行業務

298 フリーの音楽家
299 E
300 石油エンジニア
301 正規軍
302 正規軍 (英国工兵隊)
303 E
304 イングランド銀行
305 全国農業組合
306 大学の特別研究員と家庭教師
307 D
308 E
309 デザイン会社のディレクター
310 オルガン奏者名誉教授
311 上級カメラマン
312 D
313 バルティック商業海運取引所
314 E
315 E
316 E
317 開業医
318 総務担当重役
319 ケンブリッジ大学の特別研究員 (英語)
320 E
321 副校長
322 トロントへ移動する予定

323 E
324 E
325 D
326 イングランド銀行
327 特許会計士
328 オルガン奨学生
329 イングランド銀行
330 取締役
331 E
332 財政的部門 部長
333 アシスタントディレクター、連邦事務局
334 D
335 メンバー、英国コンピューター協会
336 聖職者
337 D
338 ロールスロイス研究所
339 学校の音楽監督
340 石油エンジニア
341 聖職者
342 E
343 E
344 E
345 E
346 D
347 E
348 E
349 ナショナルウエストミンスター銀行
350 E
351 商船
352 作曲家 音楽プロデューサー
353 E
354 E
355 D
356 銀行業務
357 銀行業務
358 D
359 作曲家
360 建築家、材木研究開発協会
361 ニュージーランドで農家
362 聖職者
363 E
364 E
365 E
366 牧師と医療社会事業士
367 マーケティングと出版顧問
368 家具
369 E
370 ロイズの引受業務メンバー
371 D
372 保護観察官
373 E
374 南ロンドンモーター
375 スタッフ関係、マネージャー
376 D

377 ビジネス通信コンサルティング
378 マネージャー、スミスフィールド精肉市場
379 肉調達人
380 研究化学者
381 法律と一般的な保険の団体
382 熟練の水夫
383 聖職者
384 講師
385 秘書、南とエストアフリカの汽船連合（ロンドン）
386 農場マネージャー、コッツウォルド
387 ヴァイオリニスト
388 英語の講師 デンマークの大学
389 歯科医
390 教会書記 マンチェスター大聖堂
391 建築家
392 E
393 特許会計士
394 E
395 E
396 E
397 E
398 エンジニア
399 E
400 エンジニアリング顧問
401 E
402 地所管理人
403 校長
404 ボックスオフィスマネージャー
405 ウェストミンスター銀行
406 E
407 スタッフ
408 道路測量士
409 D
410 作曲家
411 E
412 ビジネス顧問
413 D
414
415 レコード会社
416 音響技師
417 オルガン製作者
418 E
419 E
420 E
421 大学の講師
422 ビジネス
423 E
424 イタリアで英語を教えている
425 特許会計士
426 E
427 事務弁護士
428 開業医
429 イングランド銀行
430 医者

431 主席バソン奏者
432 副校長, イートン校
433 バーミンガム交響楽団
434 耳、鼻とのど外科医
435 E
436 E
437 バークレーズ銀行、コベントガーデン
438 E
439 オーストラリアに帰った
440 ウェストミンスター病院 (薬学)
441 E
442 会社取締役
443 キーボード奏者
444 ヴァイオリニスト、ロイヤルオペラハウスオーケストラ
445 E
446 E
447 オルガン奨学生、セント・ポール大聖堂
448 エンジニア
449 E
450 テノール 聖歌隊
451 シニアパートナー、事務弁護士
452 チェロ奏者 ロンドン交響楽団
453 地方政府事務官
454 ビジネス研究 上級講師
455 建築家
456 農家
457 D
458 E
459 E
460 E
461 E
462 D
463 D
464 E
465 セラミック産業
466 D
467 聖職者
468 特許会計士
469 投資マネージャー
470 聖職者
471 気体関係会社
472 E
473 会計士
474 E
475 大学の現代史の講師
476 会社
477 D
478 E
479 D
480 原価会計士
481 オルガン奨学生
482 D
483 マーケティングの個人システム
484 D

485 E
486 印刷会社
487 D
488 D
489 電気技師
490 エンジニア
491 オルガン奨学生、聖歌隊長、オックスフォード
492 神学団体
493 E
494 地方政府事務官
495 会社
496 E
497 歌手、セント・ポール大聖堂聖歌隊
498 E
499 E
500 事務弁護士
501 副学長
502 語学者
503 コンピューターセールス
504 E
505 経営者
506 副校長 プレパラトリースクール
507 特許会計士
508 教区司祭
509 E
510 E
511 ロイズ銀行(課長代理)
512 E
513 E
514 E
515 E
516 法廷弁護士
517 E
518 公共部門サービス (プライスウォーターハウスヨーロッパ) 局長
519 ハウスチューター
520 エンジニア
521 音楽大学のチューター
522 出版
523 銀行
524 E
525 E
526 民間の音楽の先生
527 E
528 会計士
529 E
530 競売人
531 会社
532 バンドマスター
533 E
534 E
535 E
536 D
537 E
538 生産エンジニア (航空宇宙)

539 会社
540 デザイナー
541 作曲家
542 記者
543 測量士
544 社会事業
545 聖職者
456 音楽家(フリーのトランペット奏者と先生)
547 銀行業務
548 翻訳者と通訳のための大学研究所
549 E
550 E
551 E
552 E
553 編集補佐
554 国際的なマーケティングディレクター
555 会計士、査定人と管財人
556 紙科学技術者

番号 職業 2

- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10
- 11
- 12
- 13
- 14
- 15
- 16
- 17
- 18 Folk Guitarist
- 19
- 20
- 21
- 22
- 23
- 24
- 25
- 26
- 27
- 28
- 29
- 30
- 31
- 32
- 33
- 34
- 35
- 36
- 37
- 38
- 39
- 40 Landscape Architect
- 41
- 42
- 43
- 44
- 45
- 46
- 47
- 48 Engineers
- 49
- 50
- 51
- 52
- 53

54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86 Partner in Coopers & Lybrand Deloitte
87 Member, Tunstall Choir
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102 Organist&Choirmaster, Bembrigr Parish Church
103 Conductor, London Philhamrmonic Choir
104
105
106
107

108
109
110
111
112
113
114
115
116 Director of Music Aldeburgh Parish Church
117
118
119
120
121 Organist&Choirmaster
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139 Musical Director,Beaminster Singers
140
141
142
143 Piano & Theory Teacher
144
145
146 Church music leader
147
148 Churchwarden & Choirmaster
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161

162
163
164
165
166 Churchwarden
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200 Mentioned in Dispatches
201
202
203 Freelance Organist & Choirmaster
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213 Organ recitalist. Couductor
214
215

216
217
218
219
220
221
222
223
224
225 Organist & Choirmaster, St.Mary's,Oatlands, Weybridge
226
227
228
228
230 Editor of the Tenth Edition of the School Register
231 Organist
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255 Oil Company Executive
256
257
258
259
260
261
262
263
264 E
265 his house as a small Residential Care Home
266
267
268
269

270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282 Associated Board of the Royal Schools of Music
283 Granite Merchants, Hammersmith
284
285
286
287
288
289 Director of Music, St.Mary's Warwick
290
291
292 Managing Director
293
294
295
296
297

298
299
300
301 Foreign & Commonwealth Office
302 Technical Writer on precision instruments
303
304 British Police Force, Jerusalem
305
306 Author and Historian
307
308
309
310 Professor R.A.M
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321 Director, early music group
322

323
324
325
326
327
328
329
330
331
332 Music Director & Organisit, St.Philip's Catholic Church
333
334
335 In Government computing
336 Choirmaster
337
338
339 Organist, St.Jhon's Cathedral,Newfoundland
340 Applications engineer
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351 Pigott& Chapmans, Exchange Brokers
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361 Estate Agent
362 Director of English Hymnal Company
363
364
365
366
367
368
369
370 Company Director, Insurance
371
372
373
374
375
376

377
378
379
380
381 Tenor in Choral Societies and Church Society
382
383
384
385
386
387 Director of Music, Eastbourne College
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400 Former member of Elizabethan Singers, Louis Halsey Singers and Clerkes of O:
401
402
403 Member of the Company of the Cross
404
405
406
407
408
409
410 Music Editor, Novello & Co.Ltd.
411
412
413
414
415
416
417 The Canterbury Clerkes. Assistant conductor.
418
419
420
421 Choirmaster, St.Paul's Cathedral, Rockhampton
422
423
424
425 Musician's Benevolent Fund
426
427
428
429 subsequently Executive, British Bankers' Association
430

431
432
433 Freelance classical musician-oboist and singer(Tenor)
434 Conductor
435
436
437
438
439
440
441
442
443 Composer & arranger, recording music for TV and commercial in his own studi
444
445
446
447 Organist & Choiral Director, Upper Canada College, Toronto
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484

485
486
487
488
489
490
491
492 Rector, North Stoneham & Bassett, Southampton
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502 Lecturer, University of Freiburg-im-Breisgau, Germany
503 Company Director
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521 Cellist. Conductor.
522 Organist, Debden Parish Church
523 Organs adviser, Chichester diocese
524
525
526 Music Director, St. Michael's Winterbourne
527
528
529
530
531
532 Wind Instrument Instructor, Dean Close School
533
534
535
536
537
538

539
540 Proprietor, 'Woodstyle', makers of tailor-made furniture
541 Teacher of Music/Youth Music
542
543
544 Member, West Midlands County Council
545 Rural Dean of Epsom
456 District Agent with the Forum of Private Business
547 mature music student at Surrey College of Music, Ewell, Surrey
548 Chief Editor of Linguistoca Antverpiensia
549
550
551
552
553
554 Organist & Choir Director, St.Luke's Presbyterian Church , Atlanta
555
556

番号 職業2 日本語訳

職業分類

海外移住者

不明・退職・学生

死亡

教師・大学人

音楽関係

ビジネス

音楽関係

海外

金融

音楽関係

不明・退職・学生

不明・退職・学生

ビジネス

不明・退職・学生

国教会・教会関係

不明・退職・学生

行政官・政治家

ビジネス

科学・技術

音楽関係

不明・退職・学生

法律

教師・大学人

不明・退職・学生

メディア・舞台

ビジネス

軍人

軍人

メディア・舞台

不明・退職・学生

不明・退職・学生

科学・技術

音楽関係

金融

不明・退職・学生

不明・退職・学生

不明・退職・学生

死亡

医療

不明・退職・学生

金融

教師・大学人

医療

音楽関係

医療

金融

国教会・教会関係

死亡

不明・退職・学生

音楽関係

金融

行政官・政治家

不明・退職・学生

死亡

不明・退職・学生

18 フォークギターリスト

54	その他	
55	不明・退職・学生	
56	音楽関係	
57	不明・退職・学生	
58	死亡	
59	音楽関係	
60	不明・退職・学生	海外
61	芸術	
62	不明・退職・学生	
63	不明・退職・学生	
64	不明・退職・学生	
65	不明・退職・学生	
66	不明・退職・学生	海外
67	ビジネス	
68	不明・退職・学生	
69	音楽関係	
70	教師・大学人	
71	不明・退職・学生	
72	ビジネス	
73	不明・退職・学生	
74	不明・退職・学生	
75	不明・退職・学生	
76	音楽関係	
77	不明・退職・学生	
78	不明・退職・学生	
79	死亡	
80	メディア・舞台	
81	不明・退職・学生	海外
82	その他	
83	不明・退職・学生	
84	不明・退職・学生	
85	不明・退職・学生	
86	金融	
87	科学・技術	
88	不明・退職・学生	
89	不明・退職・学生	
90	不明・退職・学生	
91	不明・退職・学生	
92	医療	
93	死亡	
94	芸術	
95	不明・退職・学生	
96	不明・退職・学生	
97	死亡	
98	金融	
99	音楽関係	
100	不明・退職・学生	
101	ビジネス	
102	オルガニスト兼聖歌隊指揮者	
103	聖歌隊の指揮者	
104	死亡	
105	音楽関係	
106	音楽関係	
107	音楽関係	海外

108	金融	
109	不明・退職・学生	
110	ビジネス	
111	不明・退職・学生	
112	メディア・舞台	
113	法律	
114	科学・技術	
115	メディア・舞台	
116 音楽監督 教会	音楽関係	
117	死亡	
118	不明・退職・学生	
119	不明・退職・学生	
120	不明・退職・学生	
121 オルガニスト兼聖歌隊指揮者	音楽関係	
122	医療	
123	不明・退職・学生	
124	不明・退職・学生	
125	不明・退職・学生	
126	不明・退職・学生	
127	行政官・政治家	
128	不明・退職・学生	
129	教師・大学人	
130	国教会・教会関係	
131	音楽関係	海外
132	不明・退職・学生	
133	金融	
134	メディア・舞台	
135	金融	
136	医療	
137	音楽関係	
138	不明・退職・学生	
139 音楽監督	音楽関係	
140	不明・退職・学生	
141	メディア・舞台	
142	音楽関係	
143 ピアノと楽典の先生	音楽関係	
144	音楽関係	
145	軍人	
146 教会音楽リーダー	音楽関係	
147	音楽関係	
148 教区委員と聖歌隊指揮者	音楽関係	
149	その他	
150	死亡	
151	金融	
152	不明・退職・学生	
153	不明・退職・学生	
154	不明・退職・学生	
155	音楽関係	
156	不明・退職・学生	
157	金融	
158	ビジネス	
159	不明・退職・学生	
160	教師・大学人	
161	不明・退職・学生	

162	不明・退職・学生	
163	教師・大学人	
164	メディア・舞台	
165	不明・退職・学生	
166 教区委員	軍人	
167	ビジネス	
168	メディア・舞台	海外
169	その他	
170	その他	
171	音楽関係	
172	軍人	海外
173	芸術	
174	音楽関係	
175	不明・退職・学生	海外
176	その他	
177	メディア・舞台	
178	不明・退職・学生	
179	死亡	
180	死亡	
181	科学・技術	海外
182	教師・大学人	
183	ビジネス	
184	音楽関係	
185	死亡	
186	不明・退職・学生	
187	ビジネス	
188	不明・退職・学生	
189	不明・退職・学生	
190	不明・退職・学生	
191	その他	
192	教師・大学人	
193	国教会・教会関係	
194	不明・退職・学生	
195	音楽関係	
196	不明・退職・学生	
197	法律	
198	国教会・教会関係	
199	死亡	
200	行政官・政治家	
201	その他	
202	ビジネス	
203 フリーのオルガン奏者と聖歌隊指揮者	音楽関係	
204	ビジネス	
205	その他	
206	金融	
207	医療	
208	不明・退職・学生	
209	国教会・教会関係	
210	不明・退職・学生	
211	不明・退職・学生	
212	ビジネス	
213	音楽関係	
214	ビジネス	海外
215	不明・退職・学生	

216	不明・退職・学生	
217	不明・退職・学生	
218	死亡	
219	科学・技術	海外
220	科学・技術	
221	不明・退職・学生	
222	不明・退職・学生	
223	不明・退職・学生	
224	音楽関係	
225 オルガニスト兼聖歌隊指揮者	音楽関係	
226	不明・退職・学生	
227	不明・退職・学生	
228	不明・退職・学生	
228	死亡	
230 第10版学校レジスターの編集長	その他	
231 オルガニスト	音楽関係	
232	その他	
233	音楽関係	
234	国教会・教会関係	
235	音楽関係	
236	不明・退職・学生	
237	不明・退職・学生	
238	音楽関係	
239	音楽関係	
240	ビジネス	海外
241	不明・退職・学生	
242	不明・退職・学生	
243	音楽関係	
244	死亡	
245	死亡	
246	不明・退職・学生	
247	不明・退職・学生	
248	医療	
249	不明・退職・学生	
250	不明・退職・学生	
251	音楽関係	
252	法律	
253	不明・退職・学生	
254	その他	
255 石油会社役員	法律	
256	不明・退職・学生	
257	不明・退職・学生	
258	不明・退職・学生	
259	不明・退職・学生	
260	死亡	
261	不明・退職・学生	
262	不明・退職・学生	
263	音楽関係	
264	不明・退職・学生	
265 彼の家は居住看護の家	教師・大学人	
266	ビジネス	
267	死亡	
268	不明・退職・学生	
269	法律	

270	音楽関係	
271	音楽関係	
272	ビジネス	
273	音楽関係	
274	不明・退職・学生	
275	金融	
276	音楽関係	海外
277	不明・退職・学生	海外
278	不明・退職・学生	
279	不明・退職・学生	
280	軍人	
281	ビジネス	
282 音楽の王立学部 of 連合役員会	金融	
283 花崗岩商	ビジネス	
284	科学・技術	
285	国教会・教会関係	
286	不明・退職・学生	
287	不明・退職・学生	
288	不明・退職・学生	
289 音楽監督	音楽関係	
290	不明・退職・学生	
291	教師・大学人	
292 常務	金融	
293	不明・退職・学生	
294	不明・退職・学生	
295	不明・退職・学生	
296	医療	
297	金融	
298	音楽関係	
299	不明・退職・学生	
300	科学・技術	
301 外国と連邦オフィス	軍人	
302 精密機器関係	軍人	
303	不明・退職・学生	海外
304 英国警察、エルサレム	金融	
305	ビジネス	
306 著者 歴史家	教師・大学人	
307	死亡	
308	不明・退職・学生	
309	芸術	
310 教授	音楽関係	
311	芸術	
312	死亡	
313	ビジネス	
314	不明・退職・学生	
315	不明・退職・学生	
316	不明・退職・学生	
317	医療	
318	ビジネス	
319	教師・大学人	
320	不明・退職・学生	
321 古典音楽グループの監督	音楽関係	
322	不明・退職・学生	

323	不明・退職・学生	
324	不明・退職・学生	
325	死亡	
326	金融	
327	金融	
328	音楽関係	
329	金融	
330	ビジネス	
331	不明・退職・学生	
332 音楽監督兼オルガニスト	音楽関係	海外
333	行政官・政治家	
334	死亡	
335 政府のコンピューター関係	行政官・政治家	
336 聖歌隊長	音楽関係	
337	死亡	
338	科学・技術	
339 オルガニスト	音楽関係	
340 アプリケーションエンジニア	科学・技術	
341	国教会・教会関係	
342	不明・退職・学生	
343	不明・退職・学生	
344	不明・退職・学生	
345	不明・退職・学生	
346	死亡	
347	不明・退職・学生	
348	不明・退職・学生	
349	金融	
350	不明・退職・学生	
351 取引所ブローカー	ビジネス	
352	音楽関係	
353	不明・退職・学生	
354	不明・退職・学生	
355	死亡	
356	金融	
357	金融	
358	死亡	
359	音楽関係	
360	芸術	
361 不動産業者	その他	
362 イギリスの賛美歌集会社のディレクター	国教会・教会関係	
363	不明・退職・学生	
364	不明・退職・学生	
365	不明・退職・学生	
366	国教会・教会関係	
367	ビジネス	
368	ビジネス	
369	不明・退職・学生	
370 会社取締役、保険	ビジネス	
371	死亡	
372	その他	
373	不明・退職・学生	
374	ビジネス	
375	その他	
376	死亡	

377	ビジネス	
378	ビジネス	
379	ビジネス	
380	科学・技術	
381 教会関係合唱団のテノール	音楽関係	
382	その他	
383	国教会・教会関係	
384	教師・大学人	
385	ビジネス	
386	その他	
387 音楽監督	音楽関係	
388	教師・大学人	海外
389	医療	海外
390	国教会・教会関係	
391	芸術	
392	不明・退職・学生	
393	金融	
394	不明・退職・学生	
395	不明・退職・学生	
396	不明・退職・学生	
397	不明・退職・学生	
398	科学・技術	
399	不明・退職・学生	
400 合唱団のメンバー	音楽関係	
401	不明・退職・学生	
402	その他	
403 会社のメンバー	教師・大学人	海外
404	ビジネス	
405	金融	
406	不明・退職・学生	
407	その他	
408	科学・技術	
409	死亡	
410 音楽編集者	音楽関係	
411	不明・退職・学生	
412	ビジネス	
413	死亡	
414	不明・退職・学生	
415	音楽関係	
416	科学・技術	
417 副指揮者	音楽関係	
418	不明・退職・学生	
419	不明・退職・学生	
420	不明・退職・学生	
421 聖歌隊長	音楽関係	
422	ビジネス	
423	不明・退職・学生	
424	教師・大学人	海外
425 音楽家の慈善的な基金	音楽関係	
426	不明・退職・学生	
427	法律	
428	医療	
429 銀行協会の相談役	金融	
430	医療	

431		音楽関係	
432		教師・大学人	
433	フリーのクラシック音楽家-オーボエ奏者と歌手(テノール)	音楽関係	
434	指揮者	音楽関係	
435		不明・退職・学生	
436		不明・退職・学生	
437		金融	
438		不明・退職・学生	
439		不明・退職・学生	海外
440		医療	
441		不明・退職・学生	
442		ビジネス	
443	作曲家、編曲家、テレビ関係	音楽関係	
444		音楽関係	
445		不明・退職・学生	
446		不明・退職・学生	
447		音楽関係	海外
448		科学・技術	
449		不明・退職・学生	
450		音楽関係	
451		法律	
452		音楽関係	
453		行政官・政治家	
454		教師・大学人	
455		芸術	
456		その他	
457		死亡	
458		不明・退職・学生	
459		不明・退職・学生	
460		不明・退職・学生	
461		不明・退職・学生	
462		死亡	
463		死亡	
464		不明・退職・学生	
465		科学・技術	
466		死亡	
467		国教会・教会関係	
468		金融	
469		ビジネス	
470		国教会・教会関係	
471		ビジネス	
472		不明・退職・学生	
473		金融	
474		不明・退職・学生	
475		教師・大学人	
476		ビジネス	
477		死亡	
478		不明・退職・学生	
479		死亡	
480		ビジネス	
481		音楽関係	
482		死亡	
483		ビジネス	海外
484		死亡	

485		不明・退職・学生	
486		ビジネス	
487		死亡	
488		死亡	
489		科学・技術	
490		科学・技術	
491		音楽関係	
492	教区司祭	国教会・教会関係	
493		不明・退職・学生	
494		行政官・政治家	
495		ビジネス	
496		不明・退職・学生	
497		音楽関係	
498		不明・退職・学生	
499		不明・退職・学生	
500		法律	
501		教師・大学人	
502	大学の講師	教師・大学人	海外
503	会社取締役	ビジネス	
504		不明・退職・学生	海外
505		ビジネス	
506		教師・大学人	
507		金融	海外
508		国教会・教会関係	
509		不明・退職・学生	
510		不明・退職・学生	
511		金融	
512		不明・退職・学生	
513		不明・退職・学生	
514		不明・退職・学生	
515		不明・退職・学生	
516		法律	
517		不明・退職・学生	
518		ビジネス	
519		教師・大学人	
520		科学・技術	
521	チェロ奏者、指揮者	音楽関係	
522	オルガニスト	音楽関係	
523	オルガンアドヴァイザー	音楽関係	
524		不明・退職・学生	
525		不明・退職・学生	
526	音楽ディレクター	音楽関係	
527		不明・退職・学生	
528		金融	
529		不明・退職・学生	
530		ビジネス	
531		ビジネス	
532	管楽器インストラクター	音楽関係	
533		不明・退職・学生	
534		不明・退職・学生	
535		不明・退職・学生	
536		死亡	
537		不明・退職・学生	
538		科学・技術	

539
540 経営者、家具メーカー
541 音楽教師
542
543
544 メンバー、ウェストミッドランズ州議会
545 エプソムの地方参事
456 私企業のフォーラムをもつ地区エージェント
547 サリー音楽大学の社会人音楽学生
548 編集長
549
550
551
552
553
554 オルガニストと聖歌隊ディレクター
555
556

ビジネス
芸術
音楽関係
ビジネス
科学・技術
行政官・政治家
国教会・教会関係
音楽関係
金融
その他
不明・退職・学生
不明・退職・学生
不明・退職・学生
不明・退職・学生
ビジネス
音楽関係
金融
科学・技術